

# かながわの考古学

2008.3

財団法人 かながわ考古学財団

# かながわの考古学

2008.3

財団法人 かながわ考古学財団

## はじめに

今年度も、各時代の研究プロジェクトチームから提出された共同研究と個人研究の成果を掲載することができました。

縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世、近世の各研究プロジェクトチームは、設定したテーマの継続研究を、旧石器時代、奈良・平安時代は新たなテーマを掲げて研究を行ってまいりました。

今後ともこうしたグループの共同研究を進めることによって、職員の資質向上が図られ、より充実した内容が発表されることを期待しております。

本書が埋蔵文化財の調査や考古学研究に広く活用されることを願うとともに、皆様方の一層のご指導とご教示を賜りますようお願い申し上げます。

2008年3月

財団法人 かながわ考古学財団  
理事長 伊藤 啓三

## 目 次

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その1) - L1S~L1H層(1)- 旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅵ -後期初頭期 称名寺式土器文化期の様相 その3 文化的様相(1)- 縄文時代研究プロジェクトチーム	17
宮ノ台式土器の研究(6) 弥生時代研究プロジェクトチーム	31
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(5) -通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介- 古墳時代研究プロジェクトチーム	43
神奈川県における集落遺跡出土の瓦の様相 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	57
神奈川県内の「やぐら」集成(6) -「やぐら」出土遺物の分析(2)- 中世研究プロジェクトチーム	77
近世民家の集成(5) 近世研究プロジェクトチーム	93
神奈川県における製作地推定のための胎土分析の基礎的研究 -相模川・境川上流域の縄文土器を中心にして- 松田光太郎	109

## 例 言

1. 本書は、財団法人かながわ考古学財団および神奈川県教育庁教育部生涯学習文化財課の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに計画的に共同研究を行った結果を掲載する。
2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである（五十音順）。

・旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム

井関文明・大塚健一・加藤勝仁・栗原伸好・鈴木次郎・島中俊明・三瓶裕司・吉田政行・脇 幸生

・縄文時代研究プロジェクトチーム

阿部友寿・天野賢一・井辺一徳・岡 稔・小川岳人・近藤匡樹・松田光太郎・宗像義輝

・弥生時代研究プロジェクトチーム

飯塚美保・池田 治・櫻井真貴・新開基史・戸羽康一・渡辺 外

・古墳時代研究プロジェクトチーム

植山英史・柏本善治・小西絵美・林雅恵

・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

大上周三・加藤久美・河野喜映・齊藤真一・高橋 香・富永樹之・中田 英・西谷俊廣・宮井 香・  
依田亮一・渡辺清史

・中世研究プロジェクトチーム

松葉 崇・宮坂淳一・吉田智哉

・近世研究プロジェクトチーム

市川正史・木村吉行・滝谷正信

# 神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その1)

## -L1S~L1H層(1)-

### 旧石器時代研究プロジェクトチーム

#### はじめに

当プロジェクトでは、これまでグループ研究として神奈川県内の旧石器時代遺跡についての基礎資料の集成を行い検討を行ってきた。その内容は、1993年度から1998年度までは旧石器時代遺跡の立地・分布及び石器群の様相(石器組成、石材組成等)について出土層別別に集成・検討を行い、2001年度から2006年度までは旧石器時代の遺構についてやはり各層別別に集成を行って検討を加えてきた。本年度(2007年度)からは、旧石器時代遺跡の内容を明らかにするもう一つの基礎資料として、遺物の分布状態を取り上げ、層別別に集成を行って検討を加えることにしたい。遺物の分布状態は、遺構とともに遺跡での生活様式を明らかにする重要な要素で、とりわけ遺構の少ない旧石器時代では、集落研究には必須の分析項目として位置づけられる。このため、これまでに検討を行った遺構に加え、遺物分布状態を検討することにより本県の旧石器時代遺跡の内容を明らかにしていきたい。

本年度は、その第1回としてL1S層~L1H層出土石器群の分布状態について集成を行った。集成項目としては、①遺跡No、②遺跡名、③出土層位、④文化層、⑤調査面積(m<sup>2</sup>)、⑥各集中No、⑦分布範囲(○m×○m)、⑧石器点数、⑨分布密度(1m<sup>2</sup>当たりの石器点数)、⑩分布状態、⑪器種組成、⑫石材組成を取り上げた。なお、今回は集成資料が多かったため、紙面の関係から集成表の一部及び、遺跡位置図のみを掲載し、遺物分布の様相等の検討については次年度以降に改めて掲載することにした。(鈴木次郎)

遺跡No	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積(m <sup>2</sup> )	各集中No	分布範囲(m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	共存遺構	共存石器	備考
31	花見山	L1H	3	15000	1	2.9×2.4	8	1.15	散漫	F8	ホ3、流5			
31	花見山	L1H	2	15000	2	3.5×0.5	5	2.66	散漫	F5	流2、黒3、不明1			
31	花見山	L1H	3	15000	3下	不明	6		散漫	RF3、UF3	安2、流2、黒1			
31	花見山	L1H	3	15000	4	不明	4		散漫	F4	流4			
31	花見山	Va~Vi	縄	15000		43.0×37.0	1336	0.84		福33、有54、黒19、雑16、打斧8、棒刃2、指環42、棒64、削43、抉削31、楔12、RF71、UF125、燧石15、合石3、残核6、F792	安、子、流、球型穴作居址1、配石3		太珠10、細珠85、飛盤28(座51、座+爪14、爪13、無紋40、斜槽子5)	
48	長井古地	B0~L1H	Ⅲ	28	2	6.0×2.2	400	30.30	密集	MH29、MC2、核1、F1、MC調査F7、F50、C310	黒303、安6、流1			
48	長井古地	B0~L1H	Ⅲ	28	3	5.1×1.6	42	5.15	散漫	MB19、M打再F1、F6、C16	黒42			
56	矢野、久保	L1S	I			2.5×0.5	7	5.60		RF1、F6	安、点数不明			
61	田名瀬河山	L1S~B1	I	1684			4			筈、UF、F	珪凝、黒、子			

旧石器時代研究プロジェクトチーム

遺跡 No	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 No	分布 範囲 (m)	石器 点数	分布 密度	分布 状態	器種組成	石材組成	共存 遺構	共存 土器	備考
62	田名塚田 A地点 (向原)	B00	I	1	1	4.7× 2.1	27	2.74		RF1、F23、植1、 埋1、埋1	凝、玄、点数 不明			
62	田名塚田 B地点	B0	I	1	1	9.1× 8.3	772	10.22	密度 濃い	植1、ナ1、 MB107、MC18、 活・削4、植1、 埋17、RF18、 UF20、F500、 植18、埋3、器1	黒439、凝 227、水、 安、質、砂、 点散不明			配石状層
67	藤取 (第45次)	溝～ LIS	準	180㎡	1	6.0× 4.0	120	5.00		植、MC、器・削、 RF、点数不明	凝、安、? 数不 明	住居 柱状 遺構	無文19	住居柱状 遺構
67	藤取 (第45次)	溝～ LIS			2	6.0× 3.0	321	17.83		植、有、MB、植、 削、RF、点数不明	凝、安、? 数不 明		無文	
67	藤取 (第45次)	溝～ LIS	—		3	2.0× 2.0	28	7.00		植、F、点数不明	凝、安、? 数不 明			
68	中村	LIS ～ L1H	II	320㎡	1	8.2× 6.9	249	4.40	密度 薄	ナ1、MB9、MC5、 削2、埋1、植1、 UF12、台1、他 3、F212	黒、凝、チ、 砂、? 数不明	埋跡 1	—	埋跡1
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	1	1.6× 0.8	5	3.91		溝5	植3、? 数不 明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	2	2.8× 1.2	3	0.89		溝3	ナ1、? 数不 明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	3	7.0× 5.0	231	6.60		植5、ナ1、植 1、削1、RF1、 UF1、削21	チ、植、硬 砂、玄、細 凝、鉄石 系、? 数不 明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	4	3.5× 2.8	8	0.82	散漫	溝8	ナ、植、? 数 不明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	5	2.0× 2.0	4	1.00	点在	植1、削3	ナ、植、? 数 不明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	6	3.5× 1.2	11	2.62	散漫	植1、UF3、削7	ナ、植、 黒、? 数不明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	7	6.5× 4.0	161	6.19	求心 傾向	植4(2)、植1、 RF2、削154	ナ、植、硬 砂、玄、 黒、? 数不明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	8	3.0× 2.2	136	20.61	散在	植6(4)、ナ2、 UF2、RF1、削 125	ナ、植、硬 砂、玄、 黒、? 数不明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	9	5.5× 3.8	243	11.83	求心 傾向	植5(3)、ナ2、 UF1、削235	ナ、植、硬 砂、玄、 黒、? 数不明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	10	6.0× 2.5	176	11.73	散漫	植3、植1、 UF1、RF1、削 170	ナ、植、硬 砂、黒、? 数 不明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	11	1.8× 1.1	7	3.54	散漫	UF1、埋1、削5	玄、黒、? 数 不明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	12	5.7× 3.5	42	2.11	散漫	植5(4)、植1、 UF3、削33	ナ、植、硬 砂、玄、? 数 不明			2号埋跡
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	13	3.2× 2.4	12	1.56	散漫	植2、UF1、削9	玄、? 数不明			
68	中村	LISL ～ B1L	III	450㎡	14	5.0× 3.5	52	2.97	2所 集中	植7、削2、UF1、 削42	ナ、植、玄、 ? 数不明			
70	栗原中丸	LISU	I	12000	1	3.5× 2.0	6	0.99		削1、RF1、C4	植6	埋	—	
70	栗原中丸	LISU	I	12000	2	1.0× 2.5	17	6.80	南側 集中	植2、C15	植17	—	—	

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その1）

遺跡 No	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集中 No	分布 範囲 (m)	石器 点数	分布 密度	分布 状態	器種組成	石材組成	伴 遺物	伴 土器	備考
70	栗原中丸	L1SU	I	12000	3	3.0× 4.0	35	2.91		楕3、C32	粘5		-	
70	栗原中丸	L1SU	I	12000	4	3.5× 4.0	91	6.50	南長 中	楕5、副1、C85	粘91		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	1	5.5× 3.0	12	0.07	散漫	叩1、楕1、F7、 C3	黒、粘、硬砂		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	2	4.7× 3.4	18	0.11	散漫	RF1、叩1、 UF2、F1、C3、 楕1	黒、粘、硬砂		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	3	5.8× 5.0	39	1.34	散漫	MB14、MC2、 叩1、F6、C12、 楕4	黒、子、粘、 硬砂、凝		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	4	6.7× 6.3	76	1.79	中央 集中	MB2、副1、楕2、叩 1、F16、C46、楕 1、楕7	黒、凝、粘、 硬砂		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	5a	5.0× 4.3	37	1.72	散漫	UF2、F9、C21、 楕5	子、粘、凝、 輝、硬砂		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	5b	4.0× 2.5	18	1.80	散漫	MB1、F6、C9、 楕1、楕1	黒、輝、硬 砂、粘		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	6a	4.0× 3.6	35	2.43	散漫	F11、C13、楕 3、楕8	黒、凝、粘		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	6b	4.3× 2.8	33	2.74	散漫	叩1、F11、 C20、楕1	黒、輝、凝、 粘		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	7	5.8× 4.3	12	0.41	散漫	MB3、楕1、F2、 C5、楕1	子、黒、硬砂		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	8	5.0× 4.3	37	1.72	散漫	RF1、F16、 C17、楕3	黒、粘、硬砂		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	9	4.0× 3.9	16	1.02	散漫	副1、叩1、F7、 C7	凝、粘		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	10a	3.3× 3.0	73	7.37	集中	RF1、UF1、 F20、C49、楕2	黒、粘、凝		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	10b	3.8× 3.0	26	2.28	散漫	UF1、F10、 C13、楕2	粘		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	10c	3.6× 2.6	11	1.18	散漫	UF1、F4、C6	粘		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	10d	5.5× 3.5	32	1.66	散漫	副2、RF1、F8、 C16、楕1、楕4	黒、硬砂、粘		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	11a	4.6× 3.2	55	3.74	中央 集中	RF1、UF1、 F14、C35、楕1、 楕2	黒、粘、硬砂		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	11b	5.0× 3.0	42	2.80	散漫	F13、C27、楕1、 楕1	子、凝、粘		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	11c	5.8× 3.6	17	0.81	散漫	F8、C8、楕1	黒、硬砂、粘		-	
70	栗原中丸	L1SL	II	12000	12	8.0× 8.0	285	4.45	南西 側に 密集	MB96、MC1、 副5、RF2、叩 1、UF3、F22、 C154、	黒、凝、粘		-	
70	栗原中丸	B0	III	12000	1	5.0× 3.0	11	0.70	散漫	MB1、F2、C1、 楕1	黒、砂、凝、硬 砂、	礎 石	-	
70	栗原中丸	B0	III	12000	2								-	
70	栗原中丸	B0	III	12000	3	2.0× 1.0	8	4.00		F1、楕4	硬砂		-	



旧石器時代研究プロジェクトチーム

遺跡 No	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 No	分布 範囲 (m)	石 器 点 数	分 布 密 度	分 布 状 態	器 種 組 成	石 材 組 成	共 伴 遺 物	共 伴 土 器	備 考
70	栗原中丸	B0	III	12000	4	2.0× 2.0	27	6.75		雑27	硬砂、凝		—	
70	栗原中丸	L1HL	IV	12000			8			植、F、核	黒			
71	栗原中谷	B0	I	1904 ㎡	1	5.0× 1.4	11	1.83	散漫	M84、F6、核1	黒8、凝2、安	雑2	—	
73	かしわ台駅前	B0	I	3800	1	9.0× 7.0	410	6.50	散漫	MB141、MC4、餅1、 餅1、核1、MC素 4、MC調12、 RF3、UF6、F4、 C233	黒141、ナ7、泥 1、砂1	—	—	
73	かしわ台駅前	L1SM	II	3800	1	5.0× 3.5	124	7.71	南側 集中 北側 散漫	MB84、MC1、 MC調3、UF2、F4、 C28	黒5、黄1、支 1	—	—	
73	かしわ台駅前	L1HU	II	3800	1					MB、MC	黒			
74	柏ヶ谷長ツサ	FB	縄 縄	5500		10.0 ×4.0	15	0.37	散漫	有1、核1、打穿1、 ス1、楔1、F1、 核1	凝2、安5		爪形文	
74	柏ヶ谷長ツサ	L1S	la	5500			5		散漫	ナ1、粘3、餅1	安2、頁1、黒2	土塊2	—	
74	柏ヶ谷長ツサ	L1S	lb	5500			1						RL単塊	
74	柏ヶ谷長ツサ	B0U	II	5500	1	4.0× 3.0	34	2.83	密集	餅2、F30、C1、 凝1	安、ホ	雑餅2	—	
74	柏ヶ谷長ツサ	B0U	II	5500	2	6.1× 4.0	6	0.24	散漫	F4、C2	安	雑餅3	—	
74	柏ヶ谷長ツサ	B0U	II	5500	3	1.0× 0.8	5	6.20	密集	F3、RF1、C1	凝	雑餅4	—	
74	柏ヶ谷長ツサ	B0L	III	5500	1	16.0 × 16.0	28	0.10	東側 密集	植未1、彫1、 F25、核1	安、黒	雑餅 1・2 配石 1・2	—	
74	柏ヶ谷長ツサ	L1HU	IV	5500	1	10.0 ×9.0	717	7.96	密集	MB155、MC4、 MC原4、核4、 餅2、餅3、RF4、 F269、C271、凝3、	黒374、安54、 凝132、ホ 112、ナ1、舞 32	—	—	
80	月見野上野 第2地点	L1H	II	1440	A	7.5× 4.9	178	4.84		ナ1、植3、ス1、 凝2、UF2、F(石 片)169	黒、安、チ、 硬砂	雑餅		調査区外 にも広がる
80	月見野上野 第2地点	L1HU	II	1440	B	6.1× 5.0	15	0.49		植1、ス1、凝 2、核1、F(石 片)10	黒、安、チ、 硬砂	雑餅		
80	月見野上野 第2地点	B0L ~ L1HU	II	1440	C	2.2× 1.7	20	5.35		F・C10	黒	雑餅		凝10点出 土
81	月見野上野 第1地点	FBL	I	2115	1	5.0× 3.0	4	0.27		F4	黒1、ナ2、砂 1	—	隆、黒文	
81	月見野上野 第1地点	FBL	I	2115	2	3.3× 2.3	20	2.64		有1、F19	黒5、ナ1、砂 10、玄2、粘2	—	隆、黒文	
81	月見野上野 第1地点	FBL	I	2115	3	4.6× 2.1	19	1.97		F19	黒7、ナ1、砂 8、粘3	—	黒文	
81	月見野上野 第1地点	FBL	I	2115	4	1.5× 0.8	4	3.33		F4	砂3、粘1	—	隆、黒文	
81	月見野上野第 1地点	L1S	II	2115	1	4.7× 3.2	23	1.53	密度 高く ない	MB様F1、F22	砂23(個体別 分類) 本文玄 中心 個体49 は297・98箇で 玄、分類表で 砂。個体5011 本文・111箇で 玄、分類表で 砂。	雑餅	—	第6群構成

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その1）

遺跡 No.	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 No	分布 範囲 (m)	石器 点数	分布 密度	分布 状態	器種組成	石材組成	共伴 遺構	共伴 土器	備考
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	2	1.9× 1.2	150	65.79	密度 非常に 高い	MB1、MB種F3、 F146	砂150（個体 分類）個体49 は本文・98面 で玄・114面 で粘・分類表 で砂。個体50 は本文・111- 112面で玄・ 分類表で砂 粘3（個体分 類）	竪群	-	第3群構成
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	3	0.8× 0.3	3	12.50	密度 低い	F3		竪群	-	第1群構成
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	4	5.5× 2.2	11	0.91	希薄	ナ2、横1、 MC1、RF1、F6	ナ1、砂8、282 （個体分類） 個体48は102 面で玄・107 面で粘・分類 表で砂。個体 54は99面で 玄・分類表で 砂。個体55は 95面で玄・分 類表で砂。	竪群	-	第4群構成 9-14Bと接 合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	5	4.2× 3.7	29	1.87	希薄	ナ1、横2、RF1、 削片1、F24	ナ1、砂20、 横1、粘1、玄 3、片3（個体 分類）	竪群	-	第3群 第4群構成 9-31Bと接 合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	6	1	2	-	密度 低い	横1、MC1	砂2（個体分 類）。個体56 は94面で粘・ 分類表で砂。 個体49は本 文・99-113面 で玄・分類表 で砂。	竪群	-	第4群構成 9-14Bと接 合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	7	2.1× 1.3	22	8.06	やや 希薄	MB種F1、削1、 F20	砂19、粘1、 玄2 （個体分類） 個体49は本 文・98-101- 115面で玄・ 分類表で砂。	竪群	-	第4群構成
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	8	1.8× 1.5	24	8.89	やや 希薄	横1、F25	ナ1、砂18、横 1、粘1、玄3 （個体分類）	竪群	-	第4群構成
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	9	2.2× 1.7	170	45.45		MB4、MB種F1、 RF1、F164	黒1、砂168、粘 1（個体分 類）。個体48 は102面で 玄・107面で 粘・分類表で 砂。個体49は 本文・97-113- 114面で玄・ 分類表で砂。	竪群	原文	第3群構成 4-5-6-13- 14Bと 接合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	10	2.7× 1.6	39	9.03	やや 希薄	第1、F98	砂37、粘1、玄1 （個体分類）。 個体48は107 面で粘・分類 表で砂。個体 52は本文・103- 116面で玄・ 分類表で砂。	竪群	-	第3群構成 9-10-14- 16-20Bと 接合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	11	1.5× 1.5	12	5.33	希薄	横1、F11	砂9、粘2、玄 1（個体分類）。 個体24は94面 で粘・分類表 で玄。	竪群	-	第3群構成
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	12	1.5× 1.2	4	2.22	希薄	ナ1、F3（本文）	砂8、玄3（個 体分類）点数 はママ。	竪群	-	第3群構成 9-10-14- 16-20Bと 接合資料

遺跡 No	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 部	分布 範囲 (m)	石 器 点 数	分布 密度	分布 状態	器 種 類 成	石材 組成	共存 遺構	共存 土器	備考
81	月見野上野 第1地点	L1S	II	2115	13	2× 1.7	76	22.35	密度 やや 高い	M16, MB種F2, F68	M1, 砂64, 凝 3, 粘1(個体 分類)点数は ママ。個体48 は107箇で粘・ 分類表で砂。 個体49は本 文・97・98で 玄・114箇で 粘・分類表で 砂。	雑群	—	第3群構 成9・17・ 20Bと 接合資料
81	月見野上野 第1地点	L1S	II	2115	14	2.5× 1.7	312	73.41	密度 高い	MD6, MB種F1, F305	砂311, 粘1 (個体分 類)。個体48 は107箇で 粘・分類表で 砂。個体49は 本文・97・98・ 113箇で玄・ 114箇で粘・ 分類表で砂。 個体52は本 文・116箇で 玄・分類表で 砂。	雑群	無文	第3群構 成 4・9・10・ 15・16Dと 接合資料
81	月見野上野 第1地点	L1S	II	2115	15	1.0× 0.7	8	11.43	希薄	F8	砂7, 片1(個体 分類)。個体 52は本文・116 箇で玄・分類 表で砂。	雑群	—	第3群構 成 16Bと接 合資料
81	月見野上野 第1地点	L1S	II	2115	16	1.8× 1.5	181	67.04	密度 高い	粘1, F180	砂176, 玄3, 片 1(個体分類) 点数はママ。 個体48は107 箇で粘・分類 表で砂。個体 49は95箇で 玄・分類表で 砂。個体52は 本文・116箇で 玄・分類表で 砂。	雑群	—	第3群構 成 10・14・ 15・ 17・25Bと 接合資料
81	月見野上野 第1地点	L1S	II	2115	17	1.8× 1.2	60	27.78	密度 高い	F60	砂60(個体分 類)。個体50 は本文・112箇 で玄・分類表 で砂。	雑群	—	第3群構 成 13・16・ 20・22Bと 接合資料
81	月見野上野 第1地点	L1S	II	2115	18	0.6× 0.5	11	36.67	希薄	F11	砂11(個体分 類)	雑群	—	第3群構 成
81	月見野上野 第1地点	L1S	II	2115	19	2.7× 1.2	4	1.23	希薄	MB1, F3	砂3, 玄1(個体 分類)	雑群	—	第3群構 成
81	月見野上野 第1地点	L1S	II	2115	20	1.5× 1.2	372	206.67	密度 非常に 高い	砂1, F371	砂377, 玄4(個 体分類) 個体52は本文 ・103・116箇で 玄・分類表で 砂。	雑群	—	第2群群 第3群構 成 10・13・ 17Bと 接合資料
81	月見野上野 第1地点	L1S	II	2115	21	1.3× 0.5	39	60.00	密度 やや 高い	F39	砂39(個体分 類)	雑群	—	第2群群 第3群構 成
81	月見野上 野第1地点	L1S	II	2115	22	1.2× 0.9	31	28.70	密度 やや 高い	MB種F1, F30	砂30, 凝1(個 体分類)。個 体49は98箇で 玄・分類表で 砂。	雑群	—	第3群構 成 17Bと接 合資料
81	月見野上野 第1地点	L1S	II	2115	23	0.5× 0.3	4	26.67	希薄	F4	砂4(個体分 類)	雑群	—	第3群構 成

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その1）

遺跡No	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積(m <sup>2</sup> )	各集申%	分布範囲(m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	共存遺構	共存土器	備考
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	13	2×1.7	76	22.38	密度やや高い	MB6、MB様F2、F68	黒1、赤64、凝3、粘1(個体分類)点数はママ。個体48は107箇で粘・分類表で砂。個体49は本文・97-98箇で玄・114箇で粘・分類表で砂。	隠群	-	第3群構成9-17、20Bと接合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	14	2.5×1.7	312	73.41	密度高い	MB6、MB様F1、F305	砂311、粘1(個体分類)。個体48は107箇で粘・分類表で砂。個体49は本文・97-98・113箇で玄・114箇で粘・分類表で砂。個体52は本文・116箇で玄・分類表で砂。	隠群	無文	第3群構成4-9-10-15-16Bと接合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	15	1.0×0.7	8	11.43	希薄	F8	砂7、片1(個体分類)。個体52は本文・116箇で玄・分類表で砂。	隠群	-	第3群構成16Bと接合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	16	1.8×1.5	181	67.04	密度高い	楕1、F180	砂176、玄3、片1(個体分類)点数はママ。個体48は107箇で粘・分類表で砂。個体49は95箇で玄・分類表で砂。個体52は本文・116箇で玄・分類表で砂。	隠群	-	第3群構成10-14-15-17-25Bと接合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	17	1.8×1.2	60	27.78	密度高い	F60	砂60(個体分類)。個体50は本文・112箇で玄・分類表で砂。	隠群	-	第3群構成13-16-20-22Bと接合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	18	0.8×0.5	11	36.67	希薄	F11	砂11(個体分類)	隠群	-	第3群構成
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	19	2.7×1.2	4	1.23	希薄	MB1、F5	砂3、玄1(個体分類)	隠群	-	第3群構成
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	20	1.5×1.2	372	206.67	密度非常に高い	弄1、F371	砂377、玄4(個体分類)個体52は本文・103-116箇で玄・分類表で砂。	隠群	-	第2群構成第3群構成10-13-17Bと接合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	21	1.3×0.5	39	60.00	密度やや高い	F39	砂39(個体分類)	隠群	-	第2群構成第3群構成
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	22	1.2×0.9	31	28.70	密度やや高い	MB様F1、F30	砂30、凝1(個体分類)。個体49は98箇で玄・分類表で砂。	隠群	-	第3群構成17Bと接合資料
81	月見野上野第1地点	L1S	II	2115	23	0.5×0.3	4	26.67	希薄	F4	砂4(個体分類)	隠群	-	第3群構成

旧石器時代研究プロジェクトチーム

遺跡 No	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集中 No	分布 範囲 (m)	石器 点数	分布 密度	分布 状態	器種組成	石材組成	伴 遺構	伴 土器	備考
81	月見野上野 第1地点	LIS	II	2115	24	4.8× 3.0	46	3.19	密度 低い	楯3、MB1、MC、 柄1、流2、柄1、 F38	チ1、砂27、凝 1、粘3、玄15 (個体分類) 点数はママ。 個体22は100 円で粘・分類 表で玄。個体 41は95円で チ・分類表で 粘。個体50は 本文・111-112 円で玄・分類 表で砂。	確群	—	第1-4確群 第5群構成
81	月見野上野 第1地点	LIS	II	2115	25	2.3× 1.0	5	2.17	密度 低い	F5	砂5(個体分 類)	確群	—	第5群構成
81	月見野上野 第1地点	LIS	II	2115	26	1.8× 1.3	5	2.14	密度 低い	磨容1、F4	砂1、玄3、ホ1 (個体分類)	確群	—	第3群構成
81	月見野上野 第1地点	LIS	II	2115	27	3.2× 1.8	3	0.52		F3	砂1、粘1、片1 (個体分類)	確群	無文	第2群構成
81	月見野上野 第1地点	LIS	II	2115	28	1.3× 1.0	6	4.62		F6	砂1、玄4、片1 (個体分類)	確群	基文	第2群構成
81	月見野上野 第1地点	LIS	II	2115	29	3.1× 1.5	9	1.94	密度 低い	D11、F8	砂1、玄7、片1 (個体分類)	確群	—	第2群構成
81	月見野上野 第1地点	LIS	II	2115	30	1.9× 1.4	13	4.89	密度 低い	MB種F1、F12	砂5、玄1、片7 (個体分類) 個体49は98円 で玄・分類表 で砂。	確群	無文	第2群構成
81	月見野上野 第1地点	LIS	II	2115	31	1.7× 1.2	23	11.27	密度 低い	MB種F1、柄片1、 F21	砂15、凝1、 玄2、片3(個体 分類)点数は ママ。個体49 は98円で玄・ 分類表で砂。 個体50は本文 ・111-112円で 玄・分類表で 砂。	確群	—	第2群構成
81	月見野上野 第1地点	B0	III	2115	1区 I群 A1	2.8× 2.4	1238 10 組成 表11	1.49 1.64		MB1、MC1、流1、 柄1、UF1、F6	粘2、黒4、チ3、 砂1、凝1	確群	—	第1確群 第2Bと接 合資料
81	月見野上野 第1地点	B0	III	2115	1区 I群 A2	5.3× 4.4	484	20.75		MB302、MC4、MC 流3、柄2、UF13、 RF6、F252、粘 (組成表ではUF) 1、 細齒縁石器(組 成表ではRF) 1	粘29、黒430、 チ15、砂4、玄6	確群	—	第1確群 第1-3-5B と接合資 料
81	月見野上野 第1地点	B0	III	2115	1区 I群 a3	3.6× 2.2		0.63		確(組成表では 粘) 1、UF(組成 表ではRF) 1、F3	黒3、チ1、砂1	確群	—	第2Bと接 合資料
81	月見野上野 第1地点	D0	III	2115	1区 I群 a4	2.6× 0.7		2.20		F4	粘4	確群	—	
81	月見野上野 第1地点	B0	III	2115	1区 I群 a5	1.3× 0.1		23.08		柄1、F2	黒1、流2	確群	—	第2Bと接 合資料
81	月見野上野 第1地点	B0	III	2115	1区 I群 a6	6.7× 4.7		0.25		F8	粘4、黒3、玄1	確群	—	
81	月見野上野 第1地点	D0	III	2115	1区 I群 a7	1.1× 1.1		3.31		F4	玄4	確群	—	
81	月見野上野 第1地点	B0	III	2115	2区 II群 c8	4.6× 1.1		0.79		柄1、UF1、F2	黒4	確群	—	

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その1）

遺跡 No	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 団 No	分布 範囲 (m)	石 器 点 数	分布 密度	分布 状態	器 種 組成	石材組成	共存 遺物	共存 土器	備考
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 c9	3.5× 2.6	10	1.10		UF1、F9	黒7、玄3	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 c10	1.4× 0.4	4	7.14		MB1、UF1、F2	黒3、玄1	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 A11	3.4× 2.8	8	0.84		F8	チ8	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 A12	3.4× 1.0	4	1.18		F4	黒1、チ3	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 A13	3.0× 1.1	7	2.12		F7	黒5、チ2	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 A14	4.0× 2.1	6	0.71		MB1、F5	黒1、チ1、黒 1、玄3	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 A15	4.7× 3.6	11	0.65		MB2、MC1、MC注付 2、黒1、UF1、RF1、 F3	黒10、不明1	磁群	-	17-18Bと 接合資料
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 A16	7.4× 5.6	87	2.10		MB13、MC1、UF12、 RF1、黒1、F59	黒66、チ8、 砂3、黒4、玄5 (他に母岩不 明のF1か?)	磁群	-	18Bと接 合資料
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 A17	3.4× 2.6	37	4.19		MB16、黒1、 UF4、F16	黒36、不明1	磁群	-	15-18Bと 接合資料
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 A18	4.7× 2.5	92	7.83		MB61、MC1、黒 1、F27	黒89、黒2、玄1	磁群	-	15-16-17- 18Bと接合 資料
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 h19	5.1× 3.1	15	0.95		UF5、RF1、F9	黒9、チ3、黒3	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 d20	2.2× 0.6	3	2.27		MB1、F2	黒1、砂1、黒1	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 d21	1.5× 1.2	6	3.33		MB2、MC1、F3	黒6	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 d22	1.1× 0.1	3	27.27		F3	黒1、砂1、玄1	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	2区 II群 a23	3.7× 2.8	9	0.87		F9	チ8、黒1	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	3区 II群 a24	2.4× 1.6	4	1.04		F4	黒1、チ3	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	3区 II群 A25	4.8× 3.5	250	14.88		F250	砂230、玄20	磁群	-	26-27Bと 接合資料 磁器と調整 測片
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	3区 II群 A26	4.7× 3.3	99	6.38		MB1、黒5、F93	黒2、砂94、玄3	磁群	-	25-27Bと 接合資料 磁器と調整 測片
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	3区 II群 A27	5.5× 3.2	組成 表177 個別 石器 176	10.44 10.38		石器組成表の小 計はMB3、黒9、 F168 個別石器の合計 はMB2、黒9、F165	黒3、砂132、 玄41(石器組 成表の個別石 器の合計による)	磁群	-	25-26Bと 接合資料 磁器と調整 測片
81	月見野上野第 1地点	B0	III	2115	3区 II群 a28	1.3× 0.5	8	12.31		MB1、UF1、F6	黒8	磁群	-	
81	月見野上野第 1地点	L1H	IV	2115	1区1	2.2× 1.3	40	13.99		横1、横1、F38	玄2、黒2、チ 4、黒30、粘14 (個体分類)	磁群	-	第1磁群 第3ブロッ ク群
81	月見野上野第 1地点	L1H	IV	2115	1区2	2.6× 2.4	10	1.60		横1、UF2、横 1、F6	玄2、黒1、チ 5、黒1、粘14 (個体分類)	磁群	-	第1磁群 第3ブロッ ク群

旧石器時代研究プロジェクトチーム

遺跡No	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積(m <sup>2</sup> )	各層中No	分布範囲(m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	共存遺構	共存土器	備考
81	月見野上野第1地点	LIII	IV	2 15	1 区3	3.0×2.8	27	3.21		ナ1、楯3、楯2、F21	玄23、ナ1、楯3(個体分類)	竪群14		第3プロック群を構成
81	月見野上野第1地点	LIIH	IV	2 15	1 区4	1.3×1.3	9	5.33		UF1、F8	玄4、黒3(個体分類)	竪群14		第3竪群第3プロック群を構成
81	月見野上野第1地点	LIIH	IV	2 15	2 区5	4.0×3.6	本文18 分布範囲・表17	1.25 1.18	密度 高くない	楯1、楯2、UF1、楯1、F13 遺物分布図には石核なし	玄12、ナ1、黒4(個体分類)	竪群14		第47プロック群を構成
81	月見野上野第1地点	LIII	IV	2 15	2 区6	2.0×1.0	3	1.50		F3	玄3(個体分類)	竪群14		第5竪群7Bと接合第4プロック群
81	月見野上野第1地点	LIII	IV	2 15	2 区7	6.0×4.4	338	12.80	密度 高い	楯1、石刃8、UF1、F328	玄290、黒3、ナ14、黒28、砂1、粘1、不明1(個体分類)	竪群14		第5竪群6Bと接合第4プロック群
81	月見野上野第1地点	LIII	IV	2 15	2 区8	4.0×3.6	60	4.17		楯1、石刃1、UF1、MB楯F1、F56	玄18、黒4、ナ1、黒3、粘34(個体分類)	竪群14		9-10-11Bと接合第4プロック群
81	月見野上野第1地点	LIII	IV	2 15	2 区9	2.5×2.5	本文357 表356	57.12 56.96		楯3、UF2、叩1、楯5、F346	玄65、黒188、ナ20、粘7、砂17、粘6、泥52(個体分類)	竪群14		8-10-20Bと接合第4プロック群
81	月見野上野第1地点	LIIH	IV	2 15	2 区10	5.4×4.0	本文748 表745	34.63 34.49		ナ3、楯18、粘1、楯1、石刃8、RFS、UF10、楯2、F697	玄542、黒125、ナ69、粘1、粘3、泥1(個体分類)	竪群14		第4竪群8-9-11-12Bと接合第4プロック群或 矢頭器の 製作址
81	月見野上野第1地点	LIIH	IV	2 15	2 区11	4.6×3.4	本文459 表460	29.35 29.41		ナ1、楯2、楯1、RF2、UF6、楯2、F445	玄248、黒175、ナ12、粘9、砂1、粘7、泥7(個体分類)	竪群14		10-12Bと接合第4プロック群構成
81	月見野上野第1地点	LIII	IV	2 15	2 区12	4.0×0.4	4	2.50		F4	玄2、黒1、ナ4(個体分類)	竪群14		10-11Bと接合第4プロック群構成
81	月見野上野第1地点	LIIH	IV	2 15	2 区13	1.2×0.7	5	5.95		F5	ナ5(個体分類)	竪群14		第5プロック群構成
81	月見野上野第1地点	LIIH	IV	2 15	2 区14	1.6×0.4	5	7.81		UF1、F4	黒2、ナ1、粘1、泥1(個体分類)	竪群14		16Bと接合第5プロック群構成
81	月見野上野第1地点	LIIH	IV	2 15	2 区15	0.4×0.2	3	37.50		F3	玄1、ナ1(個体分類)	竪群14		第13竪群第5プロック群構成
81	月見野上野第1地点	LIIH	IV	2 15	2 区16	2.2×1.0	17	7.73		楯1、楯1、F15	黒2、ナ1、粘13、粘1(個体分類)	竪群14		14Bと接合第5プロック群構成
81	月見野上野第1地点	LIIH	IV	2 15	2 区17	5.6×4.6	本文107 表106	4.15 4.11		楯4、石刃1、RF4、UF1、楯1、F96	玄4、黒75、ナ27(個体分類)	竪群14		第6-7竪群19-20Bと接合第5プロック群構成
81	月見野上野第1地点	LIIH	IV	2 15	2 区18	3.1×1.6	10	2.02		UF1、F9(本文ではC9)	黒5、ナ1、粘4(個体分類)	竪群14		第5プロック群構成
81	月見野上野第1地点	LIII	IV	2 15	2 区19	7.8×5.6	621	14.22		ナ1、楯9、RF6、UF17、石刃2、削片1、F585	玄91、黒470、ナ51、粘3、砂2、粘2、泥3(個体分類)	竪群14		第7-8-9-10-14竪群11-17-20-23Bと接合第5プロック群構成

神奈川県における旧石器時代の遺物分布 (その1)

遺跡 No	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 No	分布 範囲 (m)	石 器 点 数	分布 密度	分布 状態	器 種 組 成	石材組成	伴 件 遺 構	共 伴 土 器	備 考
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	2区20	4.4× 3.6	346	21.84		楯8、簾1、石刀 2、RF3、UF2、核 1、F329	玄228、黒 105、チ3、泥 8、粘1、流1 (個体分類)	隠群 14		第11隠群 5-9-17、 19-21Dと 接合第5 ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	2区21	4.4× 3.4	20	1.34		ナ1、楯2、 UF1、RF1、F 15	玄3、黒 10、チ2、藤 4、砂1(個体分 類)	隠群 14		第11隠群 20Bと接合 第5ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	2区22	5.6× 4.0	本文 103 表55 分布 図51	4.60 2.46 2.28		楯4、RF3、F96	玄28、黒26、 泥1、流1(個 体分類)	隠群 14		第5ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	2区23	3.6× 2.0	本文 23 分布 図1 表22	3.19 3.06		ナ1、F本文22- 分布図21	玄4、黒16、 チ1、砂1(個 体分類)	隠群 14		19Bと接合 第5ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	2区24	1.6× 0.2	5	15.63		ナ1、F4	玄1、黒4(個 体分類)	隠群 14		第14隠群 第5ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	2区25	4.4× 4.0	本文 16 分布 図4 表15	0.91 0.85		RF1、F本文15- 分布図14	玄1、黒2、チ 3、泥7、粘2 (個体分類)	隠群 14		11Bと接合 第6ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	2区26	2.8× 2.4	7	1.04		F7	玄2、泥2、砂 3(個体分類)	隠群 14		第6ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	2区27	5.0× 2.4	19	1.58		楯2、F17	玄7、黒3、チ 1、泥6、砂 1、粘1(個体分 類)	隠群 14		17Bと接合 第6ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	2区28	5.4× 3.4	4	0.22		UF1、F3	黒1、泥2、粘 1(個体分 類)	隠群 14		第5ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	2区29	2.4× 1.0	5	2.08		F5	黒3、泥2(個 体分類)	隠群 14		第5ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	2区30	1.0× 0.6	4	6.67		F4	チ1、粘3(個 体分類)	隠群 14		第7ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	3区31	5.6× 4.4	187	7.59		ナ2、楯10、 RF2、UF2、F 171	玄14、黒11、 チ147、泥5、 粘20(個体分 類)	隠群 14		矢頭器の 製作止 第7ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	3区32	1.1× 0.3	3	9.09		ナ1、楯1、F1	玄2、黒1(個 体分類)	隠群 14		第1次花器 群中 第7ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	3区33	5.0× 4.6	11	0.48	希薄	楯3、F8	玄8、チ3(個 体分類)	隠群 14		第7ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	3区34	5.0× 3.6	11	0.61	希薄	F11	玄1、チ4、粘 6(個体分 類)	隠群 14		第7ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	3区35	2.0× 1.0	3	1.50		F3	チ2、粘1(個 体分類)	隠群 14		第7ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	3区36	2.4× 2.0	9	1.88		楯3、F6	玄8、砂1(個 体分類)	隠群 14		第2隠群 第1ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点	L1H	IV	2115	3区37	3.6× 2.0	13	1.81		楯1、石刀3、F 10	玄8、チ3、砂 2(個体分 類)	隠群 14		第3ブロック 群構成
81	月見野上野 第1地点 (第4次)	FBL	I	100	1	4.4× 2.3	21	2.08		RF2、F19	玄6、泥14、砂1	隠 14	医	調査区外 へ広がる



旧石器時代研究プロジェクトチーム

遺跡 No	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積 (㎡)	各集地点	分布範囲 (m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	共伴遺物	共伴土器	備考
81	月見野上野第1地点 (第4次)	LISU	II	100	1	1.8×0.1	3	16.67		F3	女1、子2			
82	月見野上野第3地点	B0	I	206	1	1.1×0.5	4	7.27		楕1、F3	楕3	なし	-	
82	月見野上野第3地点	B0~L1H	II	206	1	3.5×2.6	74	8.13		楕3、F71	女74			
82	月見野上野第3地点	B0~L1H	II	206	2	3.1×2.2	39	5.72		楕3、F36	女39			第3号編群
82	月見野上野第3地点	B0~L1H	II	206	3	4.0×3.8	530	34.87		楕1、F529	女524、子2、楕3			6-4Bと接合
82	月見野上野第3地点	B0~L1H	II	206	4	5.0×2.5	243	19.44		ナ1、楕9、彫1、RF1、F231	女231、黒7、子、黒2、粘2、楕1			第1・第2号群 3Bと接合
82	月見野上野第3地点	B0~L1H	II	206	5	2.5×2.0	6	1.20		楕1、楕1、UF4	黒6			
82	月見野上野第3地点	B0~L1H	II	206	6	2.5×2.0	56	11.20		楕1、UF5、彫1、F49	女1、黒52、子2、黒1			3Bと接合
83	相ノ原第V地点	LIS ~ L1H	I	36		3.7×2.9	40	3.73		MB3、楕1、RF1、楕3、F32	黒、黒、粘、ホ	-	-	
84	台山	B0U	II	3000	1	11.0×8.4	146	1.58		MB32、MC、楕1、楕1、彫、叩、鏢、RF、UF	黒、黒、安、子、砂、泥、ホ	-	-	
84	台山	B0U	II		2	9.2×7.9	743	10.22		MB5、MC、楕、楕、彫、叩、鏢、RF、UF	黒、黒、安、子、砂、泥、ホ	-	-	
85	長堀北	LIS	I	693	1	7.7×3.6	49	1.14		局帯楕1、打斧2、UF2、F42、C2	粘12、安19、子4、黒7、黒4、片1、ホ1、女1	-		無文
85	長堀北	LIS	I	693	4	1	2	-		楕、F	粘3	-	-	
85	長堀北	LISM	II	693	1	3.5×3.1	46	4.24		楕4、MB5、RF1、削片1、F29、C6	安13、黒31、黒1、不明1	楕群4	-	1-5号ブロックでブロック群を構成 (1群)
85	長堀北	LISM	II	693	2	2.3×2.3	162	30.62		楕1、MB12、MC1、打斧1、削片4、F106、C38	安123、黒33、子1、黒2、砂1、不明1	楕群4	-	(1群)
85	長堀北	LISM	II	693	3	5.0×2.9	52	3.59		楕2、MB18、MC楕1、削片2、F23、C6	安29、黒11、子3、黒5、砂3、粘1	楕群4	-	(1群)
85	長堀北	LISM	II	693	4	4.8×3.9	119	6.36		楕2、MB1、削片3、楔RF1、F74、C38	安18、黒74、子4、黒5、砂1、不明11	楕群4	-	(1群)
85	長堀北	LISM	II	693	5	3.1×3.0	8	0.86	散後	楕1、F7	粘2、子3、黒3	楕群4	-	(1群)
85	長堀北	LISM	II	693	6	0	2	-	規模小	F2	粘2	楕群4	-	6-9号ブロックでブロック群を構成 (1群)
85	長堀北	LISM	II	693	7	8.8×5.0	36	0.82	真中高い	楕2、MB2、F24、C8	安24、黒3、子2、黒1、砂1、粘	楕群4	-	第2-3号編群 (1群)
85	長堀北	LISM	II	693	8	4.3×3.0	11	0.85		楕1、楕1、F8、C1	安6、粘2、子2、黒、砂、粘	楕群4	-	第4号編群 (1群)
85	長堀北	LISM	II	693	9	4.8×2.0	8	0.83		F8	安4、砂3、不明1	楕群4	-	(1群)
85	長堀北	B0M	III	693	1	8.1×5.4	38	0.87		MB2、ナ1、RF4、UF1、F23、C7	子2、砂1、黒3、黒28、安、ホ、女4	楕群2	-	

神奈川県における旧石器時代の遺物分布 (その1)

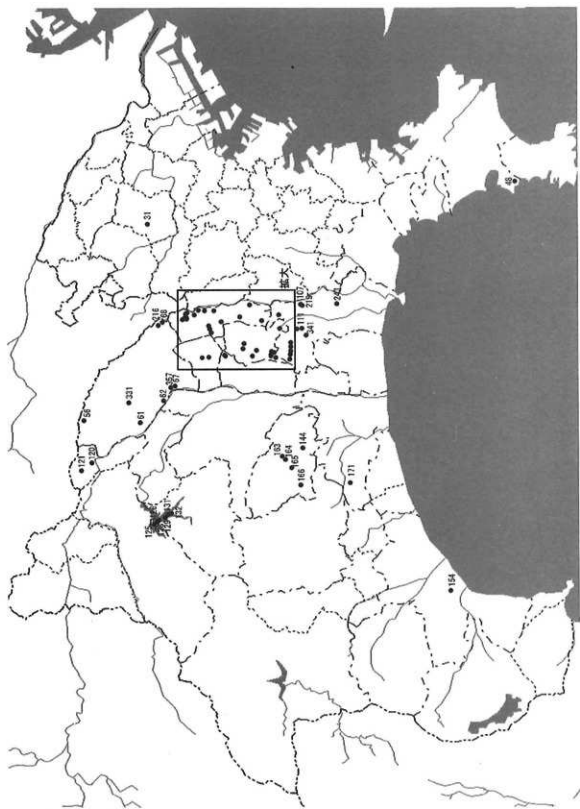
遺跡 No	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 No	分布 範囲 (m)	石 器 点 数	分布 密度	分布 状態	器 種 組 成	石 材 組 成	共 伴 遺 物	共 伴 土 器	備 考
85	長堀北	B0M	Ⅲ	693	2	5.2× 2.0	13	1.25	散漫	UF1、F7、C5	チ1、凝2、黒7、 ホ2	凝群2	—	
85	長堀北	B0M	Ⅲ	693	3	6.1× 2.3	8	0.57	散漫	MB1、UF1、FS、 C1	チ1、凝3、黒4、 C1	凝群2	—	
85	長堀北	B0M	Ⅲ	693	4	1.3× 0.5	3	4.62	散漫	F3	チ1、凝1、黒1、 C1	凝群2	—	
85	長堀北	L1HL	Ⅳ	693	1	4.7× 3.0	353	25.04		ナ6、簡4、彫 1、ス1、RF4、 UF12、F19S、C 130	黒351、粘1、安 1	凝群 1	—	
85	長堀北	L1HL	Ⅳ	693	2 又は 4	1.5× 1.0	3(分 布四 角(組 成表)	2.00 6.00		F3(分布図第2 ブロックT4) F3(属性表第4 ブロックT4) RF1、UF1、F4、C 2(組成表の第2 ブロック=Q6出 土か?)	黒8(個体分 類の第2ブ ロックRF1、 UF1、F4、C 2=Q6出土ブ ロックか?)	凝群	—	T4グリッ ド。本文、 分布図で は2、全体 図では4
85	長堀北	L1HL	Ⅳ	693	3 又は 2	0.6× 0.2	8(分 布四 角(組 成表)	66.67 33.33		RF1、UF1、F4、C 2(分布図第3ブ ロックQ6)RF1、 UF1、F4、C2(属 性表の第2ブ ロックQ6)粘 1、F3(組成表 第3ブロック)	黒3、凝1(個 体分類の第3 ブロック粘1、 F3)	凝群	—	Q6グリッ ド。本文、 分布図で は3、全体 図では2
85	長堀北	L1HL	Ⅳ	693	4 又は 3	1.7× 0.5	4	7.84		ナ1、F3(分布 図第4ブロック Q6)粘1、F3 (属性表第3ブ ロックQ6)F4 (組成表第4ブ ロック)	黒4(個体表 の第4ブロッ クF4)	凝群	—	Q5グリッ ド。本文、 分布図で は4、全体 図では3
85	長堀北	L1HL	Ⅳ	693	5	1	2	—		F2	黒2	凝群	—	
86	下橋岡長堀	L1SL	I a	347.9	—	11.0× 6.0	108	1.64		簡4、ナ1、簡1、 核1、RF7、F、 C94	黒、安	—	—	
88	深見諏訪山	B0U	Ⅱ	338	1	1.6× 1.3	22	10.58	散在	F22	泥22	—	—	点状分布 図E3Gグ リッド
88	深見諏訪山	B0U	Ⅱ	338	2	4.5× 4.1	34	1.84	散在	MB11、MC1、簡 1、F29	黒、粘	第1層 群	—	
88	深見諏訪山	B0U	Ⅱ	338	3	1.6× 0.9	7	4.86	密度 低い	核1、F6	泥、安	—	—	
89	深見神田南	L1S	I	240	1	2	2	—		粘2	安2	黒石 (凝群)	—	
90	上和田城山 (1、2次)	L1S	I	—	6区 1	5.1× 3.3	100	6.48		粘、MB、MC、明、 F	黒、凝、珪質、 花、凝、珪質、 安、チ、花、玄、 チ	—	—	1号緩群 第1-2ブ ロック間 接合 砂
90	上和田城山 (1、2次)	L1S	I	—	6区 2	6.0× 4.5	52	1.93		MB、MC、彫、 F	黒、凝、珪質、 花、凝、安、 チ	—	—	第1-2ブ ロック間 接合
90	上和田城山 (1、2次)	B0L ~U	Ⅱ	—	1区 1	1.8× 1.5	29	10.74		F	凝	—	—	
90	上和田城山 (1、2次)	B0L ~U	Ⅱ	—	1区 2	3.0× 1.3	19	4.87		ナ、UF、F	黒、粘	—	—	
90	上和田城山 (1、2次)	B0L ~U	Ⅱ	—	1区 3	5.0× 4.1	37	1.80		F	—	—	—	
90	上和田城山 (1、2次)	B0U	Ⅱ	—	8区	4.3× 1.9	19	2.33		MB1、凝3、F15	黒1、安3、凝 8、ホ7	—	—	

遺跡 No	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (m <sup>2</sup> )	各 集中 No	分布 範囲 (m)	石 器 点 数	分布 密度	分布 状態	器 種 組 成	石 材 組 成	共 伴 遺 構	共 伴 土 器	備 考
90	上和田城山 (1、2次)	BOL ~U	II	—	4区 A	5.6× 3.2	94	5.25		ナ、MB、括、削、 叩、残核、F	黒、凝、粘、 珪頁、頁		—	伊達 A・Bプロッ ク間接合 木炭灰中 A・Bプロッ ク間接合
90	上和田城山 (1、2次)	BOL ~U	II	—	4区 B	8.5× 4.2	162	4.54		楯、MB、MC、那、 括、削、叩、残核、 RF	黒、凝、粘、 珪頁、頁		—	
90	上和田城山 (1、2次)	BOL ~U	II	—	4区 C	6.6× 5.1	441	13.10		楯、MB、MC、那、 括、削、叩、残核、 RF	黒、凝、粘、 珪頁、頁		—	
91	上草柳 第3地点西	LISM	I	1280	1	2.1× 2.1	27	6.12	散漫	F	チ			
91	上草柳 第3地点東	LJHU	I	340	1	3.0× 4.0	22	1.83	散漫	F21、核1、 (ナ)	砂			
91	上草柳 第3地点中央	BOL	I	1760	1	7.5× 7.5	418	7.43	南壁	ナ2、MB96、MC7、 MC素材2、MC調整 F121、削3、楯2、 RF1、UF10、核2、 F86、C86	黒、流、粘、チ、 安、砂、ホ	隠群1	—	
93	上草柳 第1地点	BOM	I	180.5	1	8.0× 5.0	221	5.53		楯1、MB103、MC3、 MC素材3、MC調整 F90、UF1、RF1、核 1、楯1、F9、C8	黒、頁、凝	隠群1		
93	上草柳 第1地点	BOM	I	180.5	2	8.0× 6.0	279	5.81		楯2、MB44、MC3、 MC素材2、MC調整 F41、削3、削3、快 1、楯1、RF3、UF4、 SB2、F72、C38	黒、チ、頁、凝、 安、ホ	隠群1		
94	草柳中村	BOM	I	252	1	4.0× 3.6	9	0.59	散漫	MB3、楯1、F8、 C2	黒、チ		—	
94	草柳中村	BOM	I	252	2	6.9× 5.1	87	2.47	求心 的に 集中	MB8、ナ1、楯1、 UF10、RF1、MC調 整F4、F51、C18	黒、チ		—	
94	草柳中村	LJHU	II	252	1	5.0× 4.0	15	0.75	散漫	ナ2、RF2、F9、C2	黒		—	
94	草柳中村	LJHU	II	252	2	4.8× 3.7	49	2.76	中心 集中	ナ5、楯1、RF1、 F27、C15	黒		—	
94	草柳中村	LJHU	II	252	3	7.5× 5.3	26	0.65	散漫	ナ3、RF1、 UF2、 F18、C2	黒		—	
94	草柳中村	LJHU	II	252	4	1	2			ナ1、F1	黒		—	

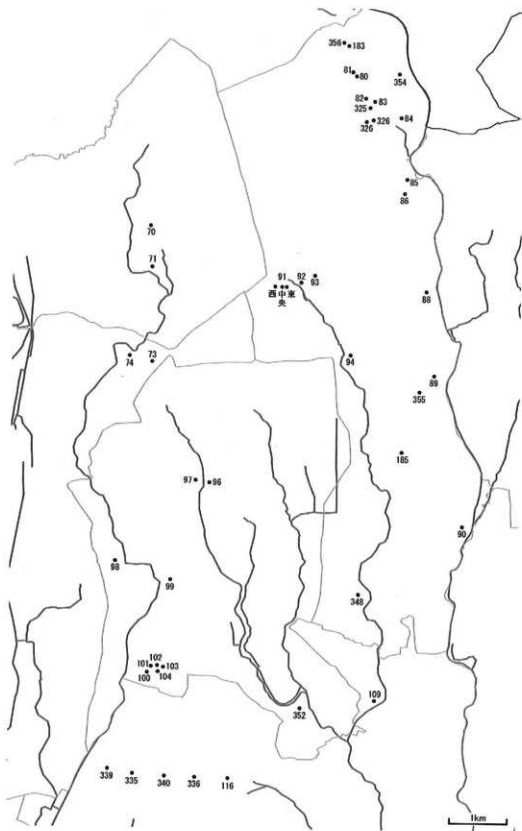
※1 器種組成(ナ:ナイフ形石器・楯:楯先形尖頭器・楯:楯器・削:削器・那:那器・楯:楯形石器・叩:叩石・打斧:打製石斧・磨斧:磨製石斧・台:台石・核:石核・刃:刃器・MB:細石刀・MC:細石刀核・UF:使用痕ある剥片・RF:調整痕ある剥片・F:剥片・C:砕片)

※2 石材組成(ガ安:ガラス質黒色安山岩・安:安山岩(角閃石安山岩)・粘:粘板岩・黒:黒輝石・チ:チャート・砂:砂岩(凝灰質砂岩)・頁:頁岩・珪頁:珪頁岩・凝頁:凝灰質頁岩・凝:凝灰岩(碎石質凝灰岩・溶結凝灰岩・火山凝灰岩・輝緑凝灰岩)・珪凝:珪質凝灰岩・泥:泥岩・ホ:ホルンフェルス・珪泥:珪質泥岩・硬砂:硬質砂岩・泥:斑痕岩・閃:閃緑岩(石英閃緑岩・花崗閃緑岩)

※3 地図内の数字は遺跡番号を示す。95番以上の遺跡は、次年度以降の表に掲載。



第1図 神奈川県下の遺跡分布図（縄文時代早期～旧石器時代終末）



第2図 遺跡分布図（大和・綾瀬・座間周辺）

# 神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅶ

—後期初頭期 称名寺式土器文化期の様相 その3 文化的様相(1)—

縄文時代研究プロジェクトチーム

## I. はじめに

平成19年度は、一昨年度から開始した後期初頭期・称名寺式土器文化期の様相をめぐる研究の3年次目にあたる。今年度より新メンバー1名を加え、昨年度提示した「称名寺式土器編年試案」(縄文時代研究プロジェクトチーム2007)にもとづき、該期の文化的様相を探る研究活動に着手しているが、今回はまず、住居址(竪穴住居址・柄鏡形(敷石)住居址)及び住居址以外の遺構・貝塚、土製品、骨角製品といった土器以外の遺物等、称名寺式土器文化期の個別遺構・遺物についての検討を行うこととした。なお、諸般の事情により今回検討を見送った「屋外埋設土器」、「石器」、「石製品」については、該期集落の様相・分布、及び該期遺跡の地名表・文献一覧(補遺)とともに、「文化的様相(2)」として次年度の検討課題とする。(井辺一徳)

## II. 竪穴住居址・柄鏡形(敷石)住居址

### 1. 平面形態・規模

本プロジェクトで収集し得た当該期の住居址は37遺跡84軒になる。このうち、報告書等の事実記載、挿図から概要が比較的明らかになっている31遺跡61軒の竪穴住居址を対象とし、平面形態・長輪規模・敷石の有無等の検討をし、各段階の特徴を抽出することを試みた。

まず、時期の分別である。共存する土器から時期が分別できるものについては、神奈川における「称名寺式土器編年試案」(前掲 縄文時代研究プロジェクトチーム)に基づいて分別した。また、土器の記載のないものや、分類ができなかったものについては「加曾利E～称名寺」「称名寺」「称名寺～堀之内」と大別した。「加曾利E～称名寺」については8遺跡9軒、「称名寺」については11遺跡21軒、「称名寺～堀之内」については6遺跡9軒を数えた。これらは時期が細かく特定できないため、検討対象から除外した。以下では12遺跡20軒を検討の対象とした。

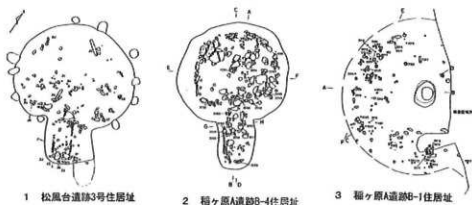
平面形態について細かく分析を試みた。加曾利E式IV期から急増した柄鏡形が、この時期を通じて顕著なことがまず挙げられる。それ以外は円形・楕円形に分類できたが、その中では大きな傾向は見られなかった。そこで、この時期の平面形態を「柄鏡形」と「円形・楕円形」の大きく2分類するに留めた。

それぞれの特徴について下記で検討した。

#### ①円形・楕円形プランについて(第1図、第1表)

**軒数と規模**：第1表にまとめた。軒数についてみると古段階前半と判別できたのは1軒のみ。古段階後半と判別できたものはなかった。中段階と判別できたのは1軒で、新段階では4軒が判別できた。規模について見てみると古段階前半で6.1mの住居(第1図3)が見られたが、中段階では4.7mの例(第1図8)のみ。新段階になると平均5.35mとなる。

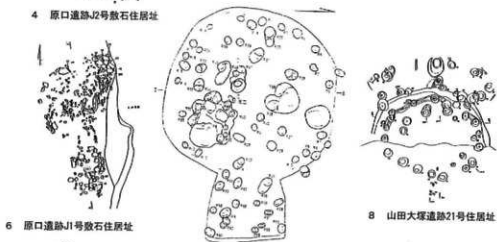
古段階前半



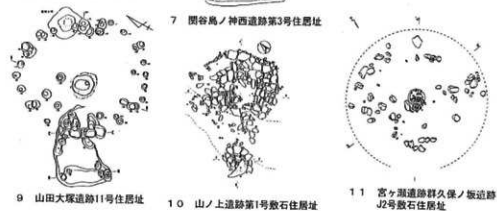
古段階後半



中段階



新段階



第1図 称名寺の壑穴住居址 (1/150)

敷石について：古段階前半では1軒(第1図3)敷石が見られるが、中段階の住居では敷石が見られない。新段階では4軒中1軒(第1図11)のみで検出されている。敷石が施されている住居の検出された地域は横浜市で2軒、清川村で1軒と、県東部・県中部に見られた。但し、敷石の見られない住居も横浜市で3軒見られた。県東部では敷石のない例の方が多い傾向が見られるといえるであろう。

また今回、円形・楕円形等としたものでも、確認できたプランが円形であって、本来は張り出し部が存在した可能性も考えられるものもあるであろう。

### ②柄鏡形プランについて(第1図、第2表)

軒数と規模：第2表にまとめた。中段階と判別できたものが多く見られた。規模について見てみると、古段階前半から後半、中段階までは規模にばらつきがみられ、鎌倉市関谷島ノ神西遺跡第3号住居址(第1図7)が長軸長9.05mと突出する例も見られる。新段階になるとやや小型化する傾向が見られる。張り出し部に着目すると、古段階前半から後半になると、幅はそのまま長軸は長くなる。中段階になると長軸は短くなるが幅は広がりを見せる。しかし新段階になると長軸と幅ともに小型化する傾向が見られる。特に幅の減少が著しい。主体部は円形、もしくは楕円形基調となる。

敷石について：古段階前半・後半では全てにみられるが、中段階・新段階では敷石のないものもみられる。敷石の配置をみると、礎を壁柱穴や壁の内側に沿って中小の礎を配するもの(周礎タイプ：第1図1・4・5・9)と板石を床に面状に敷いたもの(面状敷石タイプ：第1図2・6・10)の大きめに2つに分類することができた。地域で分類すると県東部は周礎が、県中部は面状が多い傾向が見られた。これは加賀期Eの時期と同様の傾向であり、川の流れの緩やかな県東部では板石の入手が困難な事情を反映しているものと考えられる。古段階前半では全てにみられるが、古段階後半では6割、中段階では5割と比率は減少するが、新段階になると8割弱まで増加する。

掘り込みについて：床面より上の掘り込み(床上掘り込み)は多くの例が見られた。床上掘り込みは30cm程度と一般的に浅い。床下の掘り込み(掘り方)については床上掘り込み程多くは見られなかった。また周礎タイプ・面状敷石タイプのどちらかに多いという傾向は見られなかった。

### ③円形・楕円形プランと柄鏡形プランを通じて

全段階を通して、住居の主軸についての検討を試みたが、特に傾向は見出せなかった。集落内で占位する位置を考慮しての検討が必要であろう。(宗像義輝)

第1表 円形・楕円形住居の軒数・規模(平均値)

	敷石あり	敷石なし	住居長軸長
古段階前半	1軒	0軒	6.1m
古段階後半	0軒	0軒	—
中段階	0軒	1軒	4.7m
新段階	1軒	3軒	5.35m
計	2軒	7軒	5.37m

第2表 柄鏡形住居の軒数・規模(平均値)

	敷石あり	敷石なし	住居長軸長	出張部長	出張部幅
古段階前半	3軒	0軒	6.0m	1.8m	1.7m
古段階後半	2軒	0軒	6.8m	2.6m	1.77m
中段階	4軒	2軒	6.1m	2.25m	2.28m
新段階	2軒	1軒	4.86m	1.8m	1.3m
計	11軒	3軒	5.16m	1.94m	2.05m

## 2. 炉址・壁下構造・埋甕

ここでは、神奈川県内で発見された該期堅穴住居址・柄鏡形(敷石)住居址のうち、報告書等に採図や概要が示されている28遺跡55軒(10市1町1村に分布)を対象とし、炉址形態、壁下構造、埋甕等についてみていく。本来であれば、前年度に提示した細分段階別に様相・変遷等の分析を行うべきであるが、対象となる住居址の絶対数が少ないため、各段階別の傾向等については必要に応じて文中で触れていくこととする。



## ①炉址形態（第2図1～3）

炉址形態を把握することができた住居址は25遺跡47軒存在する。形態的には、地床炉（31軒：約66.0%）、石囲炉（11軒：約23.4%）、埋裏炉（1軒：約2.1%）の3形態が確認されており、炉自体が構築されていないと考えられる住居址も4軒（約8.5%）存在する。第2図に各形態の代表的な事例を掲載した。

地床炉が確認された住居址は16遺跡31軒存在する。このうち23軒が横浜市内に所在する遺跡において発見されたもので、県東域への高い偏在傾向が窺える。時期判別が可能なもの内訳は、古段階に帰属するものが7軒（約22.6%）、中段階に帰属するものが11軒（約35.5%）、新段階に帰属するものが7軒（約22.6%）となっており、一昨年度の「住居址一括出土事例」、昨年度の「編年試案」等で取り上げた代表的な遺跡（住居址）では、古段階前半にあてた横浜市緑区松風台遺跡3号住居址、古段階後半にあてた横浜市緑区稲ヶ原遺跡A地点B-4・12号住居址、藤沢市用田鳥居前遺跡2号竪穴住居址（第2図1）、中段階にあてた横浜市港北区山田大塚遺跡21号住居址、新段階にあてた中井町東向遺跡2号住居址等が挙げられる。

石囲炉が確認された住居址は11遺跡11軒存在する。相模原市に5遺跡5軒、座間市、清川村に各1遺跡1軒が分布し、地床炉を有する住居址の分布とは異なり、県東部相模川水系中流域への偏在傾向が捉えられそうだが、時期判別が可能なもの内訳は、古段階に帰属するものが5軒（約45.5%）、中段階に帰属するものが3軒（約27.3%）、新段階に帰属するものが1軒（約9.1%）となっている。時間的に下るほど減少する傾向にあるようにも思われるが、集計対象となる住居址の絶対数が少ないため断定は避ける。一昨年度の「住居址一括出土事例」、昨年度の「編年試案」等で取り上げた代表的な遺跡（住居址）では、古段階にあてた相模原市下溝上谷間戸B地区第3号住居址（第2図2）、同市下溝鳩川遺跡B地区1号住居址（古）、中段階にあてた平塚市原口遺跡11号敷石住居址等が挙げられる。

埋裏炉が確認された住居址は、確実なものとしては清川村に所在する宮ヶ瀬遺跡群久保ノ坂遺跡2号敷石住居址（第2図3）を抽出し得たのみである。同住居址の埋裏炉は浅い皿状の掘り込みとその脇に設置された炉体土器によって構成されるもので、炉体土器は、昨年度の「編年試案」で新段階に相当する資料として補足図に掲載した良好な資料である。第2図から分かるように、炉体土器の脇には炉石を思わせる大形礫が据えられている。報告書によればこれらは同時に機能していたものようで、とすれば、当該炉址は、石囲埋裏炉であった可能性も考えられる。なお、山北町尾崎遺跡第11号住居址は、称名寺式と思われる炉体土器を有する石囲埋裏炉が確認されている。報告書によると、同住居址は中期後葉期の所産とされているため今回は取り上げなかったが、久保ノ坂遺跡の事例とともに留意されるものである。

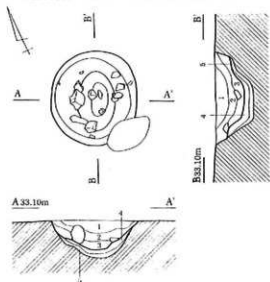
## ②壁下構造（第2図4・5、第3図6・7）

周壁下の施設等が捉えられた住居址は26遺跡45軒存在する。形態的には、周（壁）溝が廻るもの（2軒：約4.8%）、壁柱穴が廻るもの（31軒：約73.8%）、両者併用のもの（1軒：約2.4%）の3形態が確認されており、特段の施設等が施されていない住居址も8軒（約19.0%）存在する。第2・3図に各形態の代表的な事例を掲載した。

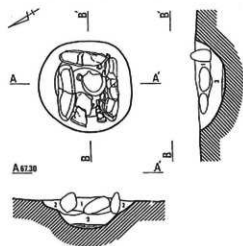
周（壁）溝が廻る住居址は、横浜市港北区篠原大原遺跡第39号住居址、中井町東向遺跡2号住居址（第2図4）の2軒を確認した。第2図に掲載した後者はやや断続的な周（壁）溝が円形に廻るもので、4～5本で構成される主柱穴が配されている可能性もある。昨年度に提示した「編年試案」からも分かるように、当該住居址は出土遺物に中段階のものと新段階のものが混在しており、時期決定が難しい。

壁柱穴が廻る住居址は、平塚市原口遺跡14号竪穴住居址等、円形基調の竪穴住居址もあるが、横浜市緑区松風台遺跡T-3、同稲ヶ原遺跡A地点B-4号住居址（第2図5）に代表されるように、大半は柄鏡形の形態を

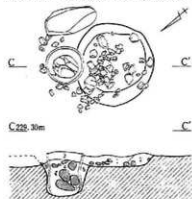
1. 藤沢市用田島層前遺跡 J2号竪穴住居址地床炉



2. 相模原市下溝上谷開戸B地区第3号住居址石囲炉



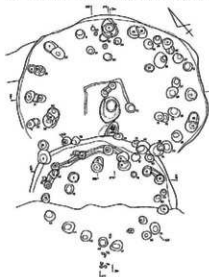
3. 清川村宮ヶ瀬遺跡群久保ノ坂遺跡 J2号敷石住居址埋壁炉及び炉体土器



4. 中井町東向遺跡 2号住居址



6. 横浜市港北区山田大塚遺跡 21号住居址



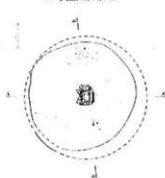
5. 横浜市磯ヶ原遺跡 A地点

B-4号住居址



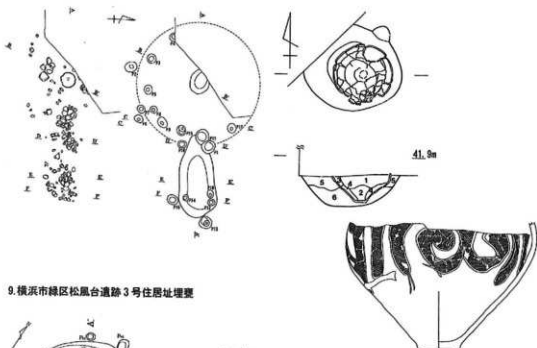
7. 藤沢市用田島層前遺跡

J1号竪穴住居址

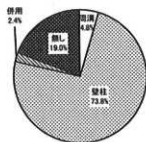
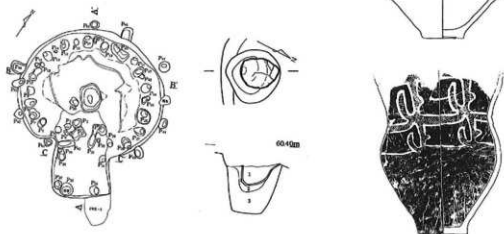


第2図 各名寺式期住居址形態・地下構造・埋炭①(住居址1/120 炉1/30 土器1/8)

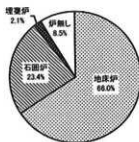
8. 川崎市中原区井田中原遺跡B地点JT-1埋室



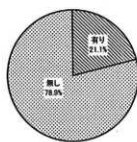
9. 横浜市緑区松風台遺跡3号住居址埋室



伊址形態 (47)



壁下構造 (42)



埋室 (38)

\* ( )内の数字は集計対象

第3図 称名寺式期住居址形態・壁下構造・埋室② (住居址1/120 伊1/30 土器1/8)

とる。時期判別が可能なもの内訳は、古段階に帰属するのが10軒(約32.3%)、中段階に帰属するのが11軒(約35.5%)、新段階に帰属するのが8軒(約25.8%)となっており、時期による大きな変動はみられない。

周(壁)溝と壁柱穴が併用されている住居址は、確実なものとして横浜市港北区山田大塚遺跡21号住居址(第3図6)を確認したのみである。中段階に帰属すると考えられる同住居址では、壁柱穴は主体部に全周するもの、周(壁)溝は奥壁側への部分的な施設にとどまっているようである。また、詳細が判然としなかったため今回の集成・集計対象からは外したが、称名時式期の住居址とされる横浜市港北区二ノ丸遺跡においても、周(壁)溝、壁柱双方が施設されている住居址が複数軒検出されているようである。横浜市域あるいは県東部における特徴と言えるかどうかは分からないが、留意しておきたい事実である。

周壁下に符段の施設を設けない住居址は7遺跡8軒存在する。横浜市保土ヶ谷区帷子峯遺跡13号住居址、藤沢市用田島居前遺跡J1号竪穴住居址(第3図7)等に代表されるが、報告書によると、帷子峯遺跡13号住居址は4穴の柱穴が配される住居址のようで、主柱穴が確認された数少ない該期住居址のひとつである。

### ③埋壘(第3図8・9)

埋壘が検出された住居址は7遺跡8軒存在する。横浜市緑区松風台遺跡3号住居址(第2図9)、同種ヶ原遺跡A地点B-12号住居址、川崎市中原区井田中原遺跡B地点JT-1(第2図8)、相模原市麻草遺跡第6号敷石住居址等に代表されるもので、時期判別の可能なもの内訳は、古段階に帰属するのが3軒、中段階に帰属するのが2軒、新段階に帰属するのが1軒となっている。

埋壘の施設位置は、大半のものが柄鏡形(敷石)住居址の張出部突端に設置されているが、川崎市中原区井田中原遺跡B地点JT-1のように、主体部に設置されるものも2軒存在するようだ。井田中原遺跡B地点JT-1は、柄鏡形(敷石)住居址主体部の中央部にJ字文の施された深鉢が埋置されるものである。当該埋壘は、一見埋壘とも見受けられるが、報告書によれば、土器内に焼土・炭化物がみられないことから埋壘(埋設土器)として取り扱われているようだ。(井辺一徳)

## Ⅲ. その他の遺構

### 1. 竪穴状遺構

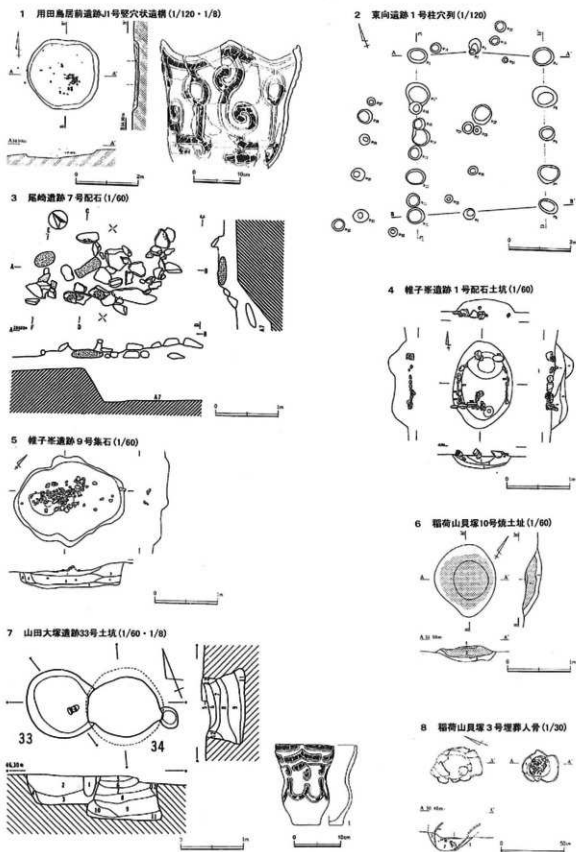
竪穴状遺構として報告されたものに藤沢市用田島居前遺跡の2基がある。平面形は円形もしくは不正楕円を呈し、長径約2.3~2.5mの小竪穴で、床面に炉やピットをもたない。遺物は覆土中層に集中する。J1号竪穴状遺構(第4図1)からは古段階後半に帰属する称名寺式土器が出土している。

### 2. 柱穴列・ピット群

該期の柱穴列として中井町東向遺跡で1基、ピット群として横浜市旭区小池遺跡に1基が報告されている。東向遺跡1号柱穴列(第4図2)は4間2間の掘立柱建物址状に柱穴が並ぶ。その規模は長軸5.3~5.6m、短軸4.7~4.8mと該期の竪穴住居址の規模に近い。小池遺跡のピット群は6穴が不規則に配置するものでその性格は明らかではない。

### 3. 配石遺構・配石土坑

下部に掘り込みをもたないものと掘り込みをもつものがある。前者を配石遺構とし、後者を配石土坑とし



第4図 弥生時代期の各種遺構

て報告する傾向がある。該期の配石遺構として東向遺跡2基、相模原市(旧津久井町)青根上野田遺跡1基、同市(旧城山町)川尻遺跡1基、平塚市良田大原遺跡1基、山北町尾崎遺跡2基があり、配石土坑には相模原市下溝川遺跡1基、横浜市保土ヶ谷区帷子峯遺跡1基がある。配石遺構の規模や形状は、大型礎3点と小型礎からなる小規模なもの(東向遺跡第1号配石)、9m×5.5mの範囲に展開し中心に礎が集中するもの(真田大原遺跡配石遺構)、6.7mにわたり列状をなすもの(青根上野田遺跡J1列石)など様々である。中でも、東向遺跡2号配石は6点の大型礎が径1m程の円形に配され、尾崎遺跡第7号配石(第4図3)は、土坑状の掘り込みの上面に礎の平面面をそろえて敷き詰めたように礎がまとまる。配石土坑は径1.5m程の円形もしくは楕円形の掘り込み内に礎を配するものである。特異なものとして、帷子峯遺跡1号配石土坑(第4図4)で比較的小型の礎が土坑の掘り込みの内側に沿って列状に配されている。

#### 4. 集石

集石は、配石土坑に類するが、礎が覆土の上位から中位にかけ分布し、小型の礎が充填されているものをさす場合が多い。該期の集石として、帷子峯遺跡6基、厚木市御屋敷遺跡第4地点3基が報告されている。御屋敷遺跡第3号集石、第5号集石を除き下部土坑を有する。礎の広がりや下部土坑の規模は、帷子峯遺跡9号集石(第4図5)を除き1m未満の小型のものである。礎も拳大の小振りなものからなる。

#### 5. 焼土址

該期の焼土址として清川村宮ヶ瀬遺跡群馬場(No6)遺跡2基、同村宮ヶ瀬遺跡群北原(No9)遺跡1基、青根上野田遺跡11基、東向遺跡1基、横浜市南区稲荷山貝塚2基(第4図6)を数える。径1m未満の範囲に焼土が広がるもので、青根上野田遺跡を除き皿状の掘り込みの中に焼土層が形成されている。いわゆる屋外炉としての機能が想定される。

#### 6. 土坑

該期の土坑は、帷子峯遺跡、横浜市港北区篠原大原遺跡、同区山田大塚遺跡、横浜市戸塚区上倉田遺跡第Ⅱ遺跡、横浜市都筑区小丸遺跡、同区川和向原遺跡、横須賀市吉井城山遺跡、相模原市(旧相模湖町)寸嵐一号遺跡・寸嵐二号遺跡、同市(旧津久井町)青根馬渡No2遺跡、同市上中丸遺跡、川尻遺跡、東向遺跡で報告されている。平面形は円形基調が主で、他に不正円形や楕円形を呈するものがある。径1m未満で深さ0.3～0.5mの規模のものが多いとされているが、山田大塚遺跡(第4図7)、川和向原遺跡、篠原大原遺跡にて坑底径が1mを超え、深さが1.5mを超えるフラスコ状土坑が発見されている。中には坑底の中央をさらに掘りくぼめ二段掘りを呈するもの含まれる。貯蔵穴としての機能が想定される。一方、青根馬渡No2遺跡J1号土坑は長径2m程の長楕円を呈し、中央から横倒しにして押しつぶされたように出土した新段階の深鉢が発見されている。墓坑としての機能が想定されよう。

#### 7. 埋葬人骨

該期の埋葬人骨として稲荷山貝塚3号埋葬人骨(第4図8)がある。3号埋葬人骨は、口縁上にして斜位に埋設された深鉢に人骨が収められたもので、胎息ないし新生児骨とされる。深鉢は称名寺式新段階後半に相当する。

(阿部友寿)

## IV. 貝塚

後期初頭の貝塚としては横浜市港北区篠原大原遺跡、同市金沢区称名寺貝塚、横須賀市榎戸B貝塚、三浦市間口東洞穴などがある。該期の特徴をあげると、分布が横浜から三浦半島の東京湾沿岸に多いこと、三浦半島の貝塚は岩磁性貝類が主体をなし、それ以外の貝塚では内湾砂泥底性貝類が主体であること、他の時期に比べマダイ・マグロなどの外洋性魚類やイルカなどの海獣類の捕獲が多く、外洋へ出た活発な漁労活動の存在が想定されること、などがある。

**篠原大原遺跡** 港北区篠原町にあり、標高約39～42mの台地上に位置する。貝層は台地縁辺の緩斜面に分布。該期のものでは土坑内貝層(23号土坑)(第5図)があり、称名寺式新段階の土器が出土している。同遺跡の貝類は12種確認され、イボキサゴが最も多く、それにオキシジミ・ハマグリが次ぐ(第6図)。内湾砂底性貝類が主体で、内湾泥底性や汽水性貝類は極僅かであった。獣骨ではマジジキ科、イノシシの骨が出土した。また32号土坑内貝層も該期の可能性がある。この他2号住居址内貝層・20号土坑内貝層からも称名寺式土器は出土しているが、堀之内1式土器を出土しているので、堀之内1式期に下ると思われる。

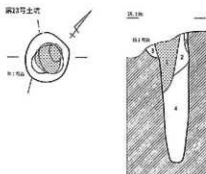
**称名寺貝塚** 金沢区称名寺境内からその周辺一帯に広がる貝塚。砂丘上、標高約5～8m付近にある。現在貝塚はA～1貝塚の9ヶ所の地点貝塚からなる。F地点以外は径約130mの範囲内に環状をなすように分布している(第5図)。F貝塚は中世、G貝塚は近世の貝塚である。該期の貝塚はA・B貝塚・D貝塚北側・H貝塚・I貝塚である。A貝塚は上部貝層が該期の所産で、層厚は約0.2m。下部貝層は加曾井E式期。貝類はオキシジミ・マガキ・ハイガイなど鹹水性貝類24種が存在した。魚類はマダイ・クロダイ・スズキ・マグロなど、鳥類はカラス・キジ、哺乳類はイノシシ・シカ・マイルカ・クジラなどが出土した。時期は称名寺式の前段階が主体。B貝塚は第1貝層(上層)が層厚0.4m。貝類はハマグリ・オキシジミ・アサリ・ツメタガイ・キサゴなど鹹水性貝類35種、魚類はマダイ・クロダイ・マグロ、哺乳類はイノシシ・シカ・マイルカ・クジラなどが出土した。第2貝層(下層)は層厚0.2～0.3m。貝類はハマグリ・アサリなど23種、魚類はマダイ・クロダイ、哺乳類はイノシシ・シカ・サル・マイルカが出土した。時期は称名寺式の新段階が主体であるが、堀之内式土器も少し出土している。I貝塚は層厚0.8m。貝類は鹹水性貝類32種出土。イボキサゴ・ウミナ・マテガイなどの砂底性貝類が主体であったが、スガイなど岩磁性貝類も存在した(第6図)。同地点の貝1区の貝類を層位的に見ると下層にイボキサゴ主体層、中層はマテガイやスガイ・ウミナなどが多い層があり、上層にイボキサゴが多い層が存在する傾向が見られた。魚類ではボラが最も多く、マダイ・クロダイが次ぎ、小形魚ではマイワシが多かった。哺乳類ではサル・イヌ・イノシシ・シカなどがあつた。時期的傾向について見ると、称名寺式土器古、中、新段階および堀之内1式が層位的に出土した。各地点通じてマイルカなどの海獣骨の存在が特徴的であった。

**榎戸B貝塚** 横須賀市浦郷町に所在する。斜面貝塚。貝層は厚さ約20cmと約35cmの2枚の貝層が重なっていた(第5図)。遺物は称名寺式の各段階を含んでおり、該期の貝塚である。貝類は鹹水性貝類13種が確認された。イシダタミ・クボガイ・スガイ・レイシ・カリガネエガイ・サザエなど岩磁性貝類が主体をなす(第6図)。魚類はマイワシなどの回遊魚の他、マグロ・マダイといった外洋性魚類、カンダイ・カサゴの岩磁性魚類があり、鳥類ではヒメウなどの水鳥、哺乳類ではマイルカ・バンドウイルカが多かった。

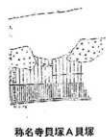
**間口東洞穴** 三浦市南下浦町松輪、東京湾に面した海蝕洞穴内にある。標高約8m。該期の貝層は4ヶ所存在した(第5図)。第1・6貝層は土坑内貝層、第4貝層は1.4×1.1m、層厚0.13m、第5貝層は0.56×0.46



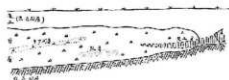
藤名寺貝塚



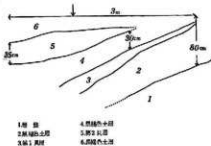
藤原大原遺跡 23号土坑



藤名寺貝塚A貝塚

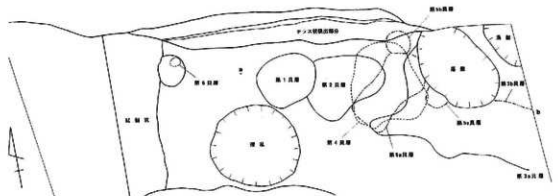


藤名寺貝塚B貝塚



1.埋土 2.埋土の上層  
3.埋土の底層 4.埋土の外周  
5.埋土の内周 6.埋土の外周

板戸B貝塚

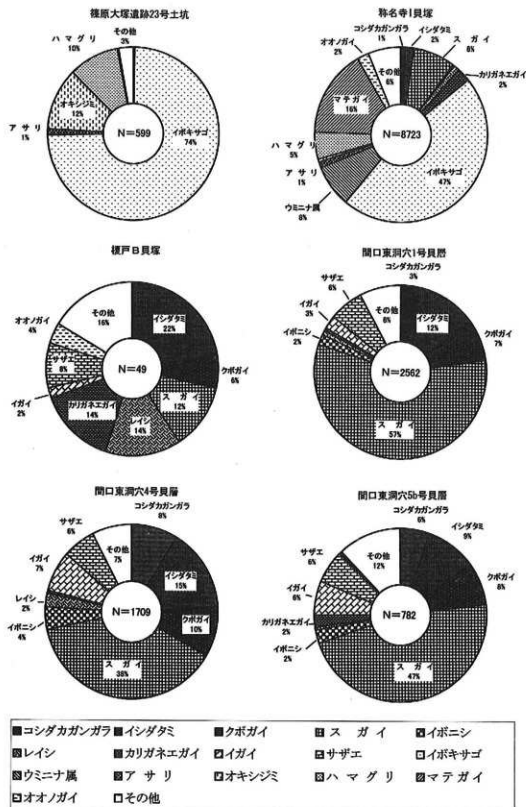


- 埋土上層 1層 埋土の上層 埋土の上層と埋土の底層との境界を示す。2層 埋土の上層 埋土の上層と埋土の底層との境界を示す。3層 埋土の上層 埋土の上層と埋土の底層との境界を示す。4層 埋土の上層 埋土の上層と埋土の底層との境界を示す。
- 埋土底層 1層 埋土の底層 埋土の底層と埋土の上層との境界を示す。2層 埋土の底層 埋土の底層と埋土の上層との境界を示す。3層 埋土の底層 埋土の底層と埋土の上層との境界を示す。4層 埋土の底層 埋土の底層と埋土の上層との境界を示す。
- 埋土外周 1層 埋土の外周 埋土の外周と埋土の内周との境界を示す。2層 埋土の外周 埋土の外周と埋土の内周との境界を示す。3層 埋土の外周 埋土の外周と埋土の内周との境界を示す。4層 埋土の外周 埋土の外周と埋土の内周との境界を示す。
- 埋土内周 1層 埋土の内周 埋土の内周と埋土の外周との境界を示す。2層 埋土の内周 埋土の内周と埋土の外周との境界を示す。3層 埋土の内周 埋土の内周と埋土の外周との境界を示す。4層 埋土の内周 埋土の内周と埋土の外周との境界を示す。

間口東溝穴

第5図 藤名寺式期の貝塚





第6図 称名寺式期貝塚の貝類組成

m、層厚0.1mの面的な貝層である。貝類は第1貝層が45種、第4貝層が34種、第5b貝層が42種、第6貝層が15種と種類が多かった。みなスガイが最多で、他にイシダタミやクボガイ・サザエなどが多く、殆どが岩礁性貝類である(第6図)。魚類はマダイが多く、他に外洋性魚類(サメ)・回遊性魚類(サバ)・岩礁性魚類

(ウツボ・カワハギ) がやや目立った。鳥類やイルカを含む哺乳類は極僅かであった。(松田光太郎)

## V. 土製品・骨角製品

### 1. 土製品

本項では称名寺式期の土製品について非常に簡単にはあるが概要を記した。項目にあげた土製品の多くは属性に乏しく、編年案の各段階(古～新)への設定が困難なため、遺構外出土の遺物は極力除外し、当該期の遺構から出土した遺物を取り扱うこととした。

#### ①土器片鍾(第7図1～5)

形態は長方形や楕円形の土器片の長軸方向に浅い切り込みを加えているものが多い。土器片の部位や縦横の取り方に顕著な傾向は見られない。時期は、中・新段階に比定される。分布は、県東部の沿岸部に集中する傾向が認められる。

#### ②土製円盤(第7図6～10)

形状は、円形・不整形円形を呈しており、大きさもまちまちである。時期は、中・新段階に比定される。分布は、県東部から県北西部に認められる。

#### ③ミニチュア土器(第7図11～20)






ここでは手捏土器などを含めた器高や最大径が約10cm以下の小形土器を取り扱うこととする。古段階に比定されるもの(第7図11～13)は、小さいながらも丁寧な作成されている。それに対して、中・新段階に比定されるもの(第7図14～17)は、粗雑に作成された無文土器がほとんどである。また、ミニチュア土器に含めてはいるが、第7図18～20は、蓋形土器である。時期は、18が古段階、19・20が中段階に比定される。分布は、県東部から出土している。

#### ④その他の土製品(第7図26・27)

上記以外の土製品として遺構内の出土に限って列挙しておく。第7図26は、横浜市都筑区水窪遺跡1住から出土している楕円形をした土製品で、長軸方向の上下両端にくぼみがつけられている。時期は、中段階に比定される。27は、三浦市間口東洞穴2号土坑から出土している環状土製品である。上部には小穴が穿たれており、側面中央部には1条の溝が巡らされている。

### 2. 骨角製品

ここでは称名寺式期の骨角製品(第7図21～25)について非常に簡単にはあるが、概要を記した。また、骨角製品のほとんどが貝塚出土の遺構外遺物であるため、本項では遺構外遺物を取り扱うこととした。各段階への設定は、同一貝塚から出土している土器を基準とした。第7図21は、間口東洞穴から出土している鹿角製の遺物である。先端部には切り込みが多く付けられている。22～24は、横浜市金沢区称名寺I貝塚から出土している釣り針、銚先などの骨角製品である。称名寺I貝塚からは、これら以外にも多くの骨角製品が出土しており、そのほとんどが漁労具である。25は、称名寺I貝塚出土の貝製品である。二枚貝の縁辺部を刃部として使用している。時期は、中・新段階に比定される。分布は、県東部に集中する。(岡 登)

土器片鉢	 <p>1 稲荷山貝塚 2 称名寺 (1貝塚区) 3 称名寺 (夢道区) 4 藤原大原 2住 5 藤原大原 92住</p>	
土製円盤	 <p>6 藤原大原 3土坑 7 藤原大原 2住 8 称名寺 (1貝塚区) 9 青根上野田 J11土坑址 10 当麻 6住</p>	
ミニチュア土器	 <p>11 稲ヶ原A B4住 12 稲ヶ原A B4住 13 稲ヶ原A B4住 14 関谷島ノ神西 3住 15 関谷島ノ神西 3住 16 関谷島ノ神西 5住 17 榛子釜 15住 18 山田大塚 土坑 19 水窪 1住 20 水窪 1住</p>	
骨角製品	 <p>21 関口東洞穴 22 称名寺1貝塚 23 称名寺1貝塚 24 称名寺1貝塚 25 称名寺1貝塚</p>	<p>その他の土製品</p>  <p>26 水窪 1住 27 関口東洞穴</p>

第7図 称名寺式期の土製品・骨角製品 (S=1/4)

# 宮ノ台式土器の研究（6）

弥生時代研究プロジェクトチーム

## はじめに

これまで宮ノ台式土器についての研究史や基準資料の検討等を行ってきたが、今回は宮ノ台式土器後半段階の神奈川県内における地域色について検討を試みることにする。

検討対象は、これまでに「宮ノ台式土器の研究（1）～（5）」（弥生時代研究プロジェクトチーム2002～2006）で検討を加えてきた大別5段階、細別7段階の区分のうち、宮ノ台式土器の後半段階にあたるⅣ段階、Ⅴ段階前半、Ⅴ段階後半の時期とする（註1）。分析対象とする遺跡は、折本西原遺跡と砂田台遺跡とを県内の東西両地域を代表する遺跡として取り上げ、その間に位置する池子遺跡群と下寺尾西方A遺跡を加えた4遺跡とする。

宮ノ台式土器に見られる地域色については、これまでに安藤広道、大木 務、小倉淳一、黒沢 浩、穴戸信悟らによって言及されていて、これらの研究概略については「研究紀要7」においてかつてまとめた（弥生時代研究プロジェクトチーム2002）。よって、これまでの研究における地域色に関する指摘を踏まえて、今回は壺形土器の文様構成を検討対象として下記の4項目を分析項目として設定し、遺跡ごとの様相の違いを抽出し比較検討することとする。

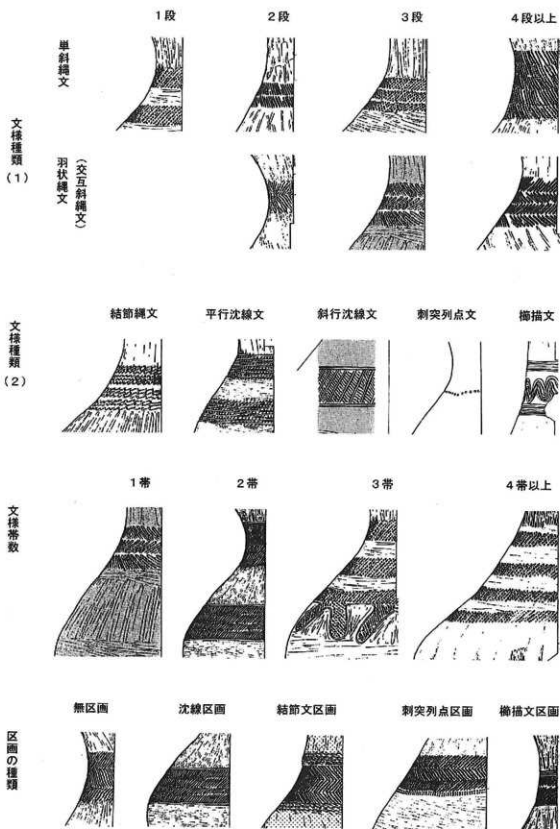
分析方法と項目の設定等については飯塚美保、池田 治、櫻井真貴、新聞基史、渡辺 外で協議し、資料のグラフ化は池田が行った。執筆は池田、櫻井、新聞、渡辺で分担し、池田が編集した。分担は各文末に記した。

（池田）

## 1. 検討項目の設定

これまでの研究の成果に基づき、地域色を検討するための集計・分析項目として、文様帯の数、文様帯区画の種類、帯縄文帯の縄文構成、帯縄文帯の施文段数の4項目を用意した。各項目に関わる分類の模式図を第1図に示した。分析対象とした土器資料は、基本的には頸部最小径以下一胴部最大径以上の文様帯数が把握できる図化された土器とした。なお、この範囲の全てが残っていない資料にあっても、文様帯数が推測できる程度の資料は、「文様帯区画の種類」以下の3項目については集計対象に加えている（註2）。このため、文様帯数の集計対象とした個体数とそれ以外の分析項目の集計対象となった個体数は異なる。また、1つの土器に2つ以上の文様帯がある場合などの文様帯区画や文様構成、縄文構成（施文方法）の集計については、1つの土器で同じ文様や要素が何回出現しても1としているが、2種類の文様が施文されている場合にはそれぞれ1としているので、分析対象の土器個体数と文様別集計数の合計とは一致しない。それぞれの分析項目ごとに集計対象の合計数をもって100%としている。

○文様帯の数 文様帯の減少、無文化の傾向を示す指標でもあるが、文様帯数の構成比に地域色が現れる可能性がある。集計対象とした資料は、頸部最小径以下一胴部最大径以上の文様構成が把握できる図化された土器とした。文様帯の集計は、横帯文帯（横位の帯状文様帯）を計数することとし、結紐文や鋸歯状文などの意匠文は数えていない。横帯文と横帯文の間に無文帯もしくは意匠文を挟む場合に、別の文様帯として数



第1図 集計要素の模式図

えている。「無文」については、頸部最小径以下一胴部最大径以上の範囲に文様がないことを確認できる資料をもって無文として扱った。このため、口縁部外面に文様帯があるものについても、頸部以下に文様が施文されていないものは「無文」に含めている。

○文様帯区画の種類 時期が下るにつれ無区画縄文帯が盛行する傾向にあると指摘されていて、その変化傾向および区画方法の種類に地域差が現れる可能性を考えた。沈線区画、梅描文区画、刺突列点区画、結節縄文区画と文様帯に区画が無いもの(無区画)に分けた。横帯文帯を対象とし、意匠文を録取る沈線などは集計対象としていない。

○帯縄文帯の縄文構成(施文方法) 結節縄文は東京湾東岸地域に多く、東京湾西岸地域および相模湾沿岸地域では使用頻度が低いと指摘されるように、縄文原体の種類や施文方法の区別に地域色が現れる可能性が高い。ここでは原体の細分までは踏み込まず、斜縄文の施文方法の区分を主として、従属的に結節縄文とその他の縄文の出現率を示すこととした。斜縄文は主として無節又は単節縄文を文様の長軸方向に沿って回転させたものであるが、ここでは、同一の原体もしくは同一方向の撚りの原体による斜縄文で構成される文様を単斜縄文とする。対して羽状縄文(羽状構成縄文=交互斜縄文)は撚りの異なる斜縄文を上下に交互に並べて回転させ羽状に文様を施したものを指し、羽状施文となるように原体を作っている羽状縄文もここに含めている。結節縄文は所謂S字状結節文を複数条で1単位とする構成の原体を回転させて施文するもので、神奈川県域における宮ノ台式土器では、主体的な文様要素とはならない。

○帯縄文帯の施文段数 文様帯の単純化、縮小化と関連する指標であるが、縄文構成(施文方法)とも関連していて、施文段数の多少や変化推移が地域色を示すと考えられる。上記の縄文構成(施文方法)における斜縄文1単位の施文を1段として数える。よって羽状縄文(羽状構成縄文)は最少段数が2段である。なお1つの土器において2帯の文様帯で異なる段数で施文している場合には、最大の施文段数をもって代表させて集計している。(池田)

## 2. 対象遺跡の特徴

### ○折本西原遺跡(第7図)

横浜市都筑区折本町に所在し、鶴見川の沖積低地を見下ろす下末吉台地上に立地する環濠集落である。調査は部分的であるが、集落面積が最大の時期で70,000m<sup>2</sup>以上と推定され、環濠内から竈穴住居のほか、大型



第2図 対象遺跡の位置

方形周溝墓も見つかっている。宮ノ台式期の中頃から終末(Ⅲ段階からⅤ段階後半)の遺跡である。

集計対象は76個体である。頸部~胴部文様帯の数については、無文が49%、1帯45%、2帯2%、3帯4%であり、ほぼ無文もしくは1帯に二分され、2帯以上の比率が比例的に少ない。文様帯区画の種類は、無区画71%、沈線区画20%、梅描文区画2%、刺突列点区画7%であり、結節縄文区画は皆無である。ほぼ3:1の割合で無区画が主体を占め、次いで沈線区画が多く、他の3遺跡に比して刺突列点区画の比率が大きい。出現する文様種類のうち約79%

を占める帯縄文帯の構成では、単斜縄文67%、羽状縄文27%、結節縄文6%と、主体となる単斜縄文と羽状縄文の比率はほぼ2:1となる。また、結節縄文は決して高い比率ではないが、他の3遺跡と比べると無視できない出現率である。帯縄文帯の施文段数は、1段が13%、2段が34%、3段22%、4段以上31%であり、4段以上の多段の比率は他の3遺跡と大きな差は無いが、1~3段のうち、2段の比率が高く1段の比率が低いことが特徴である。(新聞)

#### ○池子遺跡群No 1-A地点(第8図)

三浦半島の付け根にあたる逗子市池子に所在し、逗子湾に注ぐ田越川支流の池子川が解析した樹枝状の谷戸に展開する遺跡群である。No 1-A地点は谷戸入口部にあたり、旧池子川の流路が調査区中央を蛇行し、その周囲に居住域・墓域がある。遺物は自然流路内から大量に出土している。出土土器は宮ノ台式期中頃から後半(Ⅲ~Ⅴ段階)が中心であるが、Ⅱ段階や終末(Ⅴ段階後半)の土器も出土している。今回集計したⅤ段階の資料は、いずれも前半に属する資料である。

集計対象は88個体である。頭部~胴部文様帯の数を見ると、無文が50%で、以下1帯23%、2帯17%、3帯9%、4帯以上1%と、半数が無文であることは他の3遺跡とほぼ共通するが、文様帯を持つ個体中では1帯が主体を占めるものの、2・3帯が合計で26%と半数以上を示し、特に2帯が1帯に近い比率で出現する点を特徴とする。また、3帯では高い比率で結紐文(二又文)や鋸歯文などの意匠文が付加される点も注目される。文様帯区画では、無区画が79%、沈線区画13%、刺突列点区画4%、結節縄文区画4%となり、ほぼ3:1の割合で無区画が主体を占め、次いで沈線区画が多い点では砂田台遺跡・折本西原遺跡と差は認められない。出現する文様種類のうち約71%を占める帯縄文帯の構成では、単斜縄文60%、羽状縄文38%、結節縄文2%と、単斜縄文が主体的であるが、単斜縄文と羽状縄文の比率がほぼ3:2と、羽状縄文もそれなりの比率を占めている。また、帯縄文帯の施文段数では、1段22%、2段18%、3段22%、4段以上37%であり、4段以上の多段の比率が最も高いが、他の3遺跡に比して1段の比率が高く、1~3段が拮抗することが特徴として挙げられる。(新聞)

#### ○下寺尾西方A遺跡(第9図)

県中央部を流れる相模川の東側、茅ヶ崎市下寺尾に所在し、小出川が形成した沖積低地に面した舌状台地の先端部に立地している。遺跡は、隣接遺跡も含めて新旧2本の環濠がめぐる弥生時代中期後半の環濠集落であることが確認されていて、環濠内側の面積は県下最大級と推定される。弥生時代中期の遺構は新旧2本の環濠、堅穴住居、土坑などが発見されていて、宮ノ台式期中頃(Ⅲ段階)から後半が主体の遺跡と考えられるが、前半期から開始している可能性がある。

2002年の調査では堅穴住居跡から良好な一括資料が得られているが、遺跡が保存されることになったために完備した遺構は少なく、今回の分析対象となった資料数は少ない。このため時期別の分析を行うことは出来なかったが、県央部に所在する代表的な遺跡として取り上げ、Ⅳ段階以降の様相について総合的比較の対象として提示した。集計対象資料は総数25個体である。Ⅳ段階からⅤ段階を通しての全体的な様相は、項目によっては資料数の少なさによる偏りが現れている可能性があるが、文様帯区画の種類において無区画の比率が他の遺跡に比べて明らかに低く、そのぶん沈線区画および鋸歯文区画の比率がやや高くなっていることと、帯縄文帯の施文段数において2段施文の比率が半数以上を占める(54%)ことが遺跡の特徴として挙げられる。帯縄文帯の縄文構成は単斜縄文(54%)と羽状縄文(46%)がほぼ半々であり、頭部~胴部文様帯の数では無文(48%)と1帯(48%)ではほとんどを占め、2帯以上は少数である。(池田)

## ○砂田台遺跡(第10回)

県中央部を流れる相模川の西側、秦野市南矢名に所在し、金目川と大根川に挟まれた北金目台地の北側突端部に立地している。弥生時代中期後半の遺構は、新旧2本の環濠、堅穴住居、溝状遺構、方形周溝濠、土坑が発見されていて、宮ノ台式期の前半(Ⅱ段階)から終末まで続く遺跡である。

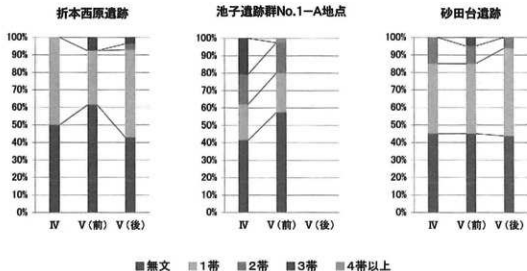
集計対象資料は総数87個体である。頭部~胴部文様帯の数は、無文(44%)と1帯(43%)がほぼ同比率を占め、2帯(11%)と3帯(2%)が若干存在しているが、2帯の占める比率は他の3遺跡よりも高い。文様帯区画の種類は無区画(75%)が大多数を占め、次いで沈線区画(17%)が多く、この2種で90%余りを占める点は折本西原遺跡や池子遺跡群No.1-A地点と同様の傾向を示すが、櫛描文による区画がやや多い比率となっている。出現する文様種類のうち約84%を占める帯縄文帯の構成では、単斜縄文が25%、羽状縄文が75%であり、3/4を羽状縄文が占める状況は他の遺跡と大きく異なる特徴である。帯縄文帯を構成する縄文の施文段数は、3段(41%)が最も多く、次いで4段以上(30%)、2段(23%)、1段(5%)の順であり、1段の比率がきわめて少ないことと3段以上の多段構成が7割以上の高率である点が特徴である。これは3段および4段以上で構成される羽状縄文帯が多いことによるものである。(池田)

## 3. 項目別の分析

## ○頭部~胴部文様帯の数(第3図)

集計された資料数は、折本西原遺跡47点、池子遺跡群No.1-A地点78点、砂田台遺跡56点である。

折本西原遺跡では、Ⅳ段階において無文と1帯が半々であるのに対し、Ⅴ段階前半においては一時的に無文の割合が増し1帯が減少する一方、3帯が出現する。Ⅴ段階後半では1帯・3帯が若干量存在するが再び無文と1帯のものが拮抗した比率を占めるようになる。池子遺跡群No.1-A地点においては、Ⅳ段階からⅤ段階前半にかけて無文のものの比率が増すところは、折本西原と同じ傾向であるが、一定の割合で両時期とも1帯・2帯のものの比率が維持され、Ⅴ段階前半には3帯のものが見られなくなり代わりに4帯のものが若干存在している。砂田台では各時期を通して無文のものが50%弱を占め、また1帯・2帯のものも比較的安定して存在している。小さい変化ではあるが時期を追って2帯のものが減少する傾向にある。Ⅴ段階前



第3図 頭部~胴部文様帯数の比較



半においては3帯のものも存在するが、わずかである。

頭部～胴部文様帯の数は、各遺跡とも認体的には無文のものが50%前後の比率で存在していることが共通しているが、時期別の推移をみると折本西原遺跡と砂田台遺跡が比較的安定的であるのに対して、池子遺跡群No.1-A地点では明らかな増加傾向を示している。また、折本西原遺跡と砂田台遺跡では1帯のものが40～50%程度で安定的に推移しているのに対して、池子遺跡群No.1-A地点ではV段階後半への変化が明らかに出来なかったものの、無文が増加するのに対して1帯と2帯は安定した比率を占め、合わせて40%程度であることがきわめて特徴的である。

(櫻井)

○文様帯区画の種類 (第4図)

集計された資料数は、折本西原遺跡47点、池子遺跡群No.1-A地点70点、砂田台遺跡56点である。

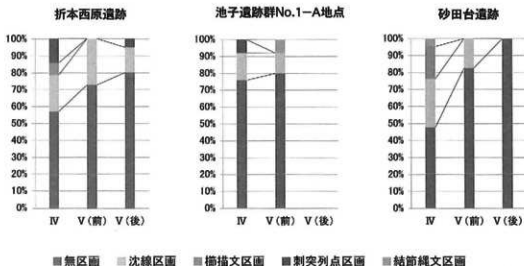
文様帯区画の種類については、推移は資料が少なく分析対象から除外した池子遺跡群No.1-A地点のV段階後半を除けば、概ね同じような傾向が見て取れる。つまり無区画が大半を占め、時期が新しくなるにつれその比率が増大している。またIV段階においては、沈線区画、櫛描文区画、刺突列点区画、結節縄文区画が一定の割合で混在している。無区画を含めて折本西原遺跡と砂田台遺跡では4種類の、池子遺跡群No.1-A地点においても3種類の区画方法が認められるが、V段階前半になると池子遺跡群以外は2種類となってしまう、圧倒的に無区画が高比率となる。V段階後半ではさらに無区画の比率が高まり、折本西原遺跡においては8割を占め、砂田台遺跡においては対象資料のすべてが無区画となってしまう。必ずしも全資料において他の区画方法が皆無になるわけではないが、圧倒的に無区画化の傾向にあることを示していて、砂田台遺跡の特徴となっている。

(櫻井)

○帯縄文帯の縄文構成 (第5図)

対象となる資料は、折本西原遺跡と池子遺跡群No.1-A地点がそれぞれ48点、砂田台遺跡56点である。

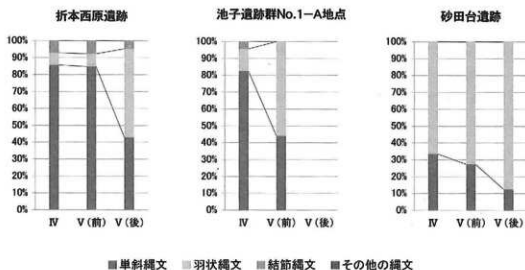
これらの資料について、帯縄文を構成する文様要素としての縄文の施文方法に着目すると、単斜縄文、羽状縄文、結節縄文の3種に大別できる。この3種の縄文による構成比率を各遺跡において時間的な推移と共にみていくと、構成比率そのものについては折本西原遺跡と池子遺跡群No.1-A地点が近似し、砂田台遺



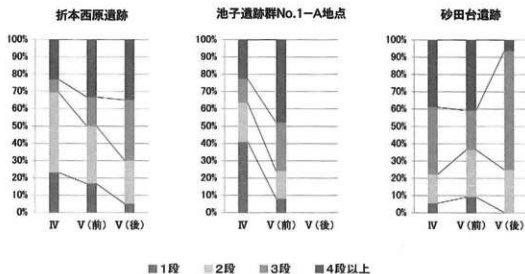
第4図 文様帯区画の比較

跡の場合は前2者とは全くと言って良いほど異なる状況が認められる。

折本西原遺跡では、IV段階で単斜縄文が85%と圧倒的な比率を占め、残りは羽状縄文と結節縄文の例が1点ずつ存在している。この傾向はV段階前半でも殆ど変わらないが、V段階後半に至って単斜縄文と羽状縄文の両者がそれぞれ約45%程度を占めるようになり、急激な変化を見せる。こうした構成比率とその推移については、池子遺跡群No.1-A地点の旧河道から出土した資料の場合でもほぼ同様の傾向を見せる。異なる点は、折本西原遺跡でV段階の前半から後半にかけて起きた変化が、V段階前半で既に発生しているところであろう。砂田台遺跡では、単斜縄文と羽状縄文の両者しか見られず、IV段階で羽状縄文が65%程度を占めている。次いでV段階の前半から後半へと推移していくに伴ってその比率は更に増加し、90%近くを占めるようになる。



第5図 帯縄文帯の施文段数の比較



第6図 帯縄文帯の施文段数の比較

これら3遺跡における様相が、そのままそれぞれの地域の傾向として捉える事が出来るかどうかは今後の課題となるが、県東部の遺跡(折本西原遺跡(下末吉台地)、池子遺跡群(三浦半島))と県西部の遺跡(砂田台遺跡(金目川流域))が示す相違性は、帯縄文帯の施文段数においても認められる。(渡辺)

#### ○帯縄文帯の施文段数(第6図)

対象となる資料は折本西原が45点、池子が47点、砂田台が56点である。ここでは単斜縄文と羽状縄文における縄文の施文段数を対象としている。施文された帯縄文帯の縄文の段数は、当然ながら文様要素の選択や文様構成のあり方と連動するものであり、遺跡毎に比較してみると、その推移と比率については折本西原と池子が近似し、砂田台が前2者とは異なるという状況が認められる。

折本西原遺跡では、Ⅳ段階では施文段数が1～2段のものが70%近くを占めるのに対し、Ⅴ段階後半では30%未満に減少し、残りを3段以上のものが占めている。こうした傾向は池子遺跡群No.1-A地点の資料にも共通し、Ⅳ段階からⅤ段階への変化としてさらに顕著である。

一方、砂田台遺跡ではⅣ段階で既に3段以上のものが80%近くを占めており、3段及び4段以上のものがほぼ同じ比率であったところが、Ⅴ段階後半で3段の例が6割に増加する、という変化が見られる。しかしながら、全体の傾向として1～2段と3段以上との両者の比率で見た場合、大きな変化はなくⅤ段階後半においても3段以上が80%近くを占めている状況である。この点は、土器の頸部～胴部における文様帯数の変化が非常に少ないことも関連しているものと考えられる。(渡辺)

## まとめ

宮ノ台式土器のⅣ段階、Ⅴ段階の壺形土器の文様に見られる様相を取り上げ、地域色の検討を試みた。

集計・分析の結果、壺形土器に施文された帯縄文帯の縄文構成と施文段数において、県東部の遺跡(折本西原遺跡・池子遺跡群)と県西部の遺跡(砂田台遺跡)とで明白に様相の違いが認められ、砂田台遺跡における羽状縄文の多用と縄文施文段数の多段施文が特色として示された。また池子遺跡群では、有文の資料のうち頸部～胴部文様帯数において2帯の比率が高いという特徴が見られた。

集計した資料数の制約もあり、少ない個体数を対象とした分析となってしまった。従来から指摘されてきた事柄を追認しただけである点もあろうが、しかしながら地域色に関連すると思われる傾向を示すことができたのではないと思う。これらの特徴が遺跡単位の個性に過ぎないか遺跡周辺の地域色として認められるものであるかは、対象とした遺跡周辺のデータで検証しなければならない課題である。(池田)

## 註

1. 「宮ノ台式土器の研究(1)」(弥生時代研究プロジェクトチーム2002)で示した編年対照表の12区分のうち、9・10をⅣ段階、11をⅤ段階前半、12をⅤ段階後半として扱った。各遺跡の遺物の所属時期は、基本的に報告書の時期区分・分類に従って、前記編年対照表による対応に拠った。
2. この点は集計資料数の制約を緩和するためであるが、同時に抽出対象の選定に不徹底が残ることとなった。

## 文献

弥生時代研究プロジェクトチーム 2002～2006 「宮ノ台式土器の研究(1)～(5)」【研究紀要7～11】(財)かながわ考古学財団  
 ※4遺跡に係る発掘調査報告書については省略した。【研究紀要8】に記載した文献一覧を参照されたい(弥生時代研究プロジェクトチーム2003)。

折本西原遺跡

文様帯(横帯文)の文様種類

単斜縄文			羽状縄文(交互斜縄文)				結節縄文	その他の縄文	段縄文	沈線文			柳描文
1段	2段	3段	4段以上	2段	3段	4段以上				平行沈線	斜行沈線	刺突列点	
6	13	5	8	2	5	6	3	0	0	6	1	2	4

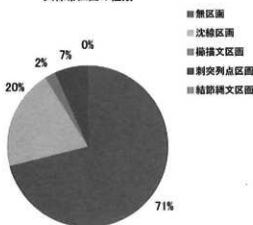
頭部～胴部文様帯の数(+mは意匠文が付加されているもの)

無文	1帯		2帯		3帯		4帯以上	
	1帯	1+m	2帯	2+m	3帯	3+m	4帯	4+m
23	20	1	1	0	2	0	0	0

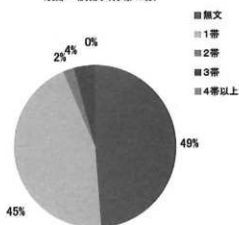
文様帯区画の種類

無区画	沈線区画	柳描文区画	刺突列点区画	結節縄文区画
32	9	1	3	0

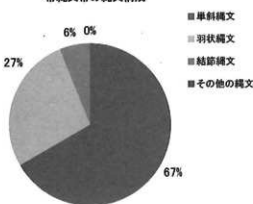
文様帯区画の種類



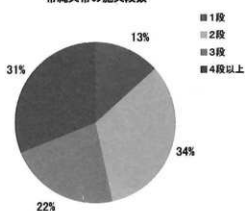
頭部～胴部文様帯の数



帯縄文帯の縄文構成



帯縄文帯の施文段数



集計対象遺構: (折本西原) Y1号住、Y2号住、Y4号住、Y5号住、Y8号住、Y9号住、Y13号住、Y15号住、Y17号住、Y18号住、Y22号住、Y28号住、Y34号住、Y35号住、Y37号住、Y40号住、Y44号住、Y48号住

(折本西原-1) 3号住、4号住、5号住、6号住、7号住、8号住、10号住、11号住、13号住、14号住、15号住、17号住、18号住、19号住、20号住、21号住、22号住、23号住、25号住、26号住、27号住、28号住、29号住、31号住、33号住、36号住、37号住

第7図 折本西原遺跡の壺形土器の文様様相 (Ⅳ・Ⅴ段階)

池子遺跡群No.1-A地点

文様帯(縹帯文)の文様種類

甲斜縹文			羽状縹文(交互斜縹文)				結節縹文	その他の縹文	擬縹文	沈縹文			柳縹文
1段	2段	3段	4段以上	2段	3段	4段以上				平行沈縹	斜行沈縹	刺突列点	
11	7	6	6	2	5	12	1	0	0	11	1	1	7

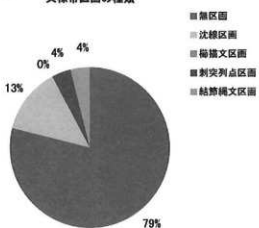
頭部~胴部文様帯の数(+mは意匠文が付加されているもの)

無文	1帯		2帯		3帯		4帯以上	
	1帯	1+m	2帯	2+m	3帯	3+m	4帯	4+m
35	16	0	9	3	1	5	1	0

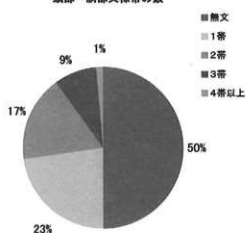
文様帯区画の種類

無区画	沈縹区画	柳縹区画	刺突列点区画	結節縹文区画
41	7	0	2	2

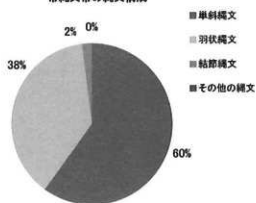
文様帯区画の種類



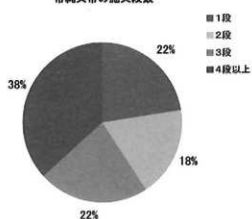
頭部~胴部文様帯の数



帯縹文帯の縹文構成



帯縹文帯の施文段数



集計対象遺構: No.1-A地点自然流路

第8図 池子遺跡No.1-A地点の壺形土器の文様様相 (IV・V段階)

## 下寺尾西方A遺跡

文様帯(横帯文)の文様種類

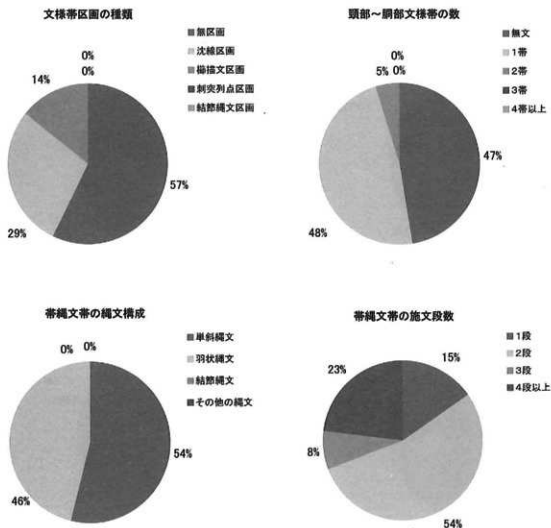
単斜縄文				羽状縄文(交互斜縄文)				結節縄文	その他の縄文	擬縄文	注線文			樹描文
1段	2段	3段	4段以上	2段	3段	4段以上	平行注線				斜行注線	刺突列点		
2	5	0	0	2	1	3	0	0	0	0	0	0	1	

頭部～胴部文様帯の数(+mは意匠文が付加されているもの)

無文	1帯		2帯		3帯		4帯以上	
	1帯	1+m	2帯	2+m	3帯	3+m	4帯	4+m
10	10	0	1	0	0	0	0	0

文様帯区画の種類

無区画	沈線区画	樹描文区画	刺突列点区画	結節縄文区画
8	4	2	0	0



集計対象遺構: 1KY1号住、Y5号住、Y9号住、Y12号住

第9図 下寺尾西方A遺跡の甕形土器の文様様相(Ⅳ・Ⅴ段階)

砂田台遺跡

文様帯(横帯文)の文様種類

単斜縄文				羽状縄文(交互斜縄文)			結節縄文	その他の縄文	振縄文	沈線文			柳縄文
1段	2段	3段	4段以上	2段	3段	4段以上				平行沈線	斜行沈線	刺突列点	
3	5	3	3	8	20	14	0	0	1	5	1	0	4

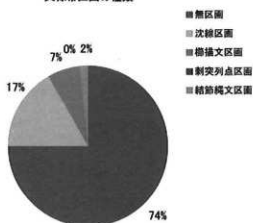
頸部~胴部文様帯の数(+mは意匠文が付加されているもの)

無文	1帯		2帯		3帯		4帯以上	
	1帯	1+m	2帯	2+m	3帯	3+m	4帯	4+m
25	23	1	4	2	0	1	0	0

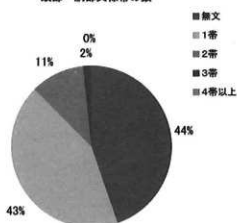
文様帯区画の種類

無区画	沈線区画	帯挿文区画	刺突列点区画	結節縄文区画
45	10	4	0	1

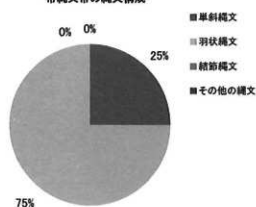
文様帯区画の種類



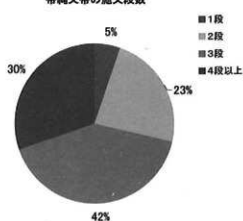
頸部~胴部文様帯の数



帯縄文帯の縄文構成



帯縄文帯の施文段数



集対象遺構: 1号住、3号住、4号住、7号住、8号住、10号住、17号住、22号住、25号住、30号住、31号住、33号住、36号住、46号住、49号住、51号住、57号住、58号住、68号住、73号住、74号住、89号住、107号住、108号住、125号住、135号住、137号住、138号住、139号住、140号住、141号住、146号住、154号住、155号住、158号住、160号住、166号住、168号住

第10図 砂田台遺跡の壺形土器の文様様相 (IV・V段階)

# 神奈川県における集落遺跡出土の瓦の様相

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

## はじめに

瓦は、寺院建築と共に大陸からもたらされ、本格寺院のさきがけとなった飛鳥寺の建立により初めて寺院の屋根を飾った。その後国家的政策に基づき畿内を中心に次々と寺院は建立され、併せて瓦も大量生産、大量供給された。また、瓦は寺院のみならず、宮殿や官衙の一部の屋根をも飾るようになった。

時代の流れの中で法灯が絶え、跡形もなくなった寺院も瓦の発見がかつてそこに寺院が存在していたことを教えてくれる。

瓦の表面には成形時に使用した道具の痕跡を明瞭に留め、さらに軒瓦にいたっては多様な文様が施されているため、古くから研究者の目にとまり、研究の対象とされ、今日にいたるまで多面的に研究が重ねられ、多くの成果が上げられている。

瓦の研究は、製作技法、文様の系統・系譜・変遷、年代など瓦自体に向けられたもの、そして、その研究の深化は瓦が葺かれていた寺院の造営時期・期間、寺院の変遷、寺院の造営主体の問題、さらには瓦の生産元の窯と供給先の寺院との流通関係といった研究課題にも当然のことながら大きな役割を果たしてきた。県下においてもこうした観点での研究が盛んになされ成果を上げていることは多言を要しない。

今回、奈良・平安時代研究プロジェクトチームも古代瓦を研究対象として取り上げることにした。ただ、その視点は瓦研究の主流ともいえる寺院を核としたものとは距離を置いたものにした。瓦の出土は寺院に偏ることは当然だが、寺院から距離を置いた集落の堅穴建物等から出土することもままた見られる。今回はこうした寺院以外の遺構出土の瓦に敢えて焦点を当てることで、これまでの瓦研究とは一味違った瓦観を描き出してみたいと考えている。

例えば①まずどのくらいの数量の瓦が寺院以外から出土しているか、②共存する土器と瓦の年代の整合性があるのかなのか、③出土瓦、出土遺跡と寺院との関係は、④瓦の用途・機能について、つまり、本来の用途として機能したのか、二次的な機能なのか、⑤寺院以外の遺跡にどういった理由で瓦が持ち込まれたのか、その意味するところは、などが課題として考えられよう。

この研究は少し時間をかけて行われることになろう。前述した課題をはじめとしてこれまでとは違った切り口で瓦にアプローチすることは、従来どちらかというと支配・権力側の枠内で語られていたものが、瓦の動きから在地社会が支配機構にどう関わっていたのか、あるいは地域間、地域内の交通・流通関係を解き明かす可能性を秘めた研究になるのではないかと考えている。

## 例言

1. 本研究は、神奈川県内の古代集落遺跡から出土した瓦を集成した。対象とした事例は、遺構から出土したものに限定し、遺構外・遺物包含層から出土した古代瓦は除外している。また、いわゆる古代寺院址や瓦窯出土の事例も本集成では取り扱わないが、寺院の中心伽藍間近の関連集落遺跡は対象に含めている。
2. 本稿で示す挿図は、遺存状況の良好な瓦、特殊な調整を施す瓦、軒瓦・道具瓦、特異な出土状況の瓦等を中心に選別したが、出土事例の少ない地域は遺存状況が悪いものであっても取り上げた。挿図は各報告書のものを使用した。
3. 瓦の縮尺は1/6で統一した。また、表の備考欄には図版番号を明記した。
4. 挿表の年代は、出土した遺構の発掘時期を示し、瓦そのものの製作年代を示している訳ではない。また、年代の表記は基本的に各調査報告書に準拠している。
5. 本年度は神奈川県西部（相模川流域以西）の地域を対象とし、昨年度までに刊行された調査報告書を検索した。なお、県東部の集成結果は来年度に掲載する予定である。



表 神奈川県内の古代集落遺跡出土瓦(平瓦・丸瓦・その他瓦) 集成表

市町村名	遺跡名(一地点)	調査報告書文庫	遺跡名	九瓦/平瓦	その他	出土位置	遺物の年代	共存土器	備考	図説No	
小田原市	千代沖ノ町遺跡第3地点(遺物散布地・集落)	国誌調査部1997	千代沖ノ町遺跡第3地点	1			国誌調査部1997			小田原市文化財調査報告書69	小田原市教育委員会
	1号溝	10	覆土上層	中世以降	奈良品1・鉄器1						1-5
	2号溝	5	17-19	群丸瓦	奈良・平安	土灰11・磁器2・埴輪1・石製品1・他					6-13
	3号溝	1	5	覆土	奈良・平安	陶器1・奈良品1					14-14
	14号溝	1		覆土	奈良・平安	土灰4・埴輪4・他					17-14
	11号土坑	3	5	覆土	10C後-11C	土灰5・土器1・土器1					18-19
小田原市	千代北町遺跡第V・M地点(遺物散布地・集落(寺院附帯域)遺物散布地)	尾澤亮他2003	千代北町遺跡第V・M地点・千代沖ノ町遺跡第I・V地点・千代内遺跡第IV六地点・高田京町遺跡第I地点・西野津跡台遺跡	1			尾澤亮他2003				古代?
1号埋立柱状物	1		覆土	平安	なし						20
小田原市	小田原市1675遺跡(千代南遺跡XⅢ地点)	1(寺院伽藍跡域)・2(集落(寺院附帯域))	小田原市教育委員会2006	平成15年度試掘調査(1)							
硬化面(道路状遺構)	2		硬化面上層	古代	古式土器類11						
1号住居跡	1	2	床面	古代							住居址出土11点
聖穴住居址(硬化面)	1		覆土	平安	古式土器類12						
小田原市	千代南遺跡第VIII地点(遺物散布地)	大島真一他2005	千代南遺跡第IX-XⅢ地点	1			平成14年度小田原市発見発掘調査報告2				
水路状遺構	1		覆土	古代	土器						
小田原市	千代南遺跡第VIII地点(遺物散布地)	小山眞治他1997	千代南遺跡第VIII地点試掘調査報告書								
12地区住穴	1	1		奈良平安時代	土灰1・土灰2・灰皿1・						多量に出土 21・22
10地区板状列(水路?)	1			奈良平安時代	なし						多量に出土 23
小田原市	千代南遺跡第VI地点(遺物散布地)	尾澤亮他2003	千代北町遺跡第V・M地点・千代沖ノ町遺跡第I・V地点・千代内遺跡第IV六地点・高田京町遺跡第I地点・西野津跡台遺跡	1			尾澤亮他2003				
埋立柱状物	1	1		埋立	10C	土灰1					
小田原市	下宮遺跡(集落)	野木秀雄他2002	下宮遺跡 永塚下り須藤Ⅲ地点	1			野木秀雄他2002				
1号井戸	1		埋立	9C末-10C前半	土灰12・土灰1・土灰11・埴輪7・埴輪3・埴輪1						
小田原市	永塚下り須藤(第Ⅲ地点)	(集落)	野木秀雄他2002	下宮遺跡 永塚下り須藤Ⅲ地点	1						
埋立柱状物	1		覆土下層	7C末-10C半	土灰30・土灰31・埴輪12・埴輪1・土製品1・奈良品3・石製品5・鉄器4						
H10号住居址	2	2	覆土下層・上層		土灰12・土灰9・埴輪5・埴輪1・埴輪2品2・石製品1						24-28
H1号溝状遺構	1		覆土		土灰2・埴輪4						
H1号溝状遺構	3		溝跡第3面	遺跡2面は9C末-10C	土灰1・土灰1・土灰1・埴輪3・埴輪1(灰・甕等)10・埴輪6・埴輪3・埴輪1						29-31
小田原市	小田原市33(永塚)遺跡(集落)	小田原市教育委員会2004	平成9年度遺跡発掘調査報告書1	平成9年度小田原市発見発掘調査報告書5	1						
住居址	1		覆土		土灰2・土灰1・土器2?・埴輪1						埋立跡未
小田原市	永塚一丁遺跡(集落)	小田原市教育委員会1986	埋立文化財発掘調査報告書	1							
住居址	2		覆土		なし						
大磯町	新田遺跡0地点(集落)	鈴木一男1997	新田遺跡0地点	1			大磯町における発掘調査の記録1				大磯町教育委員会
SI02	1		床面(灰直)	8C後-9C中	土灰8・土器3・埴輪2他						
SI04	1		覆土	不明	土灰5他						40
SI02	1		覆土	不明	土灰1他						39
SI01	2		覆土上層	不明							
沼野市	塚山遺跡(集落)	大上三他1997	塚山遺跡Ⅲ	1			沼野市立埋立文化財センター調査報告18				沼野市立埋立文化財センター
SI01	1		覆土?	8C後	土灰5・土器3・埴輪2他						41
伊勢原市	石田・羽黒遺跡(集落)	降矢順子1998	石田・羽黒遺跡Ⅱ	1			伊勢原市石田・羽黒遺跡調査資料				
3号埋立柱状物	1				土灰13他						
4号埋立柱状物	1				土灰5他						37-38
厚木市	黒塚遺跡(集落)	河野嘉孝他1975	黒塚遺跡	1			神奈川埋立文化財調査報告書7				神奈川県教育委員会
40号住居跡	11		床面・覆土下層		土灰3・土器6他						32
40号住居跡	1				土灰1・土器2他						
61号住居跡	1				土器1						
143号住居跡	4		覆土		土器1						33-34
3号集石土坑	2		覆土上層		土灰4・土器1						35
12号住居跡	1		覆土下層		土器5・埴輪7他						
厚木市	峯ヶ谷遺跡(集落)	河合英夫他1995	峯ヶ谷遺跡発掘調査報告書	1			厚木市教育委員会				
3号住居跡	1			10C前	土灰2・土器3・埴輪1						36
厚木市	坪ノ内遺跡第2地点(園前域)	小島弘義・貴地俊樹1987	坪ノ内埋立文化財緊急調査報告書2	1			坪ノ内埋立文化財緊急調査報告書2				厚木市教育委員会
3号住居址	2		覆土								62
厚木市	坪ノ内遺跡第4地点(園前域)	小島弘義・貴地俊樹1987	坪ノ内埋立文化財緊急調査報告書3	1			坪ノ内埋立文化財緊急調査報告書3				厚木市教育委員会
2号溝(S2)	1		覆土	9C末-10C前	土灰14・土器4・埴輪2・埴輪2・他						
厚木市	六ノ塚遺跡第3地点(園前域)	小島弘義1987	六ノ塚遺跡	1			厚木市埋立文化財シリーズ1				大野小学校遺跡発掘調査資料
SI01	1	1		9C	土灰4・埴輪2・埴輪1・埴輪1・甕等7						57
SI02	1			9C	土灰17・土器12・埴輪27・埴輪13・埴輪1・土製品1・石製品1						
SI04	1			10C	土灰5・埴輪1・埴輪1・土器1						
SI05	1			10C後半	土灰2・土器1・土器1・土器1・土器1・土器1・土器1・土器1・土器1・土器1						

神奈川県における集落遺跡出土の瓦の様相

S06		2			8C後半	土坪3・埴埴3・灰瓦1・緑瓦2		
S09	1	1			9C	土坪6・土甍2・須臾4・埴埴2・須臾4・灰瓦2・灰瓦1・緑瓦1・土坪1		
S06	1					土坪6・須臾4・埴埴3・須臾1・灰瓦4・土坪1・石製品1		
S015		1				土坪5・埴埴2・須臾1・埴埴1・軒用埴1・甍瓦1・白磁1		
S020	1					土坪17・土甍1・須臾1・埴埴4・灰瓦2・灰瓦1・灰瓦1・須臾1・石製品1		98
S022	1	1				土坪1・須臾1・埴埴4・灰瓦2・灰瓦1・緑瓦2・軒用1・土製品1・石製品1		
S023		1				土坪4・須臾1・埴埴3・灰瓦2・灰瓦2・土甍2		
S041		1				土坪2・灰瓦2・緑瓦1		
S003	1					土坪2・須臾1・甍瓦1・石製品1		
平塚市 六ノ城遺跡9地点(国府城) 小島弘義1986「萬土六の城遺跡Ⅲ」[平塚市埋蔵文化財シリーズ3]平塚市教育委員会・大野小学校遺跡発掘調査班								
S090	1		軒平瓦1					均登巻草葺 99-103
S002		1				土坪14・須臾3・埴埴7・須臾1・灰瓦12・灰瓦1・緑瓦1・土製品1		
平塚市 六ノ城遺跡5地点(国府城) 大野信1982「露筋跡0-六ノ城」[平塚市埋蔵文化財シリーズ6]平塚市埋蔵文化財調査班								
S102		1				土坪14・土甍1・埴1・須臾1・埴埴1		
平塚市 六ノ城遺跡7地点(国府城) 小島弘義・青地俊朗1989「六ノ城遺跡Ⅳ」[平塚市埋蔵文化財調査報告書3]平塚市教育委員会								
F01		1				土坪2・土甍2		
平塚市 六ノ城遺跡9地点(国府城) 上原正人1982「天神前-板垣遺跡Ⅲ」[平塚市埋蔵文化財シリーズ21]平塚市教育委員会・平塚市遺跡調査会								
1号住	1	2		甍土	9C後半	土坪8・土甍5・埴埴1・須臾1・須臾品1		100-101
2号住		3		10C前半		土甍2・須臾1・須臾1・須臾2・灰瓦2・緑瓦1・灰製品3・灰埴1		105
3号住		1		9~10C		土坪2・土甍2・須臾1・甍瓦1・ロワ2・須臾2・刀子1・射2・須臾品4		
19号戸		1		9~10C		土坪12・土甍4・須臾1・埴埴3・土甍1		
平塚市 六ノ城遺跡9地点(国府城) 青地俊朗1992「萬土六ノ城遺跡Ⅴ-9号地点」[平塚市埋蔵文化財シリーズ20]平塚市教育委員会・平塚市遺跡調査会								
1号住	1	9		甍土	10C前半	土坪6・土甍1・埴埴2・灰瓦6・緑埴5・甍瓦2・須臾1		
9号住		2		甍土		土坪6・土甍4・須臾4・須臾3・灰瓦2・土甍品1		102
12号住	1	2		甍土		土坪2・土甍5・甍瓦1・ロワ1・灰瓦1・緑埴1・石製品1・土製品1		104
1号土坑		2		甍土		灰瓦1		
3号土坑		5		甍土	9~10C	土坪86・ロワ9・土甍16・須臾2・埴埴20・須臾2・灰瓦11・灰瓦1・緑埴2		
P18	1	3			9C後半	土坪2・土甍1・須臾1・須臾1・緑瓦1		
P13		1						
P35		1			8C~	土坪1・土甍1・緑埴1		
平塚市 高村寺遺跡第3地点(国府城) 小島弘義1985「西之宮高村寺Ⅱ」[平塚市埋蔵文化財調査報告書第2巻]平塚市教育委員会								
S102	2	2				土坪2・埴埴1		
S104		1				須臾2・須臾2・須臾1・灰瓦2・緑埴1・甍瓦2		
S105		1				土甍1・土坪1・埴埴1・須臾1		
S107		1			9後	土坪10・土甍1・土甍1・埴埴2・須臾2		
S112	1	1				土坪1・土甍3・土甍1・灰瓦1・灰瓦1・甍瓦2		
S116		1			8C	土坪3・土甍14・土高瓦1・埴埴1・須臾1・須臾1		
S001		1				土坪3・須臾1・須臾1・須臾1・緑埴1		
S011		1			9後	須臾2・須臾1		
S015		1			9後	土坪12・土甍4・須臾8・須臾3・須臾1・灰瓦1・灰瓦1・灰瓦2・緑埴2		
S022		1						
S029		1			8C	土坪2		
平塚市 高村寺遺跡第4地点(国府城) 小島弘義1986「高村寺遺跡Ⅲ」[平塚市埋蔵文化財シリーズ2]平塚市教育委員会								
S105		1			10C後	土坪5・土高瓦1・土甍1・須臾2・須臾1・灰瓦1・石製品1		
S109		1			9C後	土坪2・土甍1・須臾13・須臾1・灰瓦2		
S114		1			9C後	土坪2・土甍4・埴埴3・須臾1・須臾1・灰瓦1・灰瓦1・緑埴1		
S118		2			9C後	土坪3・土甍1・須臾1・埴埴1・灰瓦2・埴		
P02		1				土甍2		
P54		1				土坪1・埴埴1		
P62		1				土坪1・埴埴1		
S002	2					土坪3・埴埴2・緑埴2・青磁皿1		108
平塚市 高村寺遺跡第7地点(国府城) 小島弘義・青地俊朗1988「高村寺遺跡Ⅶ」[平塚市埋蔵文化財シリーズ6]平塚市教育委員会								
S11		1	軒平瓦1		8C	土坪8・土甍2・埴埴3・須臾1・灰瓦1		均狭巻草葺 109
P136		2				土坪5・土甍3・埴埴4・灰瓦1・石製品1類		110
平塚市 高村寺遺跡第9地点(国府城) 小島弘義・青地俊朗1988「高村寺遺跡Ⅸ」[平塚市埋蔵文化財調査報告書第1巻]平塚市教育委員会								
小島弘義1990年「保谷遺跡Ⅳ」[平塚市埋蔵文化財シリーズ16]								
S001		1			11C後	土坪4・埴埴2・須臾1・須臾1・灰瓦1		
S006		1				土甍1・須臾1		
S018		1				土坪3・灰瓦1・須臾1		
S002		1			11C前	土坪2・須臾1類		
S003		3			11C後	須臾1・緑埴1		
S006	1	1				土坪2・土甍1・灰瓦1・灰瓦2・白磁1		
平塚市 高村寺遺跡第8地点(国府城) 小島弘義1989「保谷遺跡-高村寺遺跡Ⅷ」[平塚市埋蔵文化財シリーズ16]平塚市教育委員会								
S001		2			11C後~12C前	土坪3・土甍1・須臾1・灰瓦2・緑埴1		
S005		1						
S006		1			8C前	土坪1・埴埴1・須臾1		
S001	1	1	軒平瓦1		11C後~12C前			灰瓦文
平塚市 高村寺遺跡第10地点(国府城) 小島弘義1990「保谷遺跡-高村寺遺跡Ⅹ」[平塚市埋蔵文化財シリーズ16]平塚市教育委員会								
S102		2			11C	灰瓦2・灰瓦1・緑埴1・緑埴1		
S104		1			10C後	土坪2		
S108	1	2				土坪5・灰瓦1・灰瓦1・緑埴1・土製品3		

## 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

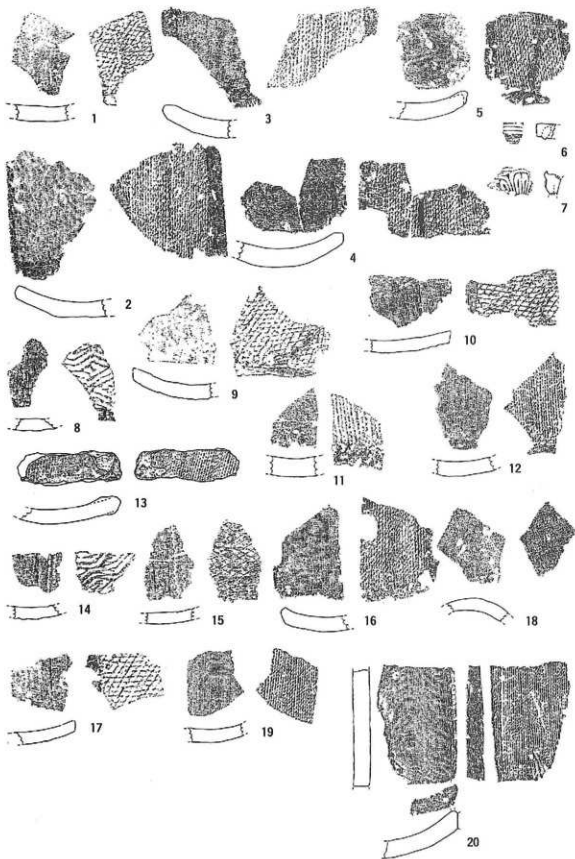
SD01		1				奈良東へ 平安前	土坏1・塚内3・塚山1・塚裏1・塚頭1・塚内面積1・塚内1・塚山1・ 塚頭2		
F33	1	1					中世陶器1		
F29			1				土坏1		
平城市 高林寺遺跡第12地点(国府域) 菅沼康介・原山輝雄・青地敬昭1999「高林寺遺跡第12地点」『平城市埋蔵文化財シリーズ33』平城市教育委員会									
1号型穴住居址	8	10					10C後	土坏2・土器5・土器2・塚内1・塚裏1・塚頭1・塚内1・塚山1・塚頭1・ 3号前庭?石製品3・鉄製品1・中世陶器4	111-115
2号型穴住居址	4						9C後	土坏1・土器2・塚山1・塚頭1・ 4号型穴住居址	
12号型穴住居址	1						10C後	土坏1・土器2・塚山1・塚頭1・ 1号型穴住居址	116
1号貯石遺構	3						14C	土坏2・土器1・塚山1・塚頭1・塚内2・塚山1・塚頭1・塚内面積1	
2号貯石遺構	2						13C	鉄製品3・鉄器1	
4号貯石遺構	2						13C	土坏1・塚山1・塚頭2・塚内2・塚山1	
5号貯石遺構	2						13C	塚内1・塚	
1号溝状遺構	4						13C	土坏12・土器1・塚内1・塚山1・塚内1・塚内1・塚内3・鉄製品5・中 世陶器2	
3号溝状遺構	1						13C	土坏8・土器1・塚山1・塚山1・塚頭2・三足器17・中世陶器1	
平城市 天神前遺跡第6地点(国府域) 上原正人1992「天神前・板淵遺跡」『平城市埋蔵文化財シリーズ21』平城市教育委員会・平城市遺跡調査会									
1号住居跡	1					覆土	7C末-8C	土坏26・土器3・白磁1	
11号住居跡	1						8C後	土坏19・土器4・塚内3	
15号住居跡	1					床面	8C中	土坏5・鉄器1	
1号井戸	2					覆土	~8C前	土坏10	
平城市 天神前遺跡第7地点(国府域) 明石新1992「天神前遺跡一第7地点一」『平城市埋蔵文化財調査報告書第9集』平城市教育委員会									
2号住居跡	1	1				竪(右端・左端)	9C後	塚内8・洞2・土坏17	
3号住居跡	1		軒平1			覆土	9C前	土坏13・洞14	47-55
24号住居跡	1					床面	8C前	土坏4・土器1	
25号住居跡	4					覆土	8C後	土坏6・土器2・洞3	45
26号住居跡	3					覆土	8C中	土坏6・土器2・洞1	44
28号住居跡	1					覆土	9C後	土坏8・鉄1	54
36号住居跡	2	3				竪・覆土	~10C	土坏12・洞4・塚2	43-46/47
SD08			1					土器1・塚内1	
平城市 天神前遺跡第8地点(鳥羽) 上原正人1996「天神前遺跡一第8地点一」『平城市埋蔵文化財調査報告書第13集』平城市教育委員会									
4号住居跡	1					覆土	8C前	土坏26・洞1	
10号住居跡	1	1				竪・覆土	8C後	土坏6・塚内7	
14号住居跡	1	1				竪・覆土	10C中	洞21・溝遺1	69
20号住居跡	1					覆土	8C後	土坏12・土器4・洞1	
21号住居跡	1	1				住居・覆土下層	10C後	土坏3・洞1	48-50
23号住居跡	1					覆土	10C後	洞3・溝遺1	
28号住居跡	1					覆土	11C中	土坏13	
29号住居跡	1	新久丸1				覆土	8C中	土坏16・土器2	51
34号住居跡	3					覆土	8C後	土坏15・洞13	
5号土地区	1						11C前	土坏1・塚内1	
平城市 天神前遺跡第9地点(国府域) 菅沼康介・原山輝雄2006「管沼A遺跡」『平城市埋蔵文化財シリーズ34』平城市教育委員会									
SD1	3	7				竪・埋面下・覆土		土坏10・土器14	52-53
平城市 福間前A遺跡(鳥羽) 菅村博明1993「山王B・福間前A遺跡」『平城市埋蔵文化財シリーズ23』平城市教育委員会・平城市遺跡調査会									
1号住	1					覆土	8C後	土坏18・土器2・塚内1・塚内2・塚内1・塚内1・塚内1	
F44	1					覆土	11C後	なし	
F7	1					覆土	11C前	塚頭1	
竪	1					覆土	10C後	土坏3・塚内1	
平城市 福間前A遺跡第2地点(鳥羽) 明石新1995「山王B・大谷原遺跡」『平城市埋蔵文化財シリーズ27』平城市教育委員会・平城市遺跡調査会									
1号住	1					覆土		土坏5・土器2・塚内2・塚山1・塚山3・塚山1	69
平城市 福間前A遺跡第3地点(鳥羽) 明石新1995「山王B・大谷原遺跡」『平城市埋蔵文化財シリーズ27』平城市教育委員会・平城市遺跡調査会									
1号型穴住居址	1					覆土		土坏3・土器9・塚内1・塚山5・塚内2・塚内1	
1号溝状遺構	1					覆土		塚内1・塚内2・塚内2・塚内1・塚山1・塚山1・塚山1	
2号溝状遺構	1					覆土		土坏1・土器1・塚内1・塚山1・塚山1	
平城市 舘前A遺跡第3地点(国府域) 小島弘哉1987「舘前A遺跡」『平城市埋蔵文化財調査報告書第4集』平城市教育委員会									
2号住居址	1					覆土	10C中	土坏4・土器1・塚内2	74
6号型穴住居址	1					ドット		土坏1・塚内2	
平城市 舘前A遺跡第4地点(国府域) 小島弘哉1987「舘前A遺跡」『平城市埋蔵文化財調査報告書第4集』平城市教育委員会									
17号住居址	1					埋面	10-11C前	土坏1・塚内1	
平城市 舘前A遺跡第9地点(国府域) 小島弘哉1990「舘前A・高林寺遺跡」『平城市埋蔵文化財シリーズ16』平城市教育委員会									
8号住居址	1						11C前半	土坏1・塚内1	71
平城市 舘前A遺跡第9地点(国府域) 上原正人1994「舘前A・平道遺跡」『平城市埋蔵文化財シリーズ26』平城市教育委員会・平城市遺跡調査会									
1号住居址	1						10C	土坏8?・鉄製品他	
4号住居址	1						9	土坏2・土器2・塚内1	72
5号型穴住居址	3						9	土坏16・土器1・塚内1	
2号溝							10C	土器1・塚不明・石製品	
平城市 舘前A遺跡第10地点(国府域) 大野信1992「舘前A遺跡」『平城市埋蔵文化財シリーズ22』平城市・平城市遺跡調査会									
31・1号不明遺構	1							土坏3・土器3・塚内1	73
1・トノ瓦古瓦	1							土坏2・土器1・塚不明	
平城市 七ノ城遺跡(国府域) 黒山輝雄1998「七ノ城遺跡一第2地点一」『平城市埋蔵文化財調査報告書第15集』平城市教育委員会									
1号井戸	1					覆土下層	11C	土坏2・土器2・鉄製品他	61
4号井戸	1					覆土	10C?	土坏1・土器2・塚内1	
23号溝	1							土坏1・塚内1	

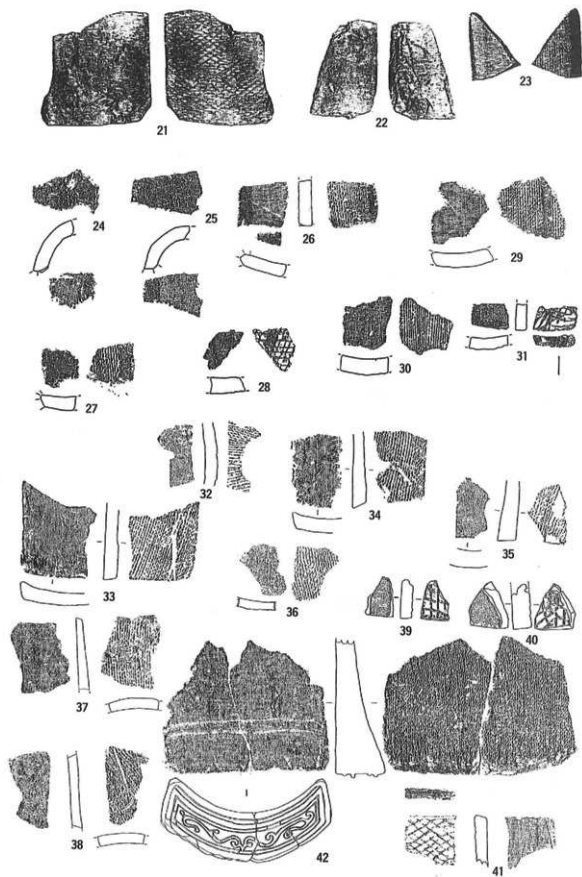
神奈川県における芸術鑑賞士十の瓦の鑑賞

24号室	1	畳上	7~8C席	土坪1・灰皿1他				
平塚市 諏訪前B道楽第1地点(国府城) 小島弘義・青地俊樹1987「諏訪前B・高料亭」[平塚市埋蔵文化財シリーズ6]平塚市教育委員会・平塚市道楽調査会								
1号室	1		9C	土坪2・灰皿1他				
平塚市 諏訪前B道楽(国府城) 大野隆信1987「諏訪前B・八ノ城」[平塚市埋蔵文化財シリーズ6]平塚市教育委員会・平塚市道楽調査会								
1号室	1		8C前	土坪4・土壘1・灰皿1他				
2号室	1?			灰皿・灰皿他				
3号室	1			土坪2・灰坪・灰他				
1号丹下	4			土坪4・灰製品他				67
平塚市 諏訪前B道楽第4地点(国府城) 小島弘義1987「諏訪前B・大岡城跡地他」[平塚市埋蔵文化財シリーズ13]平塚市教育委員会・平塚市道楽調査会								
10号住居	1	畳上		土壘1				70
平塚市 諏訪前B道楽第5地点(国府城) 小島弘義・青地俊樹1987「平塚市埋蔵文化財緊急調査報告2」平塚市教育委員会								
1号室	1	1	畳上					65-66-68-69
9号室	1		畳上					
1号不明遺跡	1		畳上					
平塚市 山王A道楽第2地点(国府城) 上原正人1997「山王A道楽一第2・3号地点」[平塚市埋蔵文化財調査報告書第16集]平塚市教育委員会								
5号住	2	畳上	10席					
7号住	1	畳上	10席					
7号住	1	畳上						
平塚市 山王A道楽第5地点(国府城) 岸本弘己1997「山王A道楽一第5号地点」[平塚市埋蔵文化財調査報告書第16集]平塚市教育委員会								
2号住	1	畳上	9C中席					
3号住	2	畳上						
土壘第3	2	畳上						
平塚市 山王A道楽第8地点(鳥居) 吉田博2007「山王A道楽一第8号地点」株式会社テイクタイトード								
S02	1		畳上					
平塚市 鶴岡前B道楽第4地点(兼天) 西山経輝1997「鶴岡前B道楽他」[平塚市埋蔵文化財シリーズ30]平塚市教育委員会								
3号住	1	畳上	8C中					
5号住	1	畳上	8C末~8C前					96
6号住	1	畳上	8C末					
平塚市 鶴岡前B道楽第5地点(兼天) 大野隆信2007「鶴岡前B道楽一第5号地点」[平塚市埋蔵文化財シリーズ40]平塚市教育委員会								
1号住	1	畳上	8C後					
8号住	1	野平瓦	10C前					
19号住	1	野平瓦	10C前					均量管理区 94
21号住	1	瓦	10C前					均量管理区 95
28号住	3	畳上	10C後					
1号壁柱埋没跡	1	畳上	9C					
1号丹下	1	畳上	7末~8C前					
P4	1	畳上						
F27	1	畳上						
F111	1	瓦						
平塚市 鶴岡前A道楽3地点(国府城) 菅沼進介・西山経輝2007「鶴岡前A道楽他」[平塚市埋蔵文化財シリーズ34]平塚市教育委員会								
S01	1		奈良・平安					
S01	2		10C					
平塚市 山王B道楽第1地点(国府城) 細野高俊1987「惣之堂山王B道楽」[平塚市埋蔵文化財シリーズ4]平塚市教育委員会・平塚市道楽調査会								
S15	2	畳上	10C後					91-92
平塚市 山王B道楽第2地点(国府城) 若林勝司1997「山王B・鶴岡前A道楽他」[平塚市埋蔵文化財シリーズ23]平塚市教育委員会・平塚市道楽調査会								
1号住	1	畳上	9C後					
3号住	1	畳上	8C後					
平塚市 山王B道楽第4地点(国府城) 菅沼進介・西山経輝2007「山王B道楽」[平塚市埋蔵文化財シリーズ34]平塚市教育委員会								
7号住	2	畳上	10C前					
12号住	1	畳上	9C後					
14号住	1	畳上	9C後					
1号不明遺跡	1	畳上						
2号不明遺跡	1	畳上						
平塚市 山王B道楽第8地点(国府城) 菅沼進介他1997「山王久保道楽他」[平塚市埋蔵文化財シリーズ31]平塚市教育委員会								
2号室	1	2	畳上					
1号不明遺跡	1		畳上					
平塚市 橋之内道楽第2地点(国府城) 上原正人1993「橋之内道楽発掘調査報告書」三共株式会社・平塚市道楽調査会								
1号室	1	1	畳上					
9号室	1	1	畳上					
11号室	1	1	畳上					
114号室	1	1	畳上					
平塚市 橋之内道楽第3地点(国府城) 大野隆信2007「橋之内道楽発掘調査報告書」三共株式会社・平塚市道楽調査会								
31号壁穴埋没跡	1	1	席下					
64号壁穴埋没跡	4	1	席下					
68号壁穴埋没跡	1	1	席下					
3号丹下	1	1	席上					

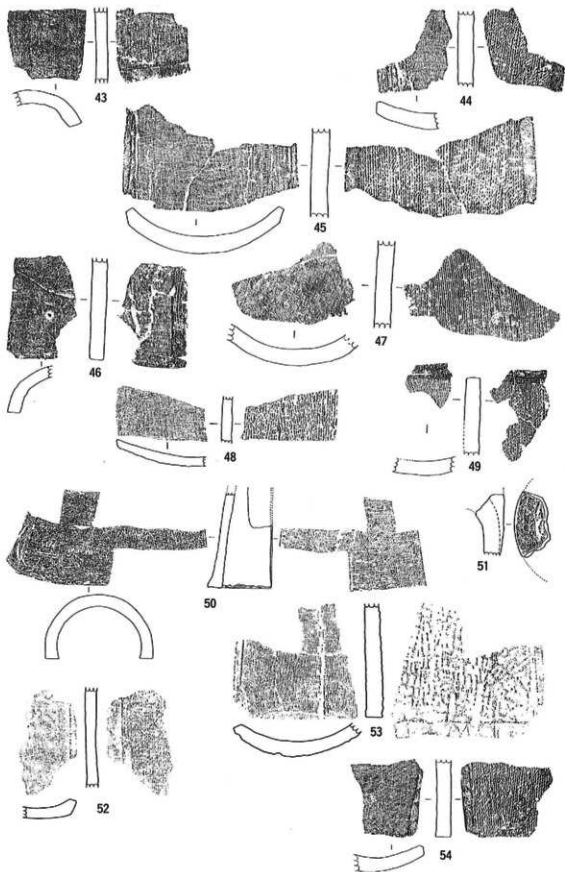


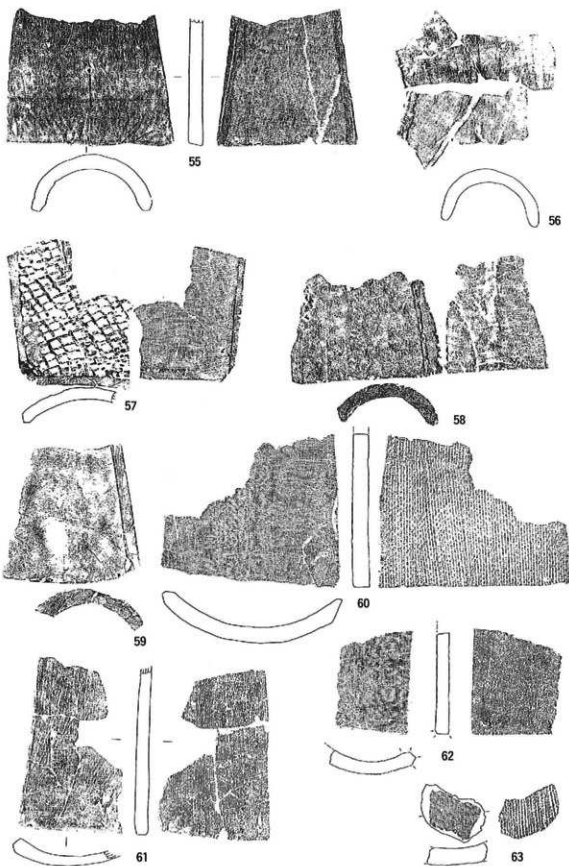


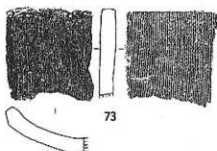
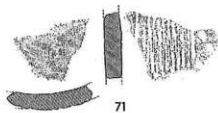
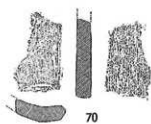
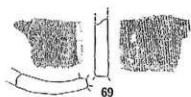
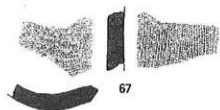
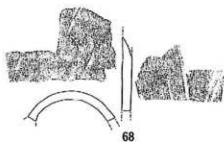
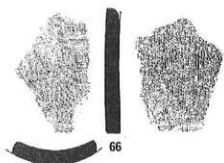
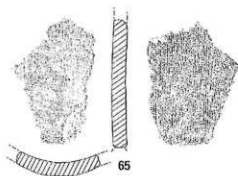
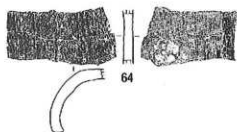














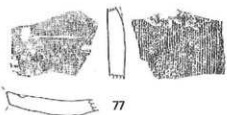
74



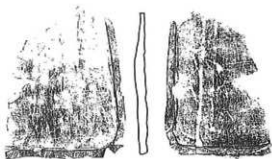
75



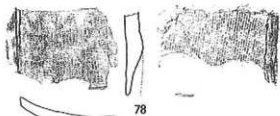
76



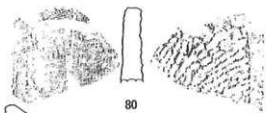
77



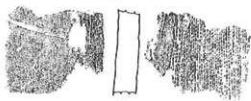
79



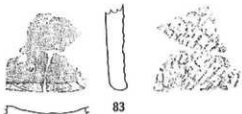
78



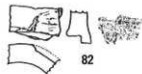
80



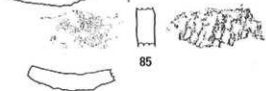
81



83



82

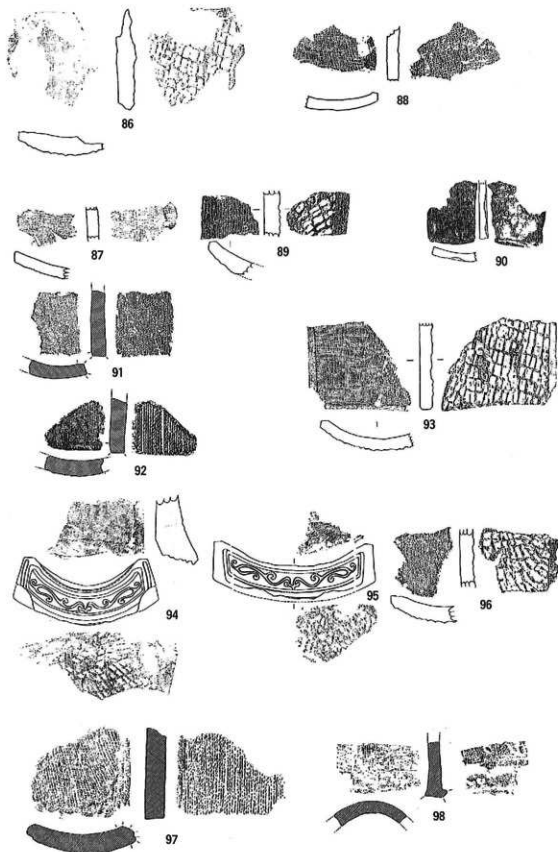


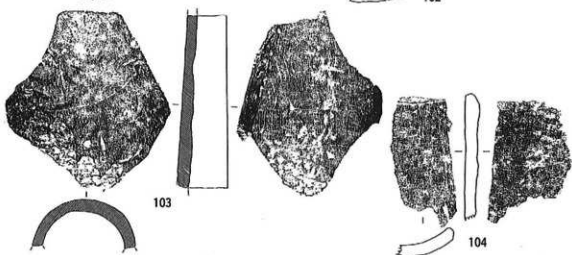
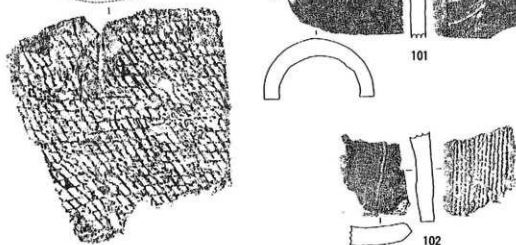
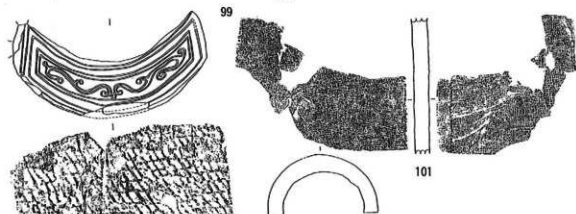
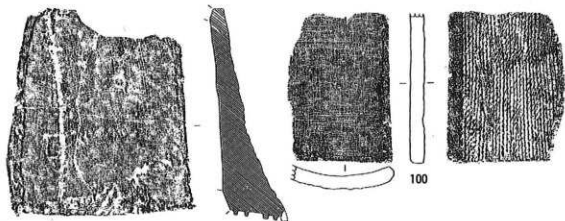
85

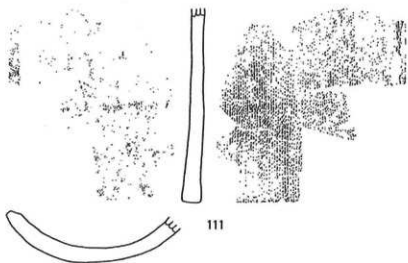
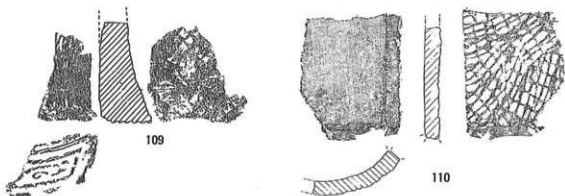
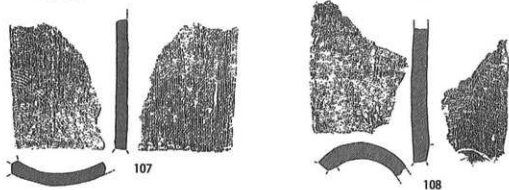
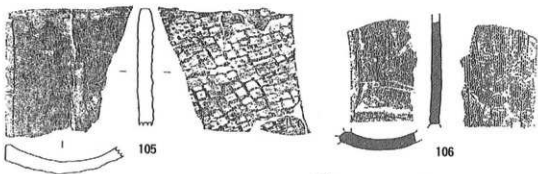


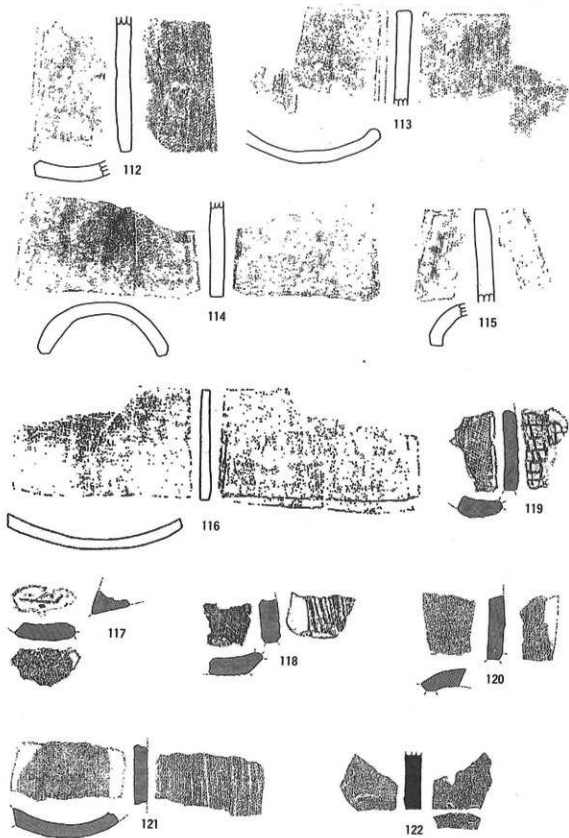
84



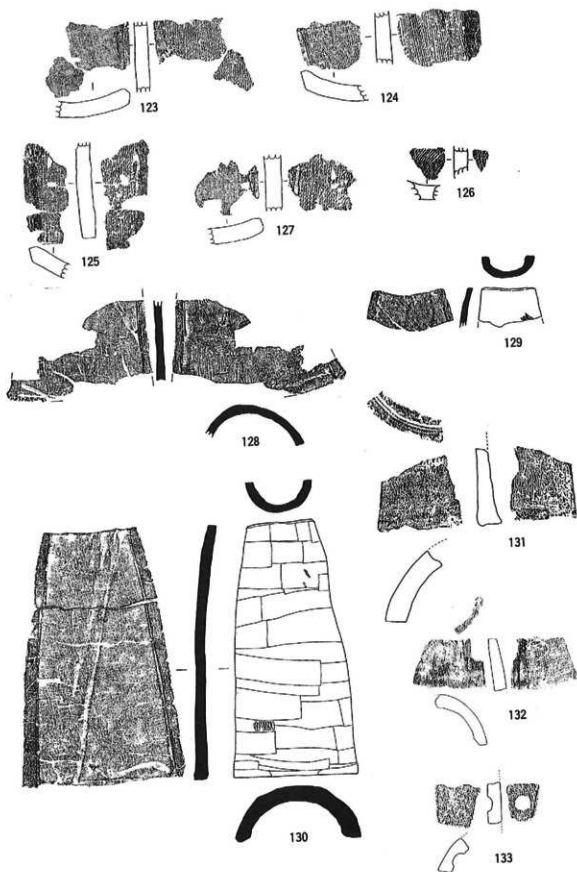


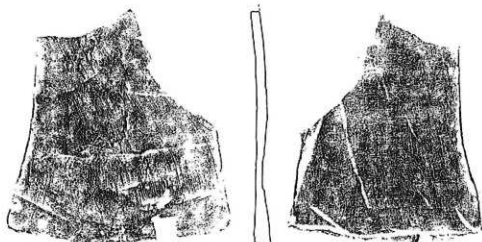




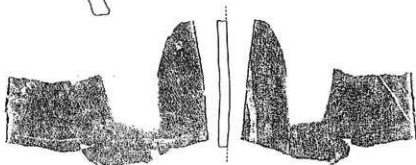




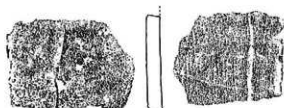




134



135



136

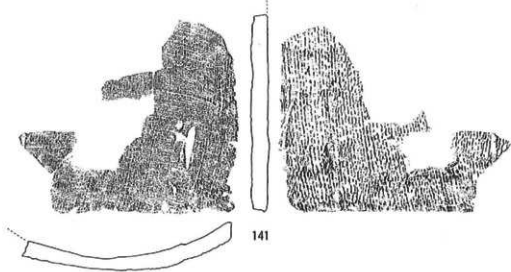
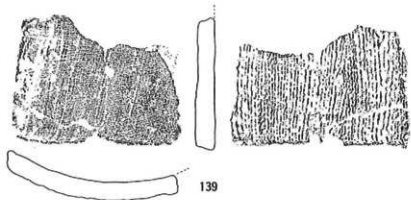
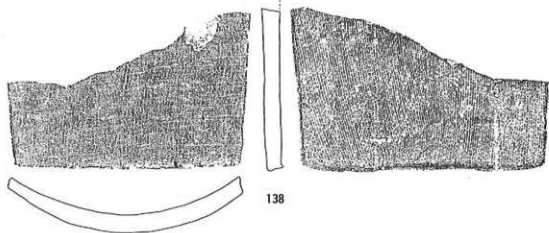


140



137





# 神奈川県内の「やぐら」集成(6)

## －「やぐら」出土遺物の分析(2)－

中世プロジェクトチーム

### はじめに

本プロジェクトでは、近年発掘調査によって資料が増加している「やぐら」に焦点を当て、集成を行っている。昨年はこれまでの集成に基づき「やぐら」出土遺物の分析として、土器・陶磁器類について出土様相の考察を行った。本年は、引き続き出土遺物の分析として、石塔類・瓦・土製品・金属製品・石製品・木製品の分析を行うこととする。

なお、これまでの集成と同様に、分析にあたっては原則として、発掘調査が行われ、かつ報告書が刊行されている遺跡を対象とする。また、「出土遺構」については、やぐらの前面や区画遺構などやぐら内外の各遺構面が含まれていることについても、これまでと同様である。

石塔類は、研究紀要10で集成を行っている。今回はこの集成以降に刊行された報告書のデータも加えて、宝篋印塔・五輪塔・板碑について分析を行う。また、その他の遺物として瓦・土製品・金属製品・石製品・木製品についても若干検討を加えることとした。

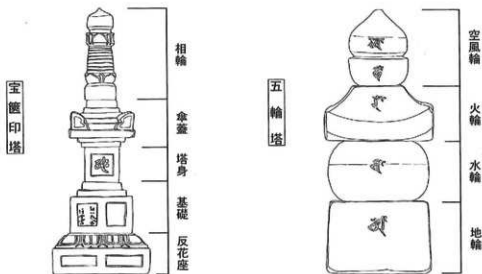
平成17年度以降刊行された報告書及び遺漏分については、これまで行ってきた基礎データの集成に加え、補遺として掲載した。

(松葉)

### 石塔類例言

1. 宝篋印塔・五輪塔の各部位の名称は第1図の表記に統一した。
2. 石材の表記は安山岩・凝灰岩に統一した。「伊豆石」は安山岩、「砂岩」「凝灰質砂岩」「輝合石」は凝灰岩とした。

### 石塔類



第1図 宝篋印塔・五輪塔の各部位の名称

(1) 宝篋印塔

これまでの発掘調査で宝篋印塔が出土している遺跡は、31遺跡51遺構を数え、総点数262点が出土している。なお、これら宝篋印塔の点数はやぐらの造営時期に伴うと考えられるものから、後世に投げ込まれたものと考えられるものまで含まれている。出土した262点中14点が凝灰岩製であり、やぐら出土の宝篋印塔はその多くが安山岩製といえる。

今回の分析は宝篋印塔の規模に着目し、各部位の高さと幅を計測した。計測にあたり、完形ではないが、欠損が僅かであり、データの集成にはほぼ影響しないと考えられるものは、計測の対象とした。相輪と塔身に関しては、ほぞを有しているものもあるが、高さには含めていない。なお、計測表の単位はcmである。

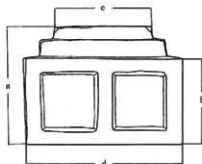
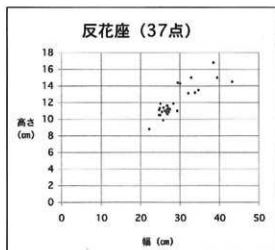
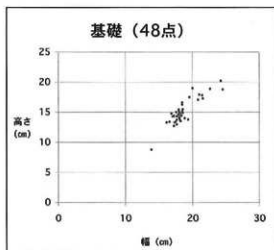
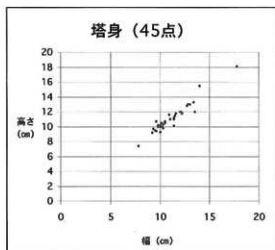
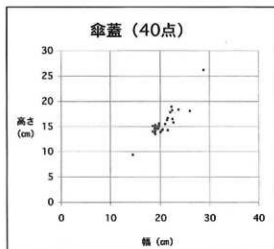
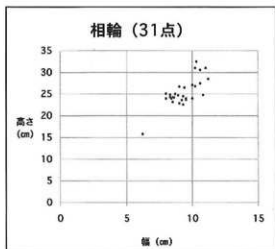
**各部位** (第2図) : 各部位大きさは様々あるものの、いずれも小型宝篋印塔の部類に属すると考えられる。各部位の大きさは集中している範囲があり、その集中域から想定した宝篋印塔の総高は68~82cmとなる。おそらくやぐらに設置された宝篋印塔は、その多くが総高68~82cmの範囲に収まるものと推測される。各部位の比率 (高さ÷幅) を算出すると、その平均値は相輪2.75、傘蓋0.76、塔身1.00、基礎0.81、反花座0.42となる。各部位のグラフからは、相輪にはややばらつきがあるものの、概ね一定した比率が看取される。以上から、やぐらに設置された宝篋印塔の多くは、小型で各部位の比率が定型化した段階の宝篋印塔と推測される。

**基礎** (第1表) : もう少し詳細に検討を行うため、紀年銘が刻まれている基礎を取り上げることにする。この分析ではより詳細な計測を行うため、凝灰岩製の基礎については風化が激しいことから、計測の対象から外した。やぐらから出土した紀年銘が刻まれている基礎は21個出土している。紀年銘は応安6年(1373)~永享12年(1440)までのものが見られる。形態はいずれも側面を輪郭にて二区に分け、上面は二段を有するといった特徴が見られる。従来からいわれている福年観(赤星1959、川勝1981、斎木1986)からすると、関東型式に属すると考えられ、鎌倉時代後期~室町時代に見られる形態である。つまり、基礎に関しては見た目の形態だけでは年代の判別がつかないといつてよい。

紀年銘が刻まれている基礎21個に関して、a~dの値を計測し、比率算出(①~④)を行った。a~dの大きさについては、差が認められても4cmと、いずれも近似した計測値を示す。①~④の値の平均値は①0.81、②0.71、③0.65、④0.57となる。計測対象21個の多くがこれら平均値に近い数値を示す。これらの中では新

遺跡名	遺構	a	b	c	d	①a÷d	②b÷a	③c÷d	④b÷d	備考	文献
開口またやぐら群	4号やぐら	14.4	10.5	11.6	18	0.8	0.73	0.64	0.58	応安6年(1373)	六戸・谷2004
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	14.3	10.3	12	17.6	0.81	0.72	0.68	0.59	明應2年(1391)	原ほか1988
開口またやぐら群	4号やぐら	17.8	13	14.5	21.4	0.83	0.73	0.68	0.61	明應3年(1392)	六戸・谷2004
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	14.9	10.8	13.1	18.5	0.84	0.72	0.71	0.58	明應3年(1392)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	13.3	9.5	10.2	16.1	0.83	0.71	0.63	0.59	明應4年(1393)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	13.3	9.4	11.3	17.3	0.77	0.71	0.65	0.54	明應5年(1394)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	14	10.3	13	18.8	0.74	0.74	0.69	0.55	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	12.7	10.1	11.4	17.2	0.74	0.8	0.66	0.59	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	15.1	10.9	11.5	18.4	0.82	0.72	0.63	0.59	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	14.3	10	11.3	17	0.84	0.7	0.66	0.59	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	14.3	10.3	11.7	17.2	0.83	0.72	0.68	0.6	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	13.3	9.5	10.2	17.9	0.85	0.68	0.63	0.58	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	14.7	10.8	11.8	17.9	0.82	0.73	0.66	0.6	応永2年(1395)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	2号やぐら	14.3	10.3	11.6	18.1	0.79	0.72	0.64	0.57	応永8年(1401)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	13.7	9.6	11	17.6	0.79	0.7	0.63	0.55	応永8年(1401)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	14.5	10.4	11.8	18	0.81	0.72	0.66	0.58	応永8年(1401)	原ほか1988
長持寺跡内やぐら	11号やぐら	14.9	10.3	11.7	18.1	0.82	0.69	0.65	0.57	応永20年(1413)	徳田・共戸2004
新善光寺跡内やぐら	ゴ字区南遺構	14.3	9.8	12.7	17.9	0.8	0.69	0.71	0.55	応永22年(1417)	原ほか1988
新善光寺跡内やぐら	7号やぐら南側	14.5	10	11.3	17.8	0.81	0.69	0.65	0.56	応永29年(1427)	新田ほか2005
正法寺跡	表柱	16.3	11.4	12.4	18.4	0.89	0.7	0.67	0.62	応永34年(1427)	斎木ほか1999
上行寺東やぐら群	38号やぐら	15	10.7	10.1	17.5	0.86	0.71	0.58	0.61	永享12年(1440)	小村2002
安楽寺		74.4	58.9	66.1	98.2	0.77	0.79	0.67	0.6	推定3年(1308)	文化財1980
聖園寺山門塔		77	60	70	100	0.77	0.78	0.7	0.6	正徳元年(1332)	伊藤ほか1966
聖園寺大鐘塔		77	61	68	97	0.79	0.79	0.7	0.63	正徳元年(1332)	伊藤ほか1966

第1表 宝篋印塔基礎計測表



第2図 やぐら出土宝篋印塔規模

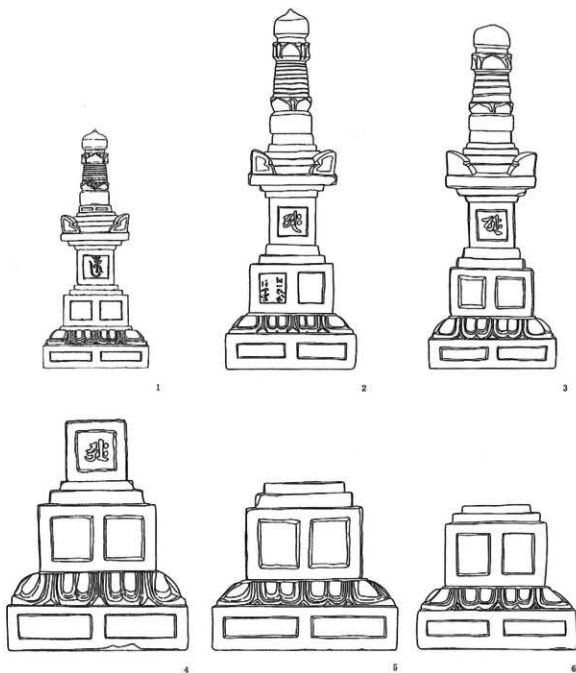
しいと考えられる上行寺東やぐら群出土の基礎と、正法寺遺跡出土の基礎はこの平均値からやや外れるが、紀年銘の示す南北朝後期～室町時代前期では基礎に関して、規模や型式がある程度定型化されていたことを示すものであろう。第1表では割愛したが、紀年銘がない21個に関しても、その多くは①～④の平均値に近い数値を示す。各部位の比率が一致していることは、製作時期や技術が近いといったことも指摘されている(山川2006)ことを勘案すると、紀年銘がない基礎に関して、その製作時期や技術は紀年銘が刻まれているものに近いものと推測される。逆に①～④の平均値からやや離れる基礎は、製作時期や技術が異なる可能性が考えられる。

やぐらからの出土ではないが、鎌倉時代後期に大藏派によって造立されたとされる3基の宝篋印塔について分析を加えることにする。安養院宝篋印塔は徳治3年(1308)、覚園寺圓山塔・大燈塔は正慶元年(1332)の紀年銘が刻まれている。この3基の宝篋印塔は非常に大型で、基礎もやぐら出土の基礎に比べ非常に大きい。①～④の比率の中で、特に②の値がやぐら出土の基礎と大きく異なる点が特筆される。この時期の基礎は、基礎の高さ(a)に対して、側面高(b)の占める割合が高いといえようである。

**復元された宝篋印塔(第3図)**：やぐらから出土した宝篋印塔で、組み合わせの復元が可能としているものは、反花座から相輪まで全て揃うものが3基、反花座・基礎・塔身が揃うものが1基、反花座・基礎が揃うものが2基報告されている。第3図1～3の宝篋印塔の形態を見てみると、反花座は側面を輪郭にて二区に分け、上端の反花は複弁二葉。基礎は側面を輪郭にて二区に分け、上部に二段を有する。塔身は輪郭を持ち、梵字が刻まれる。傘蓋は下二段上五段で最上段に露盤を有するものもあり、隅飾は二弧で輪郭を有するものもある。相輪は九輪が線刻で、宝珠がやや方形に近い形状を呈する。1～3は細部に異なる点は認められるものの、南北朝後期～室町時代前期の様相を呈する。2は基礎に応安6年(1373)の紀年銘が刻まれており、従来の福年誤を裏付けるものである。

この1～3に注目すると、総高は1が50.2cm、2が76.3cm、3が74.1cmとなり、1はかなり小型となるが、2・3は前述した総高想定62～82cmの範囲に収まるものとなる。相輪は1～3いずれも比率の平均値と異なっている。傘蓋から反花座にかけては、1は傘蓋と基礎が平均値と異なる数値を示し、2は概ね平均値と合致し、3は塔身以外概ね合致する結果となった。多くの数値で合致が見られる2・3は、やぐらから出土する多くの宝篋印塔がこの形態・規模であったと推測させる資料といえよう。1に関しては、規模・比率とも異なる点が多い。形態としては2・3と類似しているが、計測値から2・3とは異なる時期または技術で作成された可能性が高い。4～6は宝篋印塔の一部復元が可能であった例である。計測値・比率から、2・3と同様にやぐらから出土する多くの宝篋印塔と同様の形態・規模であると考えられる。

**小結** やぐらから出土する宝篋印塔は、小型で関東型式に属するものと考えられ、これまでの年代観からすると、南北朝後期～室町時代前半に比定されるものが多い。関東型式は大藏派宝篋印塔にその源流が求められ、規模に大きな差があったとしても、各部位の比率はさほど変わらないといった特徴がある(岡本2003)。やぐら出土の宝篋印塔も各部位の比率がほぼ変わらないといった傾向があり注目される。そのような中で、形態的には類似するが比率の平均値とは異なる宝篋印塔も見られ、これらはやぐらから出土する多くの宝篋印塔とは時期あるいは技術が異なるかと推測される。しかし、時期の前後関係や工人の技術の違いがあるのかまでは考察するに至っていない。また、鎌倉周辺の石塔造立の背景は多種多様であったことも指摘され(大三轮2006)、小型化する以前の背景も検討する必要がある。今後の課題として次に繋げたい。(松業)



1 新善光寺跡内やぐら

2~6 開口またやぐら群



順数	塔身			塔基			塔身			塔基			反北照			備考
	高さ	幅	高さ	高さ	幅	高さ	高さ	幅	高さ	高さ	幅	高さ	幅	高さ		
1	15.8	6.2	2.35	0.4	14.5	0.65	7.4	7.8	0.95	8.8	13.8	0.64	8.8	22.2	0.4	応安6年(1373)
2	26.7	9	2.97	13.5	19	0.71	9.8	10.3	0.95	14.4	18	0.8	11.9	28.3	0.42	
3	22.6	9.3	2.43	14.8	19	0.78	10.7	9.6	1.11	14.4	17.2	0.84	11.6	26.6	0.44	
4							13	12.8	1.02	18.8	24.5	0.78	16.8	38.5	0.44	
5										20.2	24.2	0.83	15	39.4	0.38	
6										17.8	21.4	0.83	13.2	33.8	0.39	

第3図 やぐら出土宝篋印塔復元図



## (2) 五輪塔

やぐらから出土した五輪塔は、2005年の集成で1,948点の出土がみられていたが、その後の出土事例の増加により、62遺跡から総点数2,211基及び一石五輪塔8基の出土を確認している。しかしながら、前項の宝篋印塔と同じく出土状態には大きな差異が認められ、やぐらが機能していた時期に直接関わるものは少なく、多くは後世の投げ込み等によるものとみられる。ここでは紙面の関係上、出土した五輪塔の石材別部位ごとの法量比較、出土状況等、一石五輪塔に絞って概観してみたい。なお、分析の都合上、完形及び欠損の少ないものを対象にし、著しいものなどについては除外している。よって総出土数と法量分布図に用いた基数は一致していないことをあらかじめ断わっておきたい。なお計測表の数値はcmで統一している。

**五輪塔法量比較**：やぐら出土の石塔類は、五輪塔2,211基(84%)、一石五輪塔8基(1%未満)宝篋印塔262基(10%)、板碑166基(6%)とその多くを五輪塔が占めている。五輪塔が、その他の石塔類に比してこれほどの数量差を誇ることにについては、やぐらに葬られた被葬者層及びその宗派など多くの視点から考える必要がある。そのため、今回明確な答えを出すことはできないが、少なくともやぐら内に安置する石塔類では五輪塔がその主流であったのだろう。五輪塔には、大きく分けて凝灰岩製と安山岩製の2種による石材を用いて作成されている。凝灰岩は鎌倉や三浦半島周辺など比較的近隣で切り出せるのに対し、安山岩は箱根・伊豆周辺といった遠隔地に産地が求められる。数量的には、凝灰岩製1,200基、安山岩製1,011基と拮抗しているが、わずかに凝灰岩製五輪塔が上回っている。以下個別に法量等の観察に移る。

**凝灰岩製五輪塔**(第4・5図)：空風輪264基、火輪228基、水輪303基、地輪405基が出土し、中でも地輪の出土数が他の部位に比べて多い。法量分布を見ると、空風輪は高さ20cm、幅10~20cm周辺に集中して分布がみられ、火・水・地輪については、高さ10~30cm、幅20~40cmの位置に点が集中する傾向を示す。しかし、逆に点のバラつきも多くみられ、やや細長い線状にドットが散らばる点も見受けられる。極端にいえば、非常に小さなものから巨大なものまで千差万別で作成されているとみえる。想像を逞くすれば、これは各部位の法量が一定化しつつあるものの、法量の自由度が高い点から、定型化への移行期とみることも可能かと考える。

**安山岩製五輪塔**(第6・7図)：安山岩製では空風輪270基、火輪280基、水輪243基、地輪218基と凝灰岩とは逆に地輪の確認数が部位の中で最も少ないという結果になった。それぞれの法量分布では、空風輪は高さ15~25cmと10~15cmで幅10~20cmの位置で点が集中し分布が二極化する傾向が見て取れる。以下、他の部位についても、火輪・水輪は高さ15~25cm及び5~15cm、幅10~30cmの位置に二つの集中箇所があり、地輪は他の3つの部位より二極化は大きくないものの、高さ10~25cm、幅10~30cmの集中箇所やや割れる箇所を見ることができる。全体的には、点が大きくは広がらず、二極化するものと同じ箇所に集中するといった様子が見える。これは五輪塔としての形態が定型化へさらに進んだ結果といえようか。

これらの法量分布から凝灰岩製と安山岩製五輪塔では、個々の形態ではその法量に大きな差は見られないものの、全体の傾向を勘案すると明確な差異があることが判明した。凝灰岩製では、法量の集中と分散がみられ、安山岩製では点の更なる集中と二極化がみられている。これは、安山岩製五輪塔がより定型化に近づいているという見方ができないだろうか。これまで五輪塔は凝灰岩製のものが先行して現れ、安山岩製の五輪塔は後出という凝灰岩(13世紀後半~14世紀後半主体)から安山岩(14世紀後半以降主体)への石材変化が時代的なものとして考えられている。これは、鎌倉市葛原岡やぐら群出土の凝灰岩製地輪に正和五年(1316)の銘があり、これがやぐら出土五輪塔では最古の銘であることや、番場ヶ谷13号やぐら出土の元徳三年

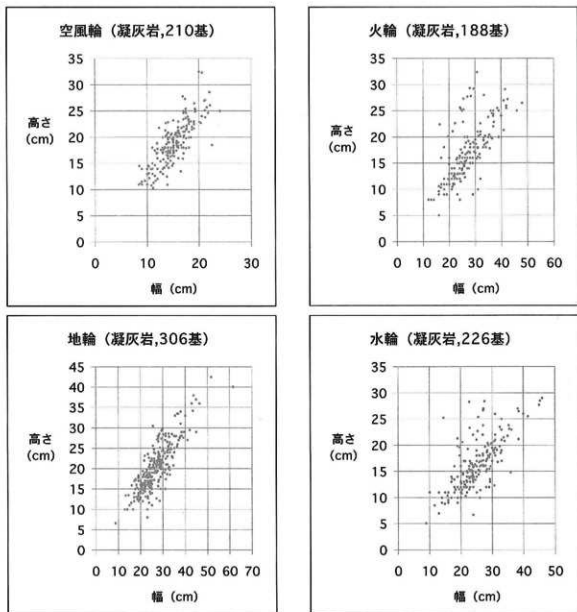
(1331) 銘の地輪や多宝寺19号やぐらから出土した嘉暦二年(1327)銘地輪、天神やぐら群5号穴出土歴応三年(1340)を刻む地輪といった後出の紀年銘をもつ五輪塔が安山岩製であるといった点からも伺える。凝灰岩は安山岩よりも風化の度合いが強く、銘文等が確認されにくいといった点があるものの、今回の法量分布で確認された傾向は、これまでいわれてきた石材変化の様相を補強するものとみられる。また、凝灰岩製、安山岩製ともに著しく法量が異なる製品もみられるため、その時代差や技術差についても検討が必要であろう。

**五輪塔出土状況(第8図)：**やぐら内からは様々な状況で五輪塔の出土が確認されている。覆土中や床面から数点出土がみられる場合が多いが、やぐら造営期に安置されたと推測される形で出土する五輪塔も少なくない。ここではいくつかの出土例を概観し、今後の検討の材料としたい。

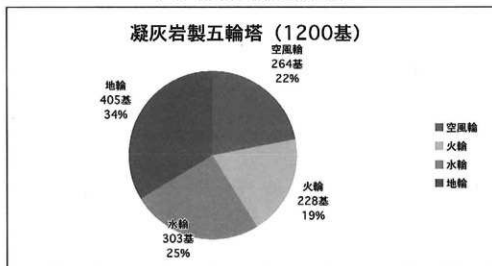
1. **大倉幕府北やぐら群5号やぐら(第8図1)：**奥壁・側壁沿いに棚状の壇を設け、2基の五輪塔(火・水・地輪が床面に据えられ、空風輪は落下していた)が壇上に供えられていた。五輪塔は左右で大きさが異なり、東側に置かれた五輪塔がやや小さい。五輪塔下に玉石や切石が敷かれていた形跡は認められない。13世紀後半～14世紀初頭頃のものと考えられ、共に凝灰岩製である(鈴木2004)。
2. **多宝寺址やぐら群(第8図2)：**奥壁沿いに大型の五輪塔を2基配置し、前方に小型の五輪塔を配置する。2号やぐらや床面に切石を敷いた基壇上に五輪塔を置き、さらに周囲に小型の五輪塔を配する10号やぐらなどが検出されている(学習院大学輔仁会史学部1966)。
3. **亀ヶ淵やぐら群・理智光寺谷やぐら(第8図3)：**床面を掘り深めて蔵骨器としての常滑甕を埋納している。また切石を蓋としてその上に五輪塔を安置する。蓋石の上に五輪塔を1基配する例(理智光寺やぐら)やその周囲にさらに五輪塔を並べる例(亀ヶ淵やぐら群)がある。また、亀ヶ淵やぐら3号穴のように宝篋印塔を中心に据えているやぐらも存在する。逆に弁ヶ谷東やぐら群や瀬戸町やぐら群のように蓋石はあるものの、上に石塔が確認されないやぐらもみつまっている。蔵骨器に納められた被葬者には上級僧侶などが推定されている(鈴木2000)。

これらの例からは、ある1基、もしくは2基の中心的な五輪塔が存在し、その周囲に小型の五輪塔を配する様相が見取れ、被葬者階級によってはやぐら内に納骨穴を設け火葬骨を納めるだけでなく、蔵骨器を伴う状況も看取できる。また、基壇状に安置する場合や床面直上に据えるものもある。こういった配置や石塔の大きさの違いは、被葬者階級やその結縁者集団によっても左右されるであろうし、時代性によるものもあるとみられる。また、五輪塔に限らず、宝篋印塔との差別化がどのように図られていたのかについても出土状況から検証することが今後必要であろう。ここに示した出土事例はごく一部であり、これらのみをもって考察を進めることは危険である。むしろ、やぐら内に石塔が1基もない場合や後世になって大量に並べ置かれた例(正覚寺やぐら群など、逗子市2007)も多いことから石塔の設置されるやぐらや設置されないやぐらのあり方についても五輪塔の意味合いと同じく追及しなければならないだろう。

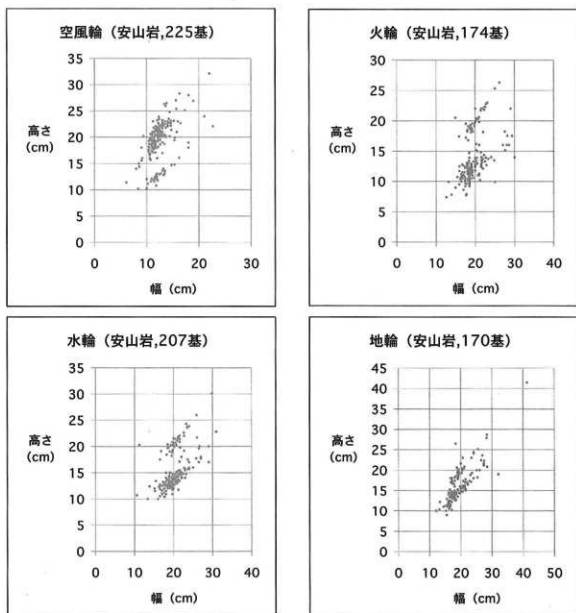
**一石五輪塔：**最後に、一石五輪塔について簡単ではあるが触れておく。一石五輪塔は、空風・火・水・地輪の各部位を一石で作出したもので、主に全体的に小型で中世後期から近世期にかけて大量に造立されたものとされている。主に西日本で分布が確認されているが、東日本でも青森県や山形県、茨城県・千葉県などで出土がみられている(石造物研究会2007)。神奈川県内でやぐら内から出土した一石五輪塔は、榎楽寺旧境内北やぐら、正禪寺やぐら群、薬王寺やぐら群、間口またやぐら群、宅間谷やぐら群などから8基が確認されている。榎楽寺旧境内北やぐら出土のものが安山岩である以外はすべて凝灰岩製である。また、傾向として、紀年銘などは確認されていないことや空風～地輪すべてが一石で揃ってはならず、火・水輪や火輪



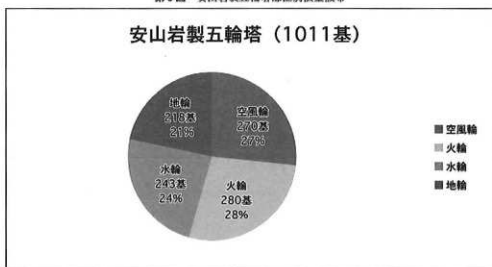
第4図 凝灰岩製五輪塔部位別法量散布



第5図 凝灰岩製五輪塔出土割合



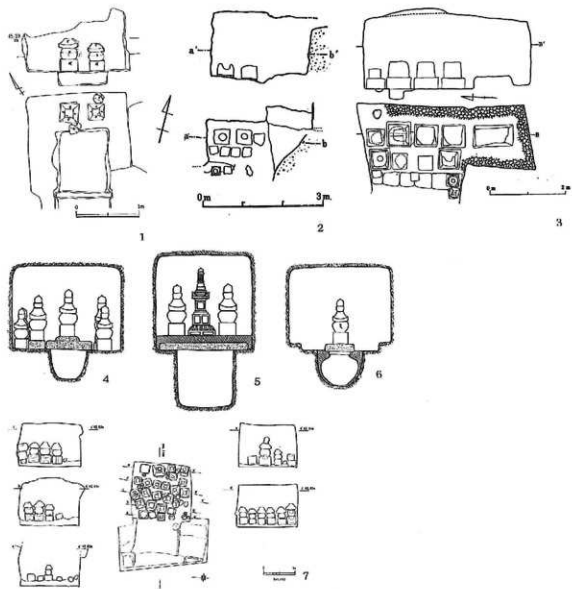
第6図 安山岩製五輪塔部位別法量散布



第7図 安山岩製五輪塔出土割合

一輪塔など五輪塔の部位の一部が一石で作られていることが特徴といえる。やぐらの造営時期や多くが凝灰岩製である点を考えると、従来の一石五輪塔の年代観より遡る可能性があるが、紀年銘が確認されていないことや数量の少なから断定するには危険であり、詳細な検討が必要であろう。これら一石五輪塔とその他の五輪塔、ひいてはやぐら出土の石塔類との関係性やその時代性等については今後の課題としておきたい。

(吉田)



1、大倉郡府北やぐら群5号やぐら 2、多宝寺址やぐら群2号やぐら 3、多宝寺址やぐら群10号やぐら  
4、亀ヶ淵やぐら1号やぐら 5、亀ヶ淵やぐら3号やぐら 6、燈智光寺谷やぐら 7、正覚寺やぐら群

第8図 やぐら内五輪塔出土例

### (3) 板碑

現在やぐらから出土している板碑は、8遺跡から破片を含めて166点が確認できる。以下、概要について述べる。

1. 胸岡遺跡A地点：丘陵の西側斜面に穿たれた3基の横穴転用の中世墓。A-1号横穴の羨門部から支室方向へ両側壁に沿って小型板碑列が確認される。支室床面には主軸線に沿った細い溝と、直交方向にいくつかの窪みがあり、一部に板碑基部が残存。A-2号横穴では、支室内に板碑片10数枚を井桁状に組み、中央に入骨、獣骨を埋納。この上に宝篋印塔部材を方形に固めて置く。板碑は、断片を含め70点余りが出土している。そのうち45点の板碑の表面には、主尊種子三尊・キリーク、月輪、蓮台、花瓶が確認され、刻線・刻字に金泥が施された板碑も13点が確認される。その他、紀年名も「応永」「嘉吉」「長禄」「寛正」「文明」「文安」「享徳」「宝徳」の年号が確認されており、年代で見ると応永3年(1396)～文明16年(1482)の約100年間にわたる年号が刻まれている。(井上1972a)

2. 長昌寺前横穴群(第9図1・2)：5基の横穴群の西側に、傾斜面を隔九長方形に削り込み、3基の五輪塔を据えた遺構を検出。下方には五輪塔部材が散乱し、径5cmほどの円礫が数個ずつのまとまりとして見られた。付近の崩落土中から板碑片が5点出土している。1点は、上部及び基部を欠く大型の板碑で、表面に蓮台と年月日の刻字の痕跡が認められる。1点は上半部を欠損する板碑で、上方左右に1体ずつの花瓶と「□文六年十月□」の年号が刻まれている。また、刻線・刻字には金泥で化粧した痕跡が認められる。(井上1972b)

3. 上行寺東やぐら群(第9図3～6)：昭和59年(1984)8月～12月及び昭和61年(1986)7月～12月の2ヶ年にわたって発掘調査が実施された。調査によって、上中下三段にわたってやぐら44基、掘立建物址10棟、礎石建物址などが発見された。13・17・22号やぐら内より板碑が5点出土している。13号やぐらからは、1点が出土している。長さ50cm、最大幅約15cmを測る。表面は、風化が激しく主尊種子キリーク下部が痕跡をとどめる。18号やぐらからは、3点が出土している。風化が激しく、表裏ともに剥落が激しく紀年名・願文・供養者名等は確認できない。いずれも、やぐら機能時の現位置を保って出土した。22号やぐらからは1点が出土している。残存長約24cm、幅約20cmを測る。下部が欠損しているが、蓮座上部に主尊種子キリーク下部が残存する。(小林2002)

4. 六浦大道やぐら群：六浦湊の最奥部に位置する。平成6年(1994)と翌7年に、15基のやぐら、やぐらを転用遺構3ヶ所が調査された(鹿島・鈴木1997)。出土遺物は、一部のかわりけを除き15世紀中頃から16世紀前半のものが大半を占める。全体的に遺存状態が悪い。1号やぐらからは多量の五輪等を主として石塔類が出土しており、板碑も多数が出土している。1号やぐらから33点が、2号やぐらから1点、8号やぐらから14点、12号やぐらから1点が出土しているが、いずれも破片であり表面の風化が多くみられる。また、2号防空壕から3点の板碑が出土しているが、9号やぐらに納められていたものと考えられる。(鹿島1997)

5. 川名森久地区遺跡群(第9図7～9)：西側斜面やぐら群の2基より板碑が多数出土した。1号やぐら4点、2号やぐらから28点が出土している。板碑の残存状態は比較的良好、完形もしくは完形に近い物がほとんどである。多くの板碑の表面には、二条線、上部中央には主尊種子キリーク、花瓶が確認される。また、紀年銘も確認され「正中年(1324～1326)七月」「応永七(1400)」「応永九(1402)」「応永十二(1405)」「応永十八(1411)」「十二」「十二、六」「十四年」「五月日」等が確認される。1号やぐらから出土した「正中年七月」と記された板碑(第9図7)は奥壁そばに正面を北に向け直立して発見された。2号やぐらから出土し



- 1・2：長昌寺前横穴群
- 3～6：上行寺東やぐら群
- 7～9：川名森久地区遺跡群
- 10：関口またやぐら群
- 11：長勝寺跡内やぐら群

第9図 やぐら内出土板碑【1/8】

た板碑は、やぐらの拡張された部分に集中し横位で出土した。(渡辺1996)

6. 間口またやぐら群(第9図10): やぐら5基が発見された。4号やぐらの玄室奥右側の床面が一段低くなり納骨穴が造られている。やぐら内の床面に摩滅した貝殻を主体とした白い砂が堆積。1号やぐらから1点、2号やぐらから下半部1点が出土。その他、かわらけが出土。1号やぐらには、奥壁に沿って小さな溝状の掘り込みが確認されており、この上部に立てられた状態で板碑が出土している。(穴戸2004)

7. 長勝寺跡内やぐら群(第9図11): やぐら19基が発見された。大部分のやぐらは斜面の崩壊や開削により前庭部、羨道部などの入り口部は確認できなかった。1号やぐらから1点、11号やぐらから4点、13号やぐらから1点の計6点が出土している。11号及び13号やぐらから出土した板碑は共に上半部のみの出土だが、共に種子・蓮台が確認できる。その他の板碑は破片である。(長谷川・大塚1999b、池田・穴戸2004)

8. 松谷寺やぐら: やぐら13基が発見された。谷戸内のL字状崖面に展開し、その前面には建物跡の存在が推測される岩盤削平の平場の一部が検出された。2号やぐらから2点が出土している。2点共に下半部のみの出土で表面にノミ状工具痕が残る。(宗産1998)

以上が、板碑が出土したやぐらの概要である。板碑は現時点で166点が出土しているおり、五輪塔や宝篋印塔等を合わせた全石塔出土点数2,639点中の約7%にすぎない。出土数では、五輪塔や宝篋印塔に比べると圧倒的に数が少ない。また、今回集成した物は半分以上のものが破片であり、完形もしくは1/2以上残存している板碑は90点弱である。出土状況については、ほとんどの板碑がやぐら内に投げ込まれたり放置された状態で出土しており、立てられた状態で出土している物は数点にすぎない。前述のとおり、川名森久地区遺跡群1号やぐらでは、奥壁そばに正面を北に向け直立して、また間口またやぐら群1号やぐらでは、奥壁に沿って小さな溝状の掘り込みの上部に立てられて状態で板碑が出土している。やぐら内に、板碑を伴う形で埋葬が実施された例と考えられる。

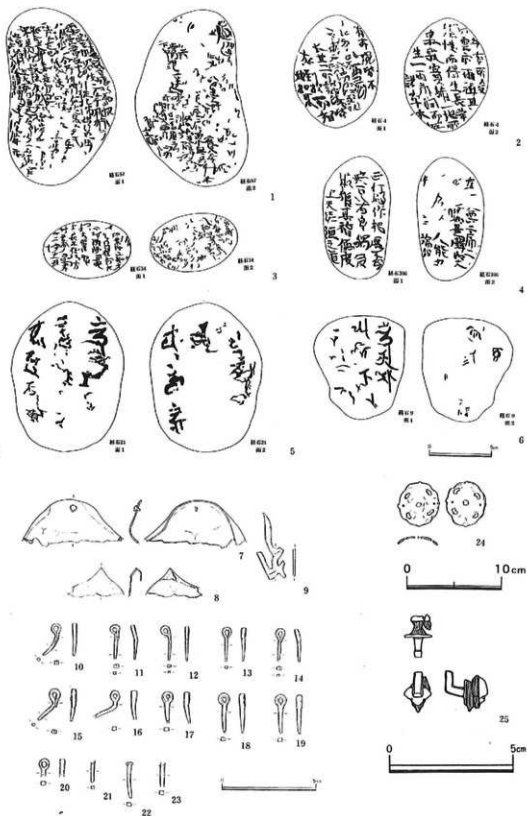
板碑は、これまでの研究により13世紀以後に出現し、16世紀には減少し、17世紀には姿を消していく様子がうかがえる。やぐら内より出土した板碑については、やぐら自体の構築年代がはっきりしていないことから確実なことは言えないが、紀年名が確認される物が14・15世紀に限られることから、ほぼこれと同じ状況にあったと考えられる。

#### (4) その他の遺物

やぐら内より出土した陶磁器、かわらけ、石塔類以外の遺物には、瓦質器、磁石、銅銭、滑石製鍋、鉄製品、銅製品、木製品、石製品など多種多様の遺物が出土している。大部分の遺物については、やぐらでの葬送に關係する遺物と言うよりは、やぐら前面に展開すると考えられる造成遺構や周辺からやぐら内に混入された遺物と考えられる。その中でも、やぐらへの埋葬に關係すると考えられる遺物について述べてみたい。

まず、山王堂東谷やぐら群から出土した経石(第10図1~6)があげられる。山王堂東谷やぐら群は、鎌倉市大町に所在し、2001年~2004年にかけて11基のやぐらが調査された。その中で、1号やぐらと3号やぐらから経石が出土している。1号やぐらでは、玄室内中央部に直方体の切石9個を組み合わせた基壇が設けられ、基壇とその周辺より玉石1,426点が出土し、その内150点より経石が認められた。また、前庭部の集石より玉石209点が出土し、その内32点より経石が認められた。3号やぐらでは、玄室内から玉石1,320点が出土し、その内1点より経石が認められた。また、前庭部より玉石109点が出土し、その内15点より経石が認められた。やぐら群からは、合計199個の経石が出土している。経石は、いずれも「多字一石経」と呼ばれ





1~23: 山王堂東谷やぐら群, 24: 尾藤谷やぐら群, 25: 尾藤谷西第2やぐら群

第10図 やぐら内出土鉄石・銅製品 [1/3・1/1・1/4・2/3]

る物で、石の前面にわたって経文が確認できる。経石が出土したやぐらは、山王堂東谷やぐら群以外に、多宝寺跡やぐら群(奥田1966、三上1976)、新善光寺跡やぐら群(原1988)、まんだら堂やぐら群、名越山やぐら、葛原岡やぐら群、瑞泉寺裏山やぐら群、釈迦堂奥やぐら群(赤星1957)の7地点が確認されている。これまでやぐらから発見された経石は、石の表面に記された「法華経」が記されているが、山王堂で出土した経石は、「佛説無量壽経」が記されており初めての出土である。「佛説無量壽経」は浄土系の宗派と強い結びつきを有する教典で、供養に当たっての宗教的背景を考えていく上で興味深い例であると報告されている。

経石以外では、同じく山王堂東谷やぐらの前庭部より、懸仏の光背もしくは鏡板と思われる銅製円板、火燵様衣装をなす銅板、銅製金盃や銅釘等(第10図7~23)が出土している。やぐら内より出土した銅製品は、尾藤谷やぐら群(長谷川・大塚a1999)より飾金具(第10図24)、宅間谷西第2やぐら群(穴戸2001)より座金付鈎(第10図25)が確認できる。銅製が、やぐら内より出土することは数量的には非常に少ないが、懸仏の光背、鏡板、飾金具等、葬送儀礼に関係する遺物と考えられる。(宮坂)

#### 【参考文献】

- 赤星直忠 1957 「鎌倉の経塚」『考古学雑誌』42-4 日本考古学会  
 赤星直忠 1959 「鎌倉市史」考古編  
 池田治・井辺一徳・穴戸信悟 2001 「山王堂東谷やぐら群」かながわ考古学財団調査報告117  
 池田治・穴戸信悟 2004 「長勝寺跡内やぐら群Ⅱ」かながわ考古学財団調査報告174  
 池上悟 1993 「下総聖宝印塔について」『立正大学人文科学研究年報』第31号 立正大学人文科学研究所  
 石田茂作 1969 「日本佛塔の研究」講談社  
 井上義弘 1972a 「昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告書」  
 『横浜市鶴見区駒岡遺跡群調査報告』横浜市埋蔵文化財調査委員会  
 井上義弘 1972b 「昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」  
 『横浜市金沢区富岡町長昌寺前横穴群発掘調査報告』横浜市埋蔵文化財調査委員会  
 伊原恵可ほか編 1966 「重要文化財覚園寺開山塔・大塔塔修理工事報告書」覚園寺  
 上田薫・植山英史 2000 「益谷科東6丁目西地区やぐら群(2次)」かながわ考古学財団調査報告107  
 大三輪龍哉 2006 「中世東国における石製塔婆の研究—中世都市鎌倉の宝篋印塔と五輪塔を中心として—」  
 『考古学論究』第11号 立正大学考古学会  
 岡野智子 2003 「大蔵派宝篋印塔の研究」『戒律文化』2  
 岡野智子 2006 「初期宝篋印塔と律宗」『戒律文化』5  
 岡田直栄他 1966 「中世墳墓「やぐら」の調査」学習院大学輔仁会史学部  
 鹿島保栄・鈴木重信 1997 「六浦大遺やぐら群発掘調査報告書」財団法人横浜市ふるさと歴史財団  
 川勝政太郎 1981 「石造美術」誠文堂新光社  
 小林義典 2002 「上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書」上行寺東やぐら群遺跡発掘調査団  
 斎木勝 1986 「関東式宝篋印塔の研究」『千葉県文化財センター研究紀要』10 財団法人千葉県文化財センター  
 坂詰秀一編 2006 「坂詰秀一先生石造文化財論叢(再録)」『石造文化財』2 佛教石造文化財研究所  
 佐藤重聖 2007 「中国宝篋印塔の福年について」『中日石造物の技術的交流に関する基礎的研究—宝篋印塔を中心に—』  
 シルクロード学研究vol.27 シルクロード学研究センター  
 穴戸信悟・池田治 2001 「宅間谷西第2やぐら群」かながわ考古学財団調査報告114  
 穴戸信悟 2004 「開口またやぐら群」かながわ考古学財団調査報告172  
 宗慶富貴子・宗慶秀明・田代都夫 1998 「松谷寺やぐら」『中世石造遺物の調査Ⅱ』  
 東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集 東国歴史考古学研究所  
 宗慶秀明ほか 1999 「正法寺遺跡」『中世石造遺物の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集 東国歴史考古学研究所  
 鈴木一磨・木村吉行 2000 「弁ヶ谷東やぐら群」かながわ考古学財団調査報告94  
 鈴木一磨・岩田直樹・根木志保 2005 「西御門東やぐら群」かながわ考古学財団調査報告181  
 鈴木一磨・西谷俊廣 2007 「宅間谷東やぐら群」かながわ考古学財団調査報告207  
 沼子市教育委員会 2007 「鳳凰文化財緊急調査報告書Ⅴ—平成15年度・平成16年度・平成17年度—」  
 石造物研究会 2007 「日引 一石五輪塔の諸問題」第9号  
 千々和実 1984 「板碑」『仏教考古学講座』第三巻塔・塔婆 雄山閣  
 千々和実 1984 「板碑源流考」吉川弘文館  
 貫達人 1978 「鎌倉の宝篋印塔」鎌倉市立博物館第22集 鎌倉市立博物館  
 長谷川厚・大塚健一a 1999 「尾藤谷やぐら群」かながわ考古学財団調査報告64  
 長谷川厚・大塚健一b 1999 「長勝寺跡所在やぐら群」かながわ考古学財団調査報告71  
 原 廣志ほか 1988 「新善光寺跡やぐら発掘調査報告書」新善光寺跡やぐら発掘調査団  
 文化財建造保存技術協会編 1980 「重要文化財安養院宝篋印塔保存修理工事報告書」安養院  
 三上次男他 1976 「多宝寺遺跡発掘調査報告書」多宝寺遺跡発掘調査団  
 山川均 2006 「石造物が語る中世職能集団」日本史リフレット29 山川出版社  
 山本輝久・植山英史ほか 1997 「池子遺跡群Ⅳ」かながわ考古学財団調査報告26  
 渡辺清史 1996 「藤沢市川名森久地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」飛鳥建設株式会社・川名森久地区遺跡発掘調査団

第2表 神奈川県内「やぐら」集成追加・補遺一覧(2005年12月以降刊行分)

番号	遺跡名	所在地	基数	立地	調査年月日	備考	文献番号
52	無量寺ヶ谷やぐら群	鎌倉市扇ヶ谷1丁目26番27他	4	崖裾	2002年1月15日～9月13日		196
		鎌倉市扇ヶ谷39番36	4	崖裾	2005年4月11日～6月21日、8月1日～8月6日、10月26日～11月4日		197
114	真言院北やぐら群	鎌倉市極楽寺2丁目946、943	2	崖裾	2004年5月18日～6月11日	床面に濡鉢状土塊24基	198
115	平六ヶ入やぐら群	横浜賀市道浜町二丁目67-18、71-1	3	崖裾	2005年6月1日～7月8日		199
130	会下山西やぐら群	鎌倉市二階堂360	4	崖裾	2004年7月13日～9月14日、12月13日～12月27日	火葬塚を伴うやぐら1基	200
		鎌倉市二階堂309～311	1	崖裾	2005年12月1日～12月27日		201
131	釜利谷赤坂やぐら群	横浜市金沢区釜利谷東4丁目3867-1	1	崖裾	2005年10月3日～10月12日		202
132	森戸やぐら	鎌倉市十二所字佐小路743番2、4	1	崖裾	2006年5月1日～5月15日	前面が石切跡に改変	203
133	日向やぐら	横浜賀市浦郷町1丁目59番1	2	崖裾	2006年6月1日～6月22日	周辺に調査対象外のやぐら6基、横穴状遺構2基を確認	204
134	宅間谷東やぐら群	鎌倉市浄明寺二丁目471番、471番2-4・6、472番、474番16-18、481番1-2・12-13-15	11	崖裾	2003年6月4日～8月28日、2004年7月15日～8月26日、2005年2月1日～3月4日、2006年3月2日～3月22日	屋敷もしくは寺院の一部と考えられる建物跡、溝状遺構等を確認	205
135	極楽寺地藏堂脇やぐら	鎌倉市極楽寺2丁目27-1	2	崖裾	2006年9月20日～9月26日		206
136	上行寺裏遺跡	横浜市金沢区瀬戸14-6	4	崖裾	2005年8月1日～9月30日、2005年10月13日～10月31日	1号やぐらは地下式、3号やぐらは副室を伴う	207
		横浜市金沢区瀬戸4249-34	2	崖裾	2006年7月18日～9月12日		208
137	光傳寺北やぐら群	横浜市金沢区六浦3丁目3535-1	12	崖裾・中段	2003年10月1日～10月156日		208
138	月輪寺やぐら群	鎌倉市十二所209、266	3	崖裾	2006年3月3日～3月15日		209
139	西野やぐら群	三浦市三崎5丁目121	2	崖裾	2007年1月19日～1月30日		210

※52・114・115は研究記要8・10の遺跡番号、130以降は新番号付与

【文献】

- 196.森孝子 2005『無量寺跡』『鎌倉市歴史文化財緊急調査報告書』21(第2分冊)鎌倉市教育委員会  
 197.菊川美政・宗達富貴子 2006『鎌倉城(No.87)発掘調査報告書』(株)斉藤建設  
 198.かながわ考古学財団 2006『真言院北やぐら群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告194  
 199.かながわ考古学財団 2005『平六ヶ入やぐら群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告193  
 200.かながわ考古学財団 2006『会下山西やぐら群』かながわ考古学財団調査報告196  
 201.かながわ考古学財団 2006『会下山西やぐら群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告204  
 202.かながわ考古学財団 2006『釜利谷赤坂やぐら群』かながわ考古学財団調査報告197  
 203.かながわ考古学財団 2006『森戸やぐら』かながわ考古学財団調査報告200  
 204.かながわ考古学財団 2006『日向やぐら』かながわ考古学財団調査報告203  
 205.かながわ考古学財団 2007『宅間谷東やぐら群』かながわ考古学財団調査報告207  
 206.かながわ考古学財団 2007『極楽寺地藏堂脇やぐら』かながわ考古学財団調査報告209  
 207.かながわ考古学財団 2007『上行寺裏遺跡(瀬戸14番地やぐら群)』かながわ考古学財団調査報告211  
 207.かながわ考古学財団 2007『上行寺裏遺跡(瀬戸14番地やぐら群Ⅱ)』かながわ考古学財団調査報告217  
 209.小林晴生・小林義典 2007『光傳寺北やぐら発掘調査報告書』玉川文化財研究所  
 210.かながわ考古学財団 2007『月輪寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告212  
 211.かながわ考古学財団 2007『西野やぐら群』かながわ考古学財団調査報告215

# 近世民家の集成(5)

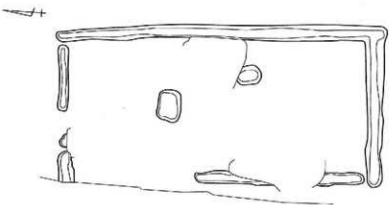
近世プロジェクトチーム

## はじめに

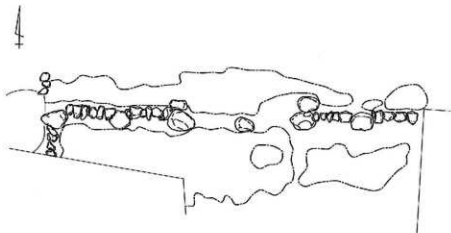
県内の近世民家の集成の第5回目である。本プロジェクトでは、昨年度までに横浜市、川崎市、横須賀市、鎌倉市、平塚市、藤沢市、茅ヶ崎市、逗子市、小田原市、相模原市、綾瀬市、厚木市、伊勢原市、大和市の集成を行い117棟分のデータを蓄積してきた。今年度は津久井町、愛川町の集成を行い30棟分を追加した。

## 凡例

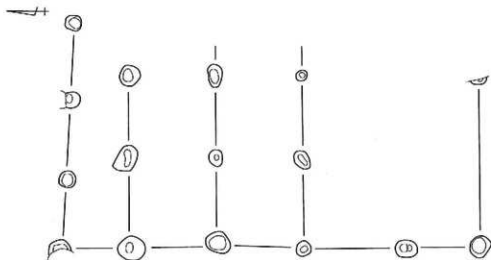
- ・資料Noは近世民家の集成Iからの続き番号である。
- ・遺構名は報告書の記載に基づく。
- ・建物の縮尺は1/100とし、スケールを省略したが、規模の大きいものについては適宜縮尺を変え、図面ごとにスケールを示した。
- ・代官守屋左太夫陣屋跡1号礎石建物址については、表に収まるよう縮小すると縮根石部分が見づらくなるため1ページで掲載した。
- ・梁間、桁行の間数は単に柱穴の数ではなく、柱間距離から概略割り出した1間の梁間及び桁行寸法で換算した数値を示している。
- ・坪数は梁間×桁行の面積を、現行の一坪3.3㎡で除したものである。
- ・建物の機能・構築時期については、報告書の記載に準じているが、母屋と付属建物の別が明確なもの、出土遺物から時期が推定できるものについては記載した。

資料No.	118	遺跡名	根小屋根本				所在地	津久井町根小屋字根本			
遺構名	1号土蔵跡		構築場所	斜面地を掘削・盛土することで造り出された平坦面							
規模	梁間	7.7 m	桁数	16.5 m	×	間	面積	127.1 m <sup>2</sup>	坪数	38.5 坪	
柱穴の形状		柱間距離	梁		m	桁	m	主軸方位	N-3°-W		
出土遺物	陶磁器			付属施設							
建物の機能	酒造に関連する蔵			構築時期		19世紀後半					
備考	布基礎部分は礎と土が交互に突き固められている、南側約4mに1号礎石建物跡あり										
											
[S : 1/200]											

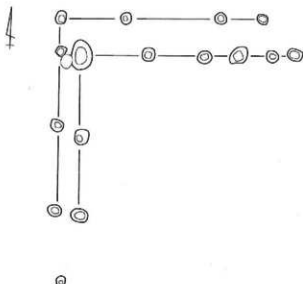
資料No.	119	遺跡名	根小屋根本			所在地	津久井町根小屋字根本			
遺構名	1号礎石建物跡		構築場所	斜面地を掘削・盛土することで造り出された平坦面						
規模	梁間	7.2 m	桁数	0.8 m	×	間	面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪
柱穴の形状		柱間距離	梁	m	桁	m	主軸方位	N-3°-W		
出土遺物				付属施設						
建物の機能				構築時期	19世紀後半					
備考	石の間隔のあいている箇所は出入り口部分か、北側約4mに1号土蔵跡あり									



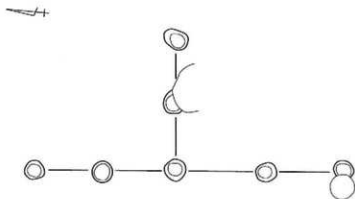
資料No.	120	遺跡名	根小屋根本			所在地	津久井町根小屋字根本			
遺構名	1号堀立柱建物跡(A)		構築場所	整地層下の削平面						
規模	梁間	6.0~ m	桁数	11~ m	2~ ×	4~ 間	面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪
柱穴の形状	不整形形	柱間距離	梁	1.8~2.1 m	桁	1.8~2.8 m	主軸方位	N-2°-W		
出土遺物	角釘			付属施設	北側に庇					
建物の機能				構築時期	17世紀もしくはそれ以前					
備考										



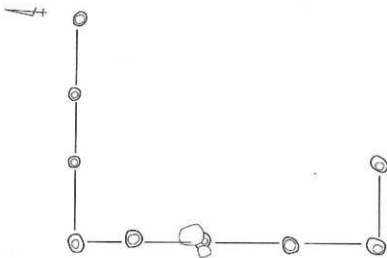
資料No.	121	遺跡名	根小屋根本			所在地	津久井町根小屋字根本				
遺構名	1号掘立柱建物跡(B)		構築場所	整地層下の剖平面							
規模	梁間	4.2~ m	桁数	5.7~ m	2~ × 3~ 間	面積	m <sup>2</sup>		坪数	坪	
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	2.0・2.2 m	桁	1.5~1.8 m	主軸方位	N-2°-W			
出土遺物					付属施設	北及び西側に庇					
建物の機能					構築時期	17世紀もしくはそれ以前					
備考	1号掘立柱建物跡(A)建替え										



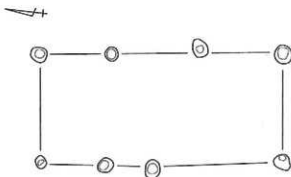
資料No.	122	遺跡名	根小屋根本			所在地	津久井町根小屋字根本				
遺構名	2号掘立柱建物跡(A)		構築場所	整地層下の剖平面							
規模	梁間	5.9~ m	桁数	8.0~ m	2~ × 3~ 間	面積	m <sup>2</sup>		坪数	坪	
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.8~2.1 m	桁	1.6~2.3 m	主軸方位	N-3°-W			
出土遺物					付属施設						
建物の機能					構築時期	17世紀もしくはそれ以前					
備考	3号掘立柱建物跡と重複するが、新旧不明										



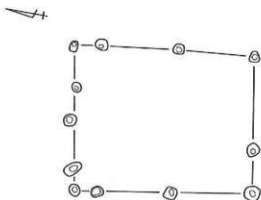
資料No.	123	遺跡名	根小屋根本			所在地	津久井町根小屋字根本			
遺構名	2号掘立柱建物跡(B)		構築場所	整地層下の削平面						
規模	梁間	3.2~ m	桁数	8.2~ m	3~ × 4~ 間	面積	m <sup>2</sup>		坪数	坪
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.7・1.75 m	桁	1.8~2.4 m	主軸方位	N-4°-W		
出土遺物					付属施設					
建物の機能					構築時期	17世紀もしくはそれ以前				
備考	2号掘立柱建物跡(A)建替え、3号掘立柱建物跡と重複するが新旧不明									



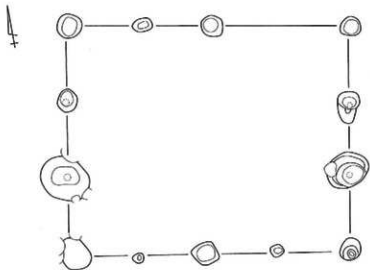
資料No.	124	遺跡名	根小屋根本			所在地	津久井町根小屋字根本			
遺構名	3号掘立柱建物跡		構築場所	整地層下の削平面						
規模	梁間	2.9 m	桁数	6.4 m	1 × 3 間	面積	18.6 m <sup>2</sup>	坪数	5.6 坪	
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	2.8・2.9 m	桁	1.3~3.4 m	主軸方位	N-5°-W		
出土遺物	瓦				付属施設					
建物の機能					構築時期	17世紀もしくはそれ以前				
備考	2号掘立柱建物跡と重複するが新旧不明									



資料No.	125	遺跡名	根小屋根本			所在地	津久井町根小屋字根本				
遺構名	4号掘立柱建物跡		構築場所	整地層下の削平面							
規模	梁間	3.8 m	桁数	4.8 m	2 × 4 間	面積	18.2 m <sup>2</sup>	坪数	5.6 坪		
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.1~2.5 m	桁	1.95~2.15 m	主軸方位	N-10°-W			
出土遺物						付属施設	17世紀もしくはそれ以前				
建物の機能						構築時期					
備考											

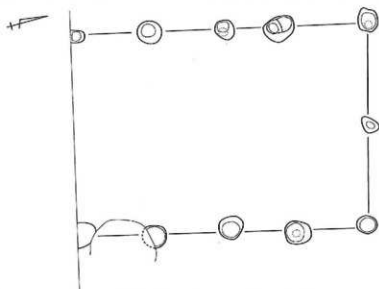


資料No.	126	遺跡名	代官守屋左太夫障屋跡			所在地	津久井町根小屋字根本				
遺構名	1号掘立柱建物跡		構築場所	斜面地を削平・盛土することによって造り出された平坦地							
規模	梁間	7.5 m	桁数	8.0 m	3 × 4 間	面積	60 m <sup>2</sup>	坪数	18.2 坪		
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.86~2.1 m	桁	1.7~1.98 m	主軸方位	N-80°-W			
出土遺物	陶器、かわらけ、瓦					付属施設					
建物の機能						構築時期	17世紀前半				
備考											

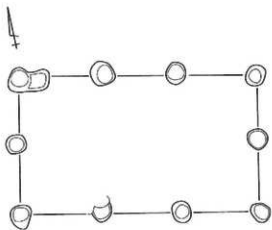




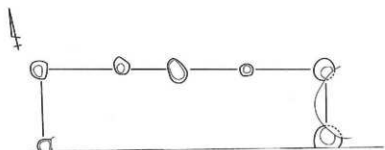
資料No.	127	遺跡名	代官守屋左太夫陣屋跡			所在地	津久井町根小屋字根本		
遺構名	2号掘立柱建物址		構築場所	斜面地を削平・盛土することによって造り出された平坦地					
規模	梁間	5.3 m	桁数	7.8~ m	2 × 4~ 間	面積	㎡ 坪数 坪 坪		
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	2.65 m	桁	1.55~2.35 m	主軸方位	N-14°-E	
出土遺物	陶磁器、かわらけ、瓦、銭貨			付属施設					
建物の機能				構築時期		17世紀前半			
備考	3・4号掘立柱建物跡と重複、4号より古い								



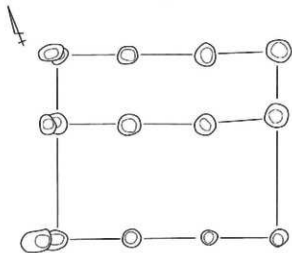
資料No.	128	遺跡名	代官守屋左太夫陣屋跡			所在地	津久井町根小屋字根本		
遺構名	3号掘立柱建物址		構築場所	斜面地を削平・盛土することによって造り出された平坦地					
規模	梁間	3.6 m	桁数	6.3 m	2 × 3 間	面積	22.7 ㎡	坪数	6.9 坪
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.7~1.9 m	桁	1.85~2.3 m	主軸方位	N-79°-W	
出土遺物	陶磁器、かわらけ、銭貨			付属施設					
建物の機能				構築時期		17世紀前半			
備考	2号掘立柱建物跡と重複するが新旧不明								



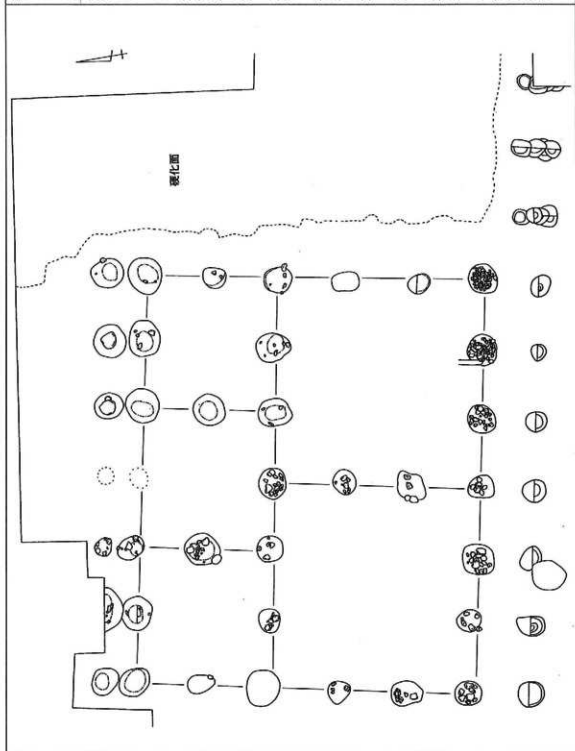
資料No.	129	遺跡名	代官守屋左太夫陣屋跡				所在地	津久井町根小屋字根本			
遺構名	4号掘立柱建物址		構築場所	斜面地を削平・盛土することによって造り出された平坦地							
規模	梁間	2.0~ m	桁数	7.56 m	1~ × 4 間	面積	m <sup>2</sup>		坪数	坪	
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	18・2.0 m	桁	1.5~2.1 m	主軸方位	N-77°-W			
出土遺物	陶器、銭貨				付属施設						
建物の機能					構築時期		17世紀前半				
備考											



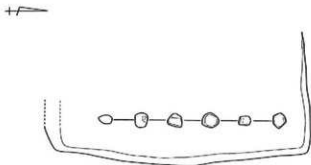
資料No.	130	遺跡名	代官守屋左太夫陣屋跡				所在地	津久井町根小屋字根本			
遺構名	5号掘立柱建物址		構築場所	斜面地を削平・盛土することによって造り出された平坦地							
規模	梁間	5.0 m	桁数	5.86 m	2 × 3 間	面積	29.3 m <sup>2</sup>	坪数	8.9 坪		
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.72~3.26 m	桁	1.8~2.04 m	主軸方位	N-68°-W			
出土遺物	陶器、かわらけ、瓦				付属施設						
建物の機能					構築時期		17世紀前半				
備考											



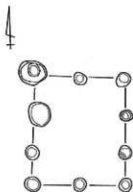
資料No	131	遺跡名	代官守屋左太夫陣屋跡			所在地	津久井町根小屋字根本		
遺構名	1号礎石建物跡		構築場所	斜面地を削平・盛土することによって造り出された平地地					
規模	梁間	9.2 m	桁数	11.5 m	5 × 6 間	面積	102.9 m <sup>2</sup>	坪数	31.2 坪
柱穴の形状	柱間距離		梁	1.8 m	桁	1.8~2.0 m	主軸方位 N-79°-W		
出土遺物	陶器、かわらけ、瓦、銭貨、鎧部品			付属施設		北側及び南側に庇			
建物の機能	代官陣屋または屋敷?			構築時期					
備考	礎石は40cmほどの河原石、3間×3間が2部屋、2間×2間が3部屋、17世紀中頃廃絶								



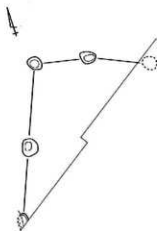
資料No.	132	遺跡名	津久井城跡			所在地	津久井町根小屋字城坂				
遺構名	1号礎石建物跡		構築場所	整地層上							
規模	梁間	3.3~ m	桁数	7	m	1~ × 5	間	面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪
柱穴の形状			柱間距離	梁	m		桁	0.8~1.0	m	主軸方位	N-3°-E
出土遺物	釘			付属施設							
建物の機能	母屋			構築時期 16世紀末~17世紀前半							
備考	方形の掘り込みと礎石列からなる、礎石間の距離は0.9m前後、1号掘立柱建物跡との関連が予想される										



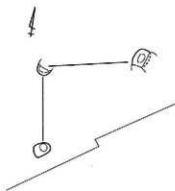
資料No.	133	遺跡名	津久井城跡			所在地	津久井町根小屋字城坂					
遺構名	1号掘立柱建物址		構築場所	整地層上								
規模	梁間	2.45 m	桁数	2.9	m	2 × 3	間	面積	7.1 m <sup>2</sup>	坪数	2.2 坪	
柱穴の形状	円形		柱間距離	梁	1.15・1.2		m	桁	0.85~1.1	m	主軸方位	N-1°-E
出土遺物				付属施設								
建物の機能				構築時期 16世紀末~17世紀前半								
備考	1号礎石建物跡との関連が予想される、柱間距離より特殊な建物の可能性が指摘されている											



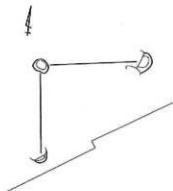
資料No.	134	遺跡名	青根馬渡No 2	所在地	津久井町大字青根字馬渡				
遺構名	K1号掘立柱建物址 構築場所 段丘緩斜面								
規模	梁間	1.5~ m	桁数	2.2~ m	2~ × 2~ 間面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪	坪
柱穴の形状	不整形	柱間距離	梁	1.5 m	桁	2.0・2.2 m	主軸方位	N-24°-E	
出土遺物					付属施設				
建物の機能					構築時期				
備考	K2・3号掘立柱建物址と重複している								



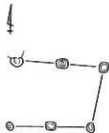
資料No.	135	遺跡名	青根馬渡No 2	所在地	津久井町大字青根字馬渡				
遺構名	K2号掘立柱建物址 構築場所 段丘緩斜面								
規模	梁間	2.1~ m	桁数	2.6~ m	2~ × 2~ 間面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪	坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.1 m	桁	2.6 m	主軸方位	N-10°-W	
出土遺物					付属施設				
建物の機能					構築時期				
備考	K1・3号掘立柱建物址と重複している								



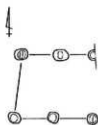
資料No.	136	遺跡名	青根馬渡No 2			所在地	津久井町大字青根字馬渡			
遺構名	K3号掘立柱建物址		構築場所		段丘緩斜面					
規模	梁間	2.4~ m	桁数	2.7~ m	2~ × 2~ 間	面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪	
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.4 m	m	桁	2.7 m	m	主軸方位	N - 10° - W
出土遺物				付属施設						
建物の機能				構築時期						
備考	K1・2号掘立柱建物址と重複している									



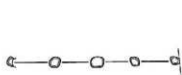
資料No.	137	遺跡名	青根馬渡No 4			所在地	津久井町大字青根字馬渡			
遺構名	K1号掘立柱建物址		構築場所		段丘緩斜面					
規模	梁間	1.75 m	桁数	2.3~ m	1 × 2~ 間	面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪	
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.75 m	m	桁	1.05~1.2 m	主軸方位	N - 90° - W	
出土遺物				付属施設						
建物の機能				構築時期						
備考										



資料No	138	遺跡名	青根馬渡No 4			所在地	津久井町大字青根字馬渡		
遺構名	K2号掘立柱建物址		構築場所	段丘緩斜面					
規模	梁間	1.7 m	桁数	2.3~ m	1 × 2~	間面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.7 m	m	桁	0.9~1.05 m	主軸方位	N - 90° - W
出土遺物				付属施設					
建物の機能				構築時期					
備考									



資料No	139	遺跡名	青根馬渡No 4			所在地	津久井町大字青根字馬渡		
遺構名	K3号掘立柱建物址		構築場所	段丘緩斜面					
規模	梁間	m	桁数	m	× 4~	間面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	m	桁	1.05~1.1 m	主軸方位	N - 90° - W	
出土遺物				付属施設					
建物の機能				構築時期					
備考									



資料No.	140	遺跡名	青根引山	所在地	津久井町大字青根字上野					
遺構名	K1号掘立柱建物址		構築場所	段丘平坦部						
規模	梁間	1.1~ m	桁数	7.8 m	1~ × 4 間	面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪	
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.1 m	桁	1.9~2.0 m	主軸方位	N - 65° - E		
出土遺物				付属施設						
建物の機能				構築時期						
備考										

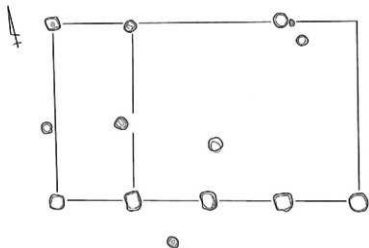


資料No.	141	遺跡名	青根引山	所在地	津久井町大字青根字上野					
遺構名	K2号掘立柱建物址		構築場所	段丘平坦部						
規模	梁間	1.1~ m	桁数	7.8 m	1~ × 4 間	面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪	
柱穴の形状	不整円形	柱間距離	梁	1.75 m	桁	1.75~2.1 m	主軸方位	N - 75° - E		
出土遺物				付属施設						
建物の機能				構築時期						
備考										

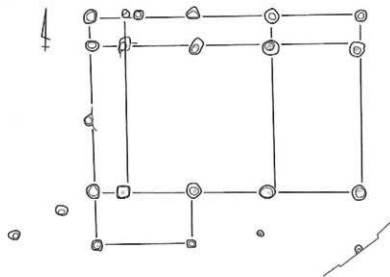




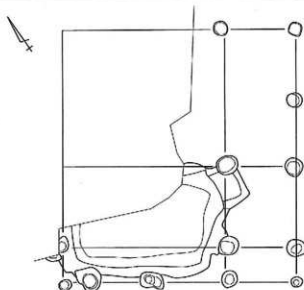
資料No.	142	遺跡名	大地開戸			所在地	津久井町大字青野原字大地開戸		
遺構名	K1号掘立柱建物址		構築場所	河岸段丘緩斜面					
規模	梁間	4.7 m	桁数	8 m	2 × 4 間	面積	37.6 m <sup>2</sup>	坪数	11.4 坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.0・2.7 m	桁	2.0 m	主軸方位	N - 81° - W	
出土遺物					付属施設				
建物の機能					構築時期				
備考									



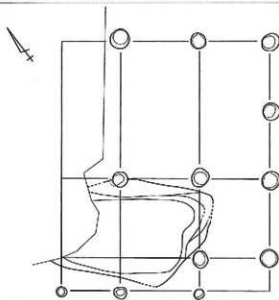
資料No.	143	遺跡名	大地開戸			所在地	津久井町大字青野原字大地開戸		
遺構名	K2号掘立柱建物址		構築場所	河岸段丘緩斜面					
規模	梁間	3.9 m	桁数	6.3 m	2 × 3 間	面積	24.6 m <sup>2</sup>	坪数	7.4 坪
柱穴の形状	方形・円形	柱間距離	梁	1.9・2.0 m	桁	1.9~2.5 m	主軸方位	N - 88° - E	
出土遺物					付属施設				
建物の機能					構築時期				
備考	北側及び西側に廂有り								



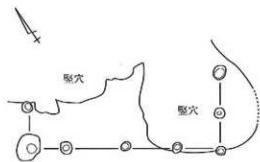
資料No.	144	遺跡名	半原向原				所在地	愛川町半原字向原			
遺構名	K1号掘立柱建物址		構築場所	段切りにより造成された地業面							
規模	梁間	6.15 m	桁数	6.65 m	3 × 3.5 間	面積	40.9 m <sup>2</sup>	坪数	12.4	坪	
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.55~2.1 m	桁	1.75~2.15 m	主軸方位	N-35°-E			
出土遺物					付属施設	竪穴状遺構					
建物の機能	ウマヤ				構築時期						
備考	K2号掘立柱建物址の建て替え、土間状で固く踏み固められた掘り込みや間仕切を有する										



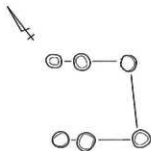
資料No.	145	遺跡名	半原向原				所在地	愛川町半原字向原			
遺構名	K2号掘立柱建物址		構築場所	段切りにより造成された地業面							
規模	梁間	6.15 m	桁数	6.65 m	3 × 3.5 間	面積	36.3 m <sup>2</sup>	坪数	11	坪	
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.55~2.1 m	桁	1.8~2.05 m	主軸方位	N-39°-E			
出土遺物					付属施設	竪穴状遺構					
建物の機能	ウマヤ				構築時期						
備考	土間状で固く踏み固められた掘り込みや間仕切を有する										



資料No	146	遺跡名	半原向原			所在地	愛川町半原字向原		
遺構名	K3号掘立柱建物址		構築場所	段切りにより造成された地業面					
規模	梁間	2.05 m	桁数	5.1 m	2 × 4 間	面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	1.0・1.05 m	桁	0.9~1.65 m	主軸方位	N - 53° - W	
出土遺物					付属施設				
建物の機能					構築時期				
備考									



資料No	147	遺跡名	半原向原			所在地	愛川町半原字向原		
遺構名	K4号掘立柱建物址		構築場所	段切りにより造成された地業面					
規模	梁間	2.05 m	桁数	2.15~ m	1 × 2~ 間	面積	m <sup>2</sup>	坪数	坪
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	2.05 m	桁	0.7~1.35 m	主軸方位	N - 51° - W	
出土遺物					付属施設				
建物の機能					構築時期				
備考									



# 神奈川県における製作地推定のための胎土分析 の基礎的研究

一相模川・境川上流域の縄文土器を中心にして一

松田光太郎

## はじめに

従来から今日に至るまで、遺跡から出土する土器の製作地推定は、主として遺物の型式学的特徴の観察に基づいて行われている。須恵器のように製作地や素土が限定されるものは、蛍光X線分析などの理化学的方法が製作地推定に対してある程度効果を発揮しているが、素焼きの土器の場合は、製作場所が限定されず、素土中の混入物もバリエーションに富むため、理化学的方法による個々の土器の分析データ値はばらつきが大きく、製作地推定の絞込みが、須恵器などに比べると緩くなる。また土器の場合は、混入物の砂礫粒子が観察可能であるので、顕微鏡を使った岩石学的方法による製作地推定も行われているが、土器の出土点数が須恵器などに比べ多い割に、分析の実施点数は多くないので、土器全体に占める胎土分析の実施率は低い。

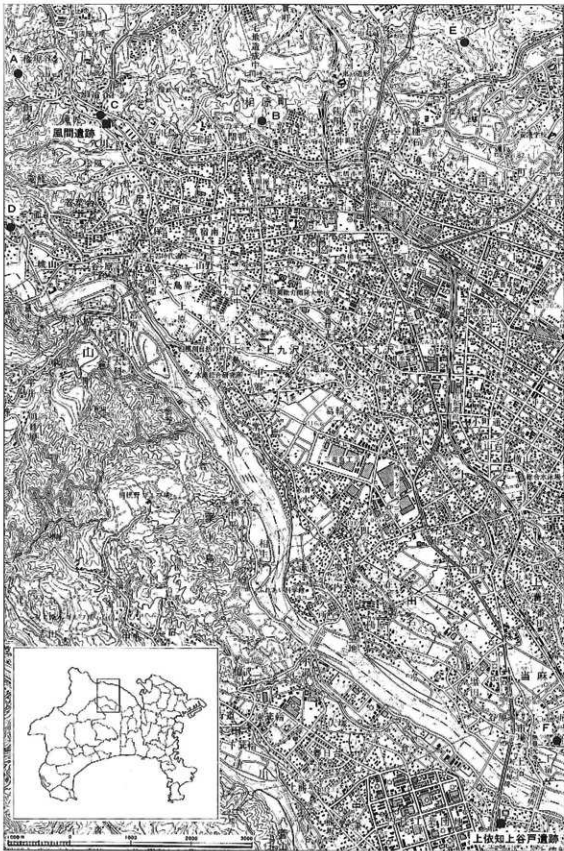
このような訳で土器の製作地推定の多くは型式学的特徴の判断によって行われている。明確に型式学的特徴が異なる土器の場合は型式学的判断によって製作地推定はできる。しかし土器の属性は類似したものが他の型式に共通して分布する場合も多い。また一つの型式の分布が100kmを超える広域な範囲に及ぶ場合も多い。このような場合は型式学的判断のみによって製作地推定を行うのは難しい。土器の胎土分析の併用が求められよう。

一方胎土分析の方にも課題がある。先にも述べたが、胎土分析には岩石学的分析と理化学的分析があり、それぞれ方法的特性と問題点をもっているのである(松田・建石1999など)。方法的課題を克服しつつ、分析データも蓄積することが必要である。今回はその手始めとして神奈川県相模川・境川の上流域の現相模原市城山町付近を中心とした地域の縄文土器を対象にしてみたい。当地域を対象としたのは、当地域には発掘調査により土器が出土している遺跡があり、周辺地質に関する研究もあり、段丘崖などの露頭で砂礫を採取することができるからである。そして当該地域で製作したと推定される土器の胎土の特徴を明らかにしてみたい。

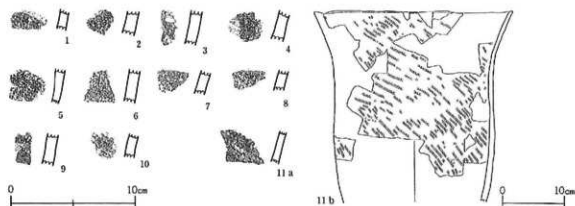
## 1. 研究小史

神奈川県内の胎土分析は多くの研究者により行われている。県内の胎土分析のうち岩石学的方法によるものとしては古城泰氏(古城1981)、上條朝宏氏(上條1979)、奥田高氏(奥田1997)、河西学氏(河西他1994など)、筆者(松田1999・2000・2004)らの研究がある。また理化学的方法では三辻利一氏(三辻1999など)、井上巖氏(井上2002)、藤根久氏(藤根他2007)らの研究がある。

このうち本論の研究手法と最も近いものは河西氏の研究である。氏は神奈川県全域の砂礫試料を分析し、そのデータから遺跡出土土器の製作地推定を行うことを既に行っている。氏の公表したデータと比較し



第1圖 試料採取遺跡・地点



第2図 土器試料 1~10: 風間遺跡, 11: 上依知上谷戸遺跡[1~11a: 1/3, 11b: 1/6]

て製作地推定を行うこともできるが、氏の砂礫試料は現在の河川の砂礫を使用している。現在の河川砂礫もその地域の地質的特性を反映するものであるが、後世の不純物が混入する可能性がある。そこで現在の河川砂礫を比較試料とすることの是非の検討も含めて、今回分析を行ってみたい。

## 2. 本論の研究の方法

本論は偏光顕微鏡を用いて、研究対象域の遺跡出土土器中の鉱物・岩片（岩石の破片）の種類とその量比を調べ、それを当該地域で採取できる各種砂礫中に含まれる鉱物・岩片と比較して、当該地域で製作したと推定される土器の胎土の特徴を抽出するものである。

土器は相模原市城山町川尻所在の風間遺跡出土土器を中心として使用し、比較試料として厚木市上依知上谷戸遺跡出土土器を試料とした。本遺跡は（財）かながわ考古学財団で2003年、2003~2005年にそれぞれ調査した遺跡（第1図1・2）で、既に報告書が刊行されている（松田他2005、栗原他2007）。風間遺跡では報告書非掲載の縄文土器10点（第2図1~10）、上依知上谷戸遺跡では報告書第257図1掲載の諸磯式土器（第2図11b）の同一個体破片1点（第2図11a）を試料とした。すべて異なる個体であり、1・2・4・7~10は横位単節RL縄文、3・5・6は横位単節LR縄文をもち、11は横位単節RL縄文をもっている。両遺跡とも諸磯a・b式土器が同一地点から出土している。試料の土器は縄文の節が比較的に細いため、諸磯a式の可能性が高く、諸磯b式に下っても古い段階のものと考えたい。型式学的には全て在地型式である。諸磯式土器を選んだのは、対象地域に複数遺跡があり、かつ金雲母を含む中期土器のように、意図的に特定の混和物を混ぜたとは思わず、製作地推定がしやすいと考えたからである。

また周辺地質の代表として当該地域で採集した砂礫を試料とした。砂礫を使用したのは、周辺地質が風化したり、浸食を受けたりして、崩落して砂礫になるので、砂礫が周辺地質の代表となりうると考えられると同時に、縄文土器の多くは胎土中に砂礫を含んでいて、砂礫が混和材としての機能を果たしていたと思われ、土器胎土中の砂礫との比較試料になりうるのである。段丘礫層の砂礫は周辺の全ての地質の特徴を反映するだけでなく、偏りがある場合もあるであろうが、現在の河川の砂礫では縄文時代以降の火山噴出物や近現代のコンクリートなどの混入物も混入している危険性があるので、現在の河川砂礫よりも参考になると考え使用した。本地域では境川および相模川の形成した河岸段丘が発達しており、段丘崖などには段丘礫層が露出している。そこで境川上流では東京都町田市大戸の礫層中の砂礫（第1図A）、町田市相原町の礫層中の砂礫（同図B）を試料とし、参考試料として町田市大戸の大戸公会堂下の現境川の河川砂礫（同図C）

表 1-1 土器・砂礫試料の鉱物・岩片組成表 (1)

	土器 1	土器 2	土器 3	土器 4	土器 5	土器 6	土器 7	土器 8	土器 9	
	風筒	風筒	風筒	風筒	風筒	風筒	風筒	風筒	風筒	
鉱物	石英	7	12	19	10	24	15	20	15	6
	カリ長石		+	+		+	+			2
	斜長石	18	7	14	7	12	43	15	14	17
	黒雲母	+	1	6	2	1	2	3	2	4
	白雲母		+		+			+		
	角閃石	+	+	11	1	+	10	1	1	
	普通輝石	9	+	1	+		1			
	単斜輝石	+	1							+
	カンラン石									
	緑れん石	+	+	3	1	1	+	2	+	+
	ジルコン									
	ざくろ石									
	スフェーン									
	緑泥石									
	その他の鉱物									
	不明鉱物	1		1	1	4		1		2
	不透明鉱物		1	3	4	+	1	1	1	10
岩片	玄武岩			3						1
	安山岩				7	3	2	5	1	
	酸性火山岩									
	酸性火山岩							1		
	凝灰岩	1	2	+	4	1		2	4	2
	ハンレイ岩									
	ドレライト									
	花崗岩類			45	4	4		3		2
	片岩									
	片麻岩		+							
	ホルンフェルス	3								
	砂岩	3	22		16	10	25	25	19	13
	泥質岩		4		7	1	1	6	1	3
	チャート		2		2		2	2	3	+
	不明岩片	12	2	2	6	8	6	1	2	6
	赤褐色粒子	1	5	+	+	+	+		1	8
	基質	287	370	319	550	307	392	329	209	255
合計	342	429	424	625	376	500	417	274	331	

も試料とした。また相模川上流では津久井湖北岸に位置する相模原市城山町中沢の礫層中の砂礫(同図D)を試料とした。また多摩川水系大栗川流域になるが八王子市稲水の御殿砂礫層中の砂礫(同図E)、相模川中流域として相模原市当麻の礫層中の砂礫(同図F)も参考試料とした。

土器は岩石切断機で切断したのち、日本地科学社に委託して、樹脂で固化したのち、通常の岩石薄片製作と同様の方法で薄片作成した。土器が小さかったので、試料は大きくはとれなかった。砂礫は水洗して不純物を除去し、乾燥させた後、2.5mm篩でふるい、篩下に落ちた2.5mm以下の砂礫粒子を試料とした。採取した砂礫試料には数cm大の礫も存在したが、土器胎土に含まれる砂礫はそれほど小さくなく、当地域の土器試料の場合、大部分は2.5mm以下の砂礫しか入っていなかったため、篩による粒度選別を行った。この粒度選別後の砂礫試料も日本地科学社に委託して、樹脂で固化したのち、薄片作成した。なおこの砂礫試料については、薄片のカバーガラスをかけない状態で日本地科学社から受け取り、筆者がカリ長石の染色を行った。後述するように、本研究では砂粒のモード測定を行うが、砂粒は細粒のため、偏光顕微鏡下ではカリ長石と斜長石の判別が難しいものがあり、この染色を行うことにした。カリ長石の染色は、フッ化水素酸とコバルト亜硝酸ナトリウムを使用し、フッ化水素酸の蒸気を薄片の試料面にあて鉱物をエッチングし、コバルト亜硝酸ナトリウム飽和水溶液に浸して染色するもので(公文他1998)、実際の作業に際しては帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏にご指導頂いて行った。

薄片は偏光顕微鏡(オリンパスBX50)で観察し、鉱物・岩片(岩石の破片)の同定を行い、鉱物・岩片

表1-2 土器・砂礫試料の鉱物・岩片組成表(2)

	土器10	土器11	砂礫A	砂礫B	砂礫C	砂礫D	砂礫E	砂礫F		
	風間	上依知	大戸	相原	大戸公会堂	中沢	樋水	当麻		
鉱物	石英	7	47	19	9	13	9	27	4	
	カリ長石	1	1	+	3	+	+	+	+	
	斜長石	10	61	9	8	8	+	14	4	
	黒雲母	3	7	1		1		1	1	
	白雲母		1		+		+	+	+	
	角閃石		3		1			3	2	
	普通輝石	1	6	28	3	5		2	5	
	単斜輝石		1	1						
	カンラン石		?	9		7		+	7	
	緑れん石	+	+	2	+			1	+	
	ジルコン									
	ざくろ石									
	スフェーン									
	緑泥石							1	+	
	その他の鉱物									
	不明鉱物	1	4	5	+	+		6	1	
	不透明鉱物		9	2				2	+	
	岩片	玄武岩	1	1	13	2	27	2	35	51
		安山岩		5	67	14	29	2	10	32
		酸性火山岩							+	
安山岩			1	3	7	5		34	10	
凝灰岩		3	4	20	43	16	5	125	123	
ハンレイ岩						1			5	
ドレライト				4		1			12	
花崗岩類		1	2			3		33	5	
片岩			1							
片麻岩										
ホルンフェルス				1	3	2		3	6	
砂岩		13	23	116	226	310	263	116	109	
泥質岩		5	20	126	97	130	276	45	43	
チャート		+	3	26	34	10	9	7	18	
不明岩片		10	20	18	29	10	1	24	12	
赤褐色粒子		7	9							
基質		384	1272	458	427	368	401	399	445	
合計	446	1500	930	906	946	968	888	895		

のモード測定を行った。モード測定は、顕微鏡観察時に一定の間隔で薄片試料を移動させ、顕微鏡下の中心(十字線の交点)にきた粒子の鉱物・岩片を判定するもので、ポイントカウンター(スイフト社製)を顕微鏡の回転台上に設置して、カウントを行った。公文他(1998)によれば、試料の移動間隔は同一の粒子を2回以上数えることがない程度の大きさでなければランダムな測定にはならず、実際には0.5~1mmの間隔が採られることが多いという。しかし間隔が広いと1枚の薄片当たりのカウント点数は減るので、本研究では薄片の長辺方向に0.6mm、短辺方向に0.5mm移動した。砂礫試料は前述のように2.5mm以下の粒子を選別して観察対象にしたので、0.5mmより大きな粒子があり、今回大きな砂礫では同一粒子を複数回カウントしたものが各薄片中に一定程度存在した。また粒子の同定に際しては、粒子があまりに小さいと鉱物・岩片の同定が困難で、観察者間の誤差も大きくなる。そこで本論では0.05mm以上の粒子を同定し、それ以下のものは基質(マトリックス)に含めた。カウントは土器試料で1500、砂礫試料で1000カウント実施したかったが、土器片は殆どの試料が小さいものであったので、予定のカウント数には遠く及ばず、200~600カウント程度、砂礫試料は900カウント程度であった。

### 3. 分析結果

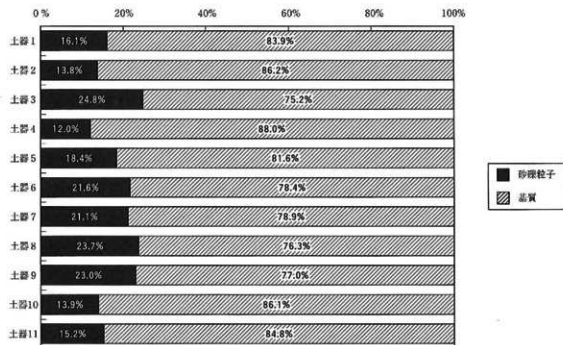
土器試料、砂礫試料の分析結果は表1に鉱物・岩片毎に分けて掲載した。同定に際しては観察者によって同定差が出る可能性があるため、(公文他1998)などを参考に同定に際し次のように留意した。①鉱物は1



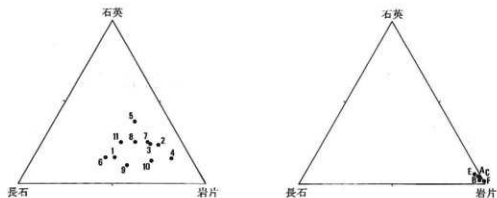
つの粒子が単独の鉱物からなるもの、岩片は1つの粒子が複数の鉱物の組み合わせからなるものとしたが、2つ以上の石英結晶が1つの粒子を構成する場合は石英(多結晶石英)と扱った。しかし多くの石英からなるチャートや、細く伸長した細粒の石英の集合からなる片岩は岩片と扱った。②岩片では光学的に玄武岩・安山岩の区別が困難なものがある。そこで長柱状～針状の斜長石が網目状に散在する間を細粒の輝石やかんらん石が埋める組織(インターサル、インターグラニューラー)をもつものを玄武岩、ガラス質のメソスタシス基質中に針状～拍子木状の斜長石の微斑品が含まれるものを安山岩とした。③火山岩(玄武岩・安山岩など)は多少なりとも変質したものが多いが、変質の度合いが強かったり、岩片が小さかったりして、玄武岩か安山岩か区別がつかないものは変質火山岩類とした。④堆積岩的な組織をもちながら針状の斜長石を含むなど火山岩の特徴を有するものを凝灰岩とした。今回の試料中の凝灰岩は色が緑色～褐色を呈した緑色凝灰岩である。⑤花崗岩類は石英・長石・雲母・角閃石などの等粒状鉱物が集合した粒子とし、単一の鉱物の集合はその鉱物として扱った。本類中には石英閃緑岩も含めた。⑥泥質岩は泥岩・頁岩・粘板岩などをまとめた。表1中の数字はポイントカウンターのカウント数を示す。+はカウント時には顕微鏡の中心に来なかったものの、別の部分に存在していることを示している。

(1) 砂礫含有量: 表1を見ると、各土器・砂礫とも各種の鉱物・岩片を含んでいることがわかる。そこでまず土器試料中の砂礫の含有量を見るために、粘土中の砂礫粒子(0.05mm～2.5mm)と基質(0.05mm以下)の比率を出してみた(第3図)。ここでいう砂礫は鉱物粒子や岩片などで、基質は主に粘土からなっている。第3図に示されているように、土器はいずれも砂礫粒子が少なく、大部分は基質であることがわかる。今回の分析土器試料においては、砂礫粒子は約12～25%の範囲におさまり、基質は約75～88%存在している。土器試料の中では、No 3が砂礫粒子を最も多く含み、24.8%砂礫粒子を含んでいる。

(2) 石英・長石・岩片組成: 次にこの砂礫粒子の中身を見してみる。岩石学において、砂粒を主体とする岩石は砂岩であるが、その砂岩は一般に基質の量と同時に、石英・長石・岩片の相対量が細分されている。石



第3図 土器試料の砂礫粒子・基質比率



第4図 土器・砂礫試料の石英・長石・岩片三角ダイヤグラム 土器試料(左)・砂礫試料(右)

表2 土器・砂礫試料の石英・長石・岩片組成表

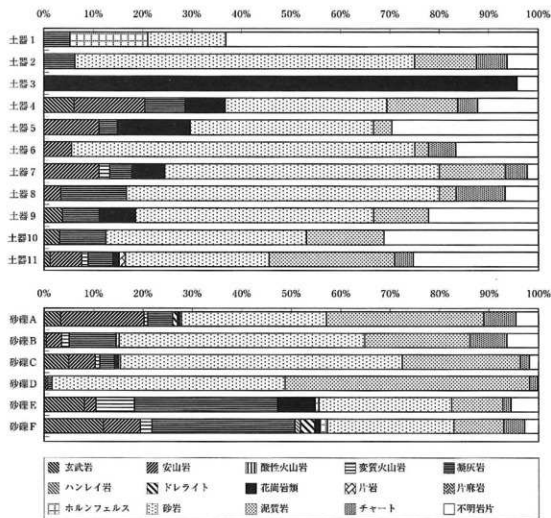
	土器1	土器2	土器3	土器4	土器5	土器6	土器7	土器8	土器9
	風岡	風岡	風岡	風岡	風岡	風岡	風岡	風岡	風岡
石英	15.9%	23.5%	23.8%	15.2%	38.1%	16.0%	25.0%	25.0%	11.5%
長石	40.9%	13.7%	17.5%	10.6%	19.0%	45.7%	18.8%	25.0%	36.5%
岩片	43.2%	62.7%	58.8%	74.2%	42.9%	38.3%	56.3%	50.0%	51.9%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

	土器10	土器11	砂礫A	砂礫B	砂礫C	砂礫D	砂礫E	砂礫F
	風岡	上依知	大戸	相原	大戸公金堂	中沢	鷺水	当麻
石英	14.0%	25.0%	4.5%	1.9%	2.3%	1.6%	5.7%	0.9%
長石	22.0%	33.0%	2.1%	2.3%	1.4%	0.0%	3.0%	0.9%
岩片	64.0%	42.0%	93.4%	95.8%	96.3%	98.4%	91.3%	98.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

英・長石・岩片の量比は母岩の性格や形成環境を反映していると考えられているからである(公文1988)。土器胎土は、自然の営力ではなく人工的な混和の結果できあがるが、製作者が意識的に特定の混和材を選定・混和せずに、周囲にある砂礫を無作為に粘土に混入させれば、周囲の地質の特徴をある程度反映する可能性がある。そこで他地域・他遺跡の土器試料との基礎的比較データとして、石英・長石・岩片の相対量を第4図の三角ダイヤグラムおよび表2に示してみた。長石は大きくは斜長石とカリ長石があるが、ここでは両者を合算した。第4図左および表2を見るとわかるように、土器試料では岩片が多く含まれている。量的に見ると、石英は約11~38%、長石は約13~45%の存在範囲内に収まるのに対し、岩片は約38~74%の存在範囲に存在するのである。一方、第4図右および表2に表れているように、砂礫試料では岩片が極端に多く含まれている。量的に見ると、石英は約1~5%、長石は約0~2%、岩片は約91~98%含まれている。砂礫試料の砂礫は古い時代の河川堆積物であるので、石英や長石などの軽い鉱物は流失したり、風化して変質・分解した可能性がある(註1)。また砂礫試料は採取後、慎重に水洗し、篩にかけ、2.5mm以上の大きな粒子は除去する処理をしたが、試料の洗浄過程でこぼれに流失した恐れもある。しかしそれにしても土器試料と砂礫試料の石英・長石の量はかけ離れすぎている。土器試料中の石英・長石は河川砂礫からではなく、火山灰やそれが風化した粘土など、他の所から供給された可能性が考えられる。供給源は今回の分析では明らかにできないが、土器試料中の鉱物やその他の含有物は単に遺跡周囲の段丘礫層中の砂礫や土器製作当時の河川砂礫だけによるものではないことは理解できると思う。ロー層や粘土層の分析も今後必要である(註2)。

(3) 岩片組成: 次に岩片の組成を見てみたい。ポイントカウント数は表1にある。比率をみたい岩片の種類が3つ以上と多いことから、ここでは棒グラフで組成を示すことにした(註3)。



第5図 土器・砂礫試料の岩片組成グラフ 土器試料(上)・砂礫試料(下)

**土器資料：**まず土器試料を見ても。表1にあるように、土器試料では岩片のカウント数は少ない。今回は試料が小さかったので多くをカウントできなかったが、できることなら、もう少し大形の試料を用い、カウント数を増やしたところであった。カウント数の少なさという問題はあるものの、第5図にあるように、土器試料中の岩片組成にはある程度傾向が見られる。

先に風間遺跡出土土器について見てみる。土器試料1・2・4~10は不明岩片を除き砂岩が最も多く、土器試料3のみ花崗岩類が多い。このうち土器試料1・2・4~10では砂岩の他には泥質岩が大抵含まれ、他に玄武岩・安山岩・花崗岩類・凝灰岩・ホルンフェルス・チャートなどが含まれる。砂岩の次に多い岩片に着目すると次のようにまとめられる。

土器試料1：砂岩が最も多く、他にホルンフェルスを含む。

土器試料2：砂岩が最も多く、泥質岩がそれに次ぎ、チャート・凝灰岩などを含んでいる。

土器試料4・7：砂岩が最も多く、安山岩・泥質岩が次ぎ、凝灰岩・花崗岩類も含まれる。

土器試料5：砂岩が最も多く、花崗岩類・安山岩が次に多い。

土器試料6は砂岩が最も多く、安山岩・チャートが次に多い。

土器試料8は砂岩が最多で、凝灰岩・チャートが次に多い。

土器試料9は砂岩が最多で、泥質岩・凝灰岩・花崗岩類が次に多い。

土器試料10は砂岩が最多で、泥質岩・凝灰岩が次に多い。

ここでいう凝灰岩は色が緑色や褐色をしている緑色凝灰岩で、玄武岩や安山岩とも近いものであった。また花崗岩類は石英・斜長石・角閃石・黒雲母からなる石英閃緑岩であった。

また土器試料3は花崗岩類からなり、砂岩は全く含まれない。花崗岩類を見ると、構成鉱物は石英・斜長石・角閃石・黒雲母からなり、深成岩特有の等粒状組織をなす石英閃緑岩であった。これは鉱物の組成にも表れており、鉱物でもやはり石英・斜長石・角閃石が多くなっている。

上依知上谷戸遺跡出土土器である土器試料11は砂岩が最多で、泥質岩が次に多く、安山岩・凝灰岩などを含んでいる。凝灰岩は緑色凝灰岩である。含有量が上位4番目以降にくる岩片の種類は異なりを見せるが、風間遺跡の土器試料9・10などに近い組成と言えよう。

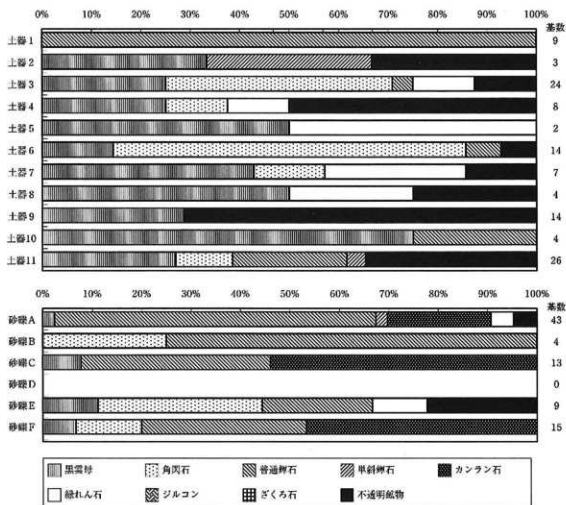
**砂礫試料：**砂礫試料はどうであろうか。風間遺跡周辺の境川流域の礫層中砂礫試料（砂礫試料A・B）は砂岩が最多で、泥質岩がそれに次いで多い。その他では玄武岩・安山岩・凝灰岩・ホルンフェルス・チャートが共通して含まれている。凝灰岩は色が緑色や褐色をなす緑色凝灰岩で、斜長石を含み、玄武岩や安山岩に類似したものもあった。極少量のものとしては砂礫試料Aの方にドレライトや花崗岩類が含まれていた。また現在の境川の河川砂礫である砂礫試料Cも砂岩が最多で、泥質岩がそれに次ぎ、その他に玄武岩・安山岩・凝灰岩（緑色凝灰岩）・ハンレイ岩・ドレライト・花崗岩類・ホルンフェルス・チャートが含まれていた。砂礫試料A・Bに比べると玄武岩の量が多く、近世の宝永スコリア（玄武岩質）などが含まれている可能性が考えられる。しかしそうした違いは全体で見れば大きくはなく、現在の河川砂礫も段丘礫層中砂礫と組成が大きく異なる結果になった。

風間遺跡からはやや離れるが相模川流域の津久井湖北岸の礫層中の砂礫試料Dは砂岩と泥質岩で全体の96%を占めている。カウントの結果は泥質岩の方が砂岩よりやや多いが、その差はわずかなので、両者がほぼ同量で最多の岩片とみてよい。砂岩が多く、泥質岩もある点、砂礫試料A～Cに近いと言える。境川上流域と、相模川上流域の津久井湖北岸付近では砂岩・泥質岩が多いとまとめることができる。

また多摩川水系大栗川流域の御殿峠礫層中の砂礫試料Eは凝灰岩（緑色凝灰岩）と砂岩が多く、泥質岩・玄武岩・花崗岩類（石英閃緑岩）があり、安山岩やチャート・ホルンフェルスが少量含まれていた。

相模川中流域の礫層中の砂礫試料Fは凝灰岩（緑色凝灰岩）と砂岩が多く、玄武岩・安山岩・泥質岩があり、花崗岩類（石英閃緑岩）やチャート・ホルンフェルスが少量含まれていた。砂礫試料E・Fは離れているが、両者は凝灰岩（緑色凝灰岩）と砂岩が多く、玄武岩・安山岩・花崗岩類（石英閃緑岩）・ホルンフェルス・泥質岩・チャートが含まれるという共通点があり、砂礫A～Dとは違いを見せているということができる。これはわかしの相模川が多摩丘陵付近を流れていたことを示していると思われる（大森他1989）。

(4) 鉱物組成：先に石英・長石・岩片組成の項で石英・長石の含有量は示した。ここではそれ以外の鉱物、とりわけ重鉱物組成を中心にみてみたい。重鉱物は重液より比重が重い鉱物をさし、多くの有色鉱物が含まれるが、重鉱物は偏光顕微鏡を用いなくても鉱物種の同定が可能なこともあって、粘土分析においては重鉱物組成を重視して製作地鑑定をしている研究がある。重鉱物組成の提示はそうした他者による研究との対比をする上で必要と考え、本論でも提示することにした。



第6図 土器・砂礫試料の鉱物組成グラフ 土器試料(上)・砂礫試料(下)

土器試料：まずは風間遺跡の土器試料を見てみる。

土器試料1は普通輝石が多い。

土器試料2・5・8は含有鉱物が少ない。土器試料2では黒雲母と単斜輝石・不透明鉱物が各1、土器試料5は黒雲母と緑れん石が各1カウントされたにすぎない。

土器試料3・6は角閃石が最も多く、黒雲母が次に多い。

土器試料4・7は黒雲母・角閃石・緑れん石・不透明鉱物が含まれ、土器試料8も黒雲母・角閃石・不透明鉱物が含まれる。

土器試料9は黒雲母・不透明鉱物が多い。

土器試料10は黒雲母がやや多く、普通輝石が含まれる。

これら風間遺跡の土器試料1～10では、黒雲母を多くないしは比較的多く含む試料(土器試料4・7～10)、角閃石を多く含む試料(土器試料3・6)、普通輝石を多く含む試料(土器試料1)などに分けられ、全体的に共通性があるというより、ばらつきがある。全試料に含まれていたのは量の多少はあるが、黒雲母であった。

上依知上谷戸遺跡の土器試料11は黒雲母・普通輝石・不透明鉱物を多く含む。これらの鉱物は風間遺跡の

土器試料にも含まれていた鉱物で、重鉱物組成を見ると、風間遺跡の10点の土器と上依知上谷戸遺跡の1点の土器には大きな差異を見出すことはできなかった。

両遺跡試料については、黒雲母が共通的に含まれ、角閃石・普通輝石・不透明鉱物のいずれかが含まれるということではあるが、それ以上の傾向は抽出できなかった。

**砂礫試料：**砂礫試料Aは普通輝石が多く、カンラン石もやや多い。砂礫試料Bは重鉱物が少ないが、その中では普通輝石が多い。砂礫試料Cも普通輝石とかんらん石が多い。風間遺跡周辺の境川流域の礫層中砂礫試料（砂礫試料A・B）は普通輝石が多いと言え、現在の境川の河川砂礫（砂礫試料C）は玄武岩が多く含まれていることもあってか普通輝石とカンラン石が多い。境川流域の風間遺跡の土器に共通して含まれていた黒雲母は砂礫試料にはあまり含まれていなかった。

砂礫試料Dは石英や長石は含まれていたが、重鉱物が含まれていなかった。

砂礫試料Eは鉱物が少ないが、その中では角閃石と普通輝石・不透明鉱物がやや多い。砂礫試料Fは普通輝石とカンラン石が多く、角閃石等が少しあった。多摩川水系大栗川流域の御殿峠礫層中の砂礫（砂礫試料E）・相模川中流域の礫層中の砂礫（砂礫試料F）ともに普通輝石が確実に含まれ、角閃石も存在し、試料によってはかんらん石が多く含まれるということができそうである。

この普通輝石・角閃石・カンラン石は境川流域の砂礫試料A～Cにも含まれており、含有鉱物の量に差はあるが、砂礫試料A～Cと砂礫試料E・Fとの間に有意な差を見出すことはできなかった。含有鉱物の量が少ないことも関係しているかもしれないが、今回の分析では境川・相模川上流域・多摩川流域大栗川上流域の砂礫に普通輝石・角閃石・カンラン石が含まれるということは言えても、それ以上の傾向を抽出することはできなかった。

#### 4. 周辺地質と砂礫の特徴

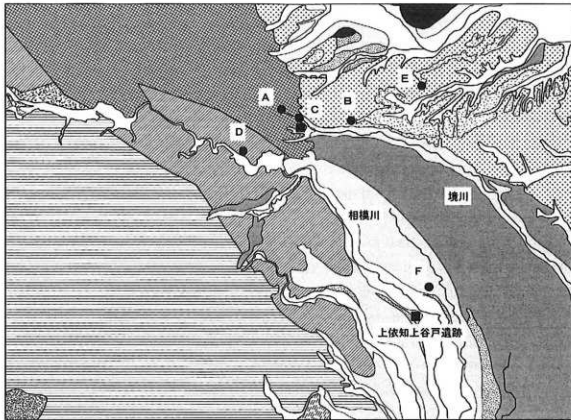
ここでは土器試料・砂礫試料の採取場所の地質的特徴を従来の地質学研究成果から概観し、その後、砂礫の組成と比較して、土器製作地推定の参考になる砂礫の特徴を抽出してみたい。

第7図は今回研究対象とした地域の地質図である。「関東地方土木地質図」（関東地方土木地質図編纂委員会1996）を基本にして第7図を作成した。

これによると多数の土器試料を抽出した風間遺跡は境川流域にあり、基盤に古第三紀の小仏層群が存在する。1点の土器を分析した上依知上谷戸遺跡は相模川流域の段丘（中津原面・立川段丘相当面）に位置する（第7図）。

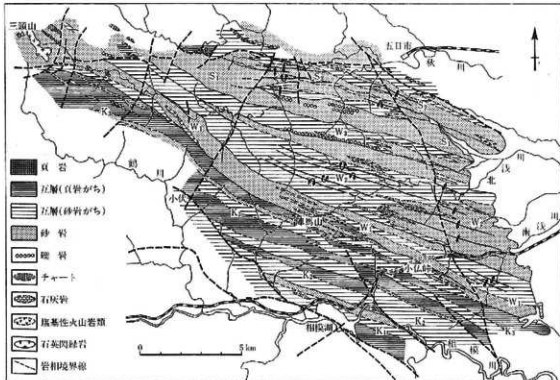
また砂礫試料採取地点を見ると、砂礫試料Aの採取地は境川最上流域、風間遺跡同様小仏層群が基盤にある場所にある（第7図）。砂礫試料Cの採取地もそれに近い。砂礫試料B採取地は境川上流域であるが、第四紀更新世の上総層群下部相当層を基盤としている場所にある。砂礫試料Dの採取地は相模川流域にあるが、古第三紀の瀬戸川層群を基盤にした小段丘（第7図には表れない小規模な段丘）にある。砂礫試料Eの採取地は上総層群上部相当層の御殿峠礫層が堆積した場所にある。砂礫試料Fの採取地は相模川中流域の段丘（田名原面）に存在する。

次に砂礫試料の岩片組成と地質的特徴を比較してみる。砂礫試料のうち境川最上流域、小仏層群を基盤にもつ地域の砂礫試料Aは砂岩が最多で、泥質岩がそれに次いで多く、玄武岩・安山岩・ドレライト・花崗岩類（石英閃緑岩）・緑色凝灰岩・ホルンフェルス・チャートが含まれていた。小仏層群は藤本氏の研究（藤



- |  |       |  |       |  |      |  |      |  |                 |
|--|-------|--|-------|--|------|--|------|--|-----------------|
|  | 小仏層群  |  | 相模川層群 |  | 丹沢層群 |  | 花崗岩類 |  | 上総層群            |
|  | 御殿崎硬層 |  | 多摩面   |  | 下末吉面 |  | 相模野面 |  | 中津原・田名原・横原(立川面) |

第7図 周辺地質図 [1/200,000]



小仏層群：小伏層(K<sub>1</sub>部層, K<sub>2</sub>部層, K<sub>3</sub>部層), 川原層(W<sub>1</sub>部層, W<sub>2</sub>部層, W<sub>3</sub>部層), 袋野層(S<sub>1</sub>部層, S<sub>2</sub>部層)

第8図 南関東における小仏層群の地質図 (牧野1973)

本1931)によれば下位から小伏層・川乗層・笹野層に分けられ、それらの地層は東西に帯状に配列していることが明らかにされている(第8図)(牧野1973)。牧野氏の研究(牧野前掲)によれば、これらの層は砂岩と頁岩の互層や砂岩層を主体とし、礫岩や輝緑凝灰岩(塩基性火山岩類)やチャート、石灰岩が含まれるという。このうち頁岩は泥質岩であり、輝緑凝灰岩(塩基性火山岩類)は玄武岩やドレライト質のものであり、凝灰岩に近いものであると考えられる。また砂岩を構成する岩片の中には砂岩・頁岩・チャート・花崗岩・石英斑岩・安山岩質または玄武岩質頁岩と記されている。また小仏層群北西部には石英閃緑岩(花崗岩類)の貫入が見られ、その周囲には砂岩が変成したホルンフェルスが存在する可能性もある。そのように考えると、砂礫試料Aに見られた、砂岩が最多で、泥質岩がそれに次いで多く、玄武岩・安山岩・ドレライト・花崗岩類(石英閃緑岩)・緑色凝灰岩・ホルンフェルス・チャートが含まれるという岩片組成は、境川最上流域の小仏層群を基盤にもつ地域の砂礫の特徴として成立しようと思われる。

境川上流の上総層群相当層が基盤に存在する場所に位置する砂礫試料Bも砂岩が最多で、泥質岩がそれに次いで多く、その他では玄武岩・安山岩・緑色凝灰岩・ホルンフェルス・チャートが含まれていた。本流域の上総層群は大矢部層ないし平山層と呼ばれるもので、大矢部層は角礫を含む泥岩・凝灰質砂岩などからなり岩相の変化が著しく、平山層は砂岩層からなるという(菊地他1986)。また大矢部層については砂岩・粘板岩・礫岩・チャート・閃緑岩・安山岩・緑色凝灰岩・玄武岩・はんれい岩が含まれているという(大森他1989)。砂礫試料Bは平山層ではなく、大矢部層の小露頭から採取したと考えれば、砂礫試料Bの岩片組成は存在しうる。大矢部層は岩相の変化が著しいとあるから、採取地点によって岩片組成は変わると思われるが、砂岩が最多で、泥質岩がそれに次いで多く、玄武岩・安山岩・緑色凝灰岩・ホルンフェルス・チャートが含まれる組成が存在したと言える。

相模川上流域の津久井湖北岸にある砂礫試料Dは砂岩と泥質岩が多く、玄武岩・安山岩・緑色凝灰岩は極少量のみ存在した。相模川流域であれば丹沢の凝灰岩や玄武岩などが多く含まれてよいと思われるが、それらは少ない。砂礫試料採取地点のすぐ北側に瀬戸川層群が接しており、瀬戸川層群は砂岩や粘板岩の互層からなるということから(酒井他1986)、瀬戸川層群から砂岩や泥質岩(粘板岩)が多く供給されたためと考えられる。砂礫試料Dの礫は円磨度が低かったことも供給源の近さを反映していると言える。津久井湖北岸付近では砂岩・泥質岩が多く玄武岩・安山岩・緑色凝灰岩は僅少という岩片組成が存在したと言えよう。

多摩川水系大栗川流域の御殿峠礫層を基盤にもつ地域にある砂礫試料Eは緑色凝灰岩と砂岩が多く、泥質岩・玄武岩・花崗岩類(石英閃緑岩)があり、安山岩やチャート・ホルンフェルスが少量含まれていた。御殿峠礫層は上総層群を不整合に覆う礫層で相模川の扇状地礫層である(菊地他前掲)。礫層は閃緑岩・緑色凝灰岩・安山岩・粘板岩(泥質岩)・砂岩・チャート・ホルンフェルスなどからなっているという(大森他前掲)。そうして見ると砂礫試料Eの岩片組成と御殿峠礫層の礫層はほぼ一致したと言える。砂礫試料Eには玄武岩が含まれるが、これも丹沢山地に多くあり、相模川に多く存在することから、含まれて問題はないと思われる。多摩川水系大栗川流域の御殿峠礫層を基盤にもつ地域では緑色凝灰岩と砂岩が多く、泥質岩・玄武岩・石英閃緑岩があり、安山岩やチャート・ホルンフェルスが少量含まれる岩片組成は地質的にも支持されよう。

相模川中流域の段丘(田名原面)にある砂礫試料Fは緑色凝灰岩と砂岩が多く、玄武岩・安山岩・泥質岩があり、花崗岩類(石英閃緑岩)やチャート・ホルンフェルスが少量含まれていた。緑色凝灰岩・玄武岩・安山岩・石英閃緑岩・ホルンフェルスは丹沢山地、砂岩・泥質岩・チャートは小仏層群や瀬戸川層群などの関東山地に存在する岩石で、相模川が両者の間を流れることから、両山地の岩石は相模川の段丘礫層に存在



したと考えられる。(上本他1996)の相模川種組成も類似した傾向を示している。緑色凝灰岩と砂岩が多く、玄武岩・安山岩・泥質岩があり、石英閃緑岩やチャート・ホルンフェルスが少量含まれるという砂礫試料Fの岩片組成は、そのような理由から、相模川中流域の段丘礫の岩片組成として存在しようと言えよう。

これら各地点での砂礫試料の岩片組成は、その砂礫採取地と地質的特徴を同じくする地域の土器の胎土の岩片組成に強い影響を及ぼすと思われ、土器の製作地推定の参考材料にあるであろう。

また砂礫試料の重鉱物組成で砂礫試料A・Bは普通輝石が多く、砂礫試料Dは重鉱物がほとんど含まれていなかった。また砂礫試料E・Fは普通輝石が確実に含まれ、角閃石も存在し、試料によってはかんらん石が多く含まれていた。しかしこれらの重鉱物は一緒に砂礫に含まれる岩片から供給される場合と、火山灰などから供給される場合がある。後者の場合は基盤層と全く無関係がないので、地質図との比較検討はしづらい。今回砂礫試料で多かった普通輝石は、砂礫試料中の岩片で多く存在した砂岩には殆ど含まれないものであるから、基盤層の岩石ではなく、火山灰などから供給されたものかもしれない。

### 5. 土器試料の製作地推定

ここでは先に見た砂礫試料の岩片組成を主として参考にしながら、土器試料の製作地推定を行ってみたい。

**風間遺跡出土土器試料：**土器試料1・2・4～10は砂岩が最も多く、また量的な多寡はあるが、泥質岩が大抵含まれ、他に玄武岩・安山岩・花崗岩類・凝灰岩・ホルンフェルス・チャートなどが含まれていた。土器試料3のみ花崗岩類(石英閃緑岩)が多かった。一方風間遺跡の位置する境川上流域の砂礫試料A・Bは砂岩が最多で、泥質岩がそれに次いで多く、玄武岩・安山岩・緑色凝灰岩・ホルンフェルス・チャートが含まれていた。砂礫試料Aには更にドレライト・花崗岩類(石英閃緑岩)も含まれていた。土器試料と砂礫試料を比較すると、土器試料1・2・4～10と砂礫試料は、比較的近い組成を示し、土器試料1・2・4～10は遺跡周辺で製作された在地土器と考えられる。またそれと同時に土器試料1・2・4～10の組成は周辺の地質学的特徴と合致しているため、境川上流域の小仏層群・上総層群(大矢部層)を基盤にもつ地域の在地土器の胎土の特徴と普遍化することができよう。本地域の土器の胎土を分析した河西氏の研究(河西1995)でも泥岩・砂岩が多いという類似した結果が出ており、それを裏付けよう。また土器に特定の混和材を混和しない土器であれば、本地域の他時期の縄文土器・弥生土器・土師器などの在地土器の胎土の特徴も近似したものになると予想される。

他方、唯一土器試料3は花崗岩類(石英閃緑岩)が著しく多く、砂礫試料とは違いが見られる。確かに砂礫試料Aには花崗岩類(石英閃緑岩)が含まれており、小仏層群の西側には石英閃緑岩の貫入が見られる場所がある(第8図)。しかし砂礫試料A・Bに多い砂岩や泥質岩が土器試料3には全く含まれていない。遺跡周辺で製作すれば多少なりとも砂岩や泥質岩が入ると思われ、土器試料3は遺跡周辺以外で製作したと考えおきたい。石英閃緑岩の入った砂礫を外部から遺跡に持ち込み、遺跡周辺の砂礫が全く入らないように作れば遺跡周辺でもできるが、粘土は基盤の砂礫層の上にあることが多く、粘土と共に遺跡周辺の砂礫が入ると思われるので、その可能性は低いのではなからうか。ではその製作地はどこになるのだろうか。小仏層群西側や丹沢山地には石英閃緑岩貫入地域があることから(第7・8図)、そうした石英閃緑岩の分布域およびその周辺で製作したと想定される。距離的には風間遺跡から20～30kmほど離れた場所になる。

なお風間遺跡の土器試料の重鉱物組成では全ての1・2・4～10、3共に黒雲母が含まれ、黒雲母を多く含む試料、角閃石を多く含む試料、普通輝石を多く含む試料などに分けられた。砂礫試料を見ると黒雲母少

なく、土器試料とは差異がある。遠隔地からの搬入土器などを対象とする場合やある特徴的な鉱物に着目できる場合でなければ、鉱物組成から製作地推定することは難しそうだ。

**上依知上谷戸遺跡出土土器試料：**上依知上谷戸遺跡出土土器である土器試料11は砂岩が最多で、泥質岩が次に多く、安山岩・緑色凝灰岩などを含んでいる。一方上依知上谷戸遺跡は相模川中流域の河岸段丘にあるが、川を挟んで対岸の、同じく相模川中流域の段丘にある砂礫試料Fは緑色凝灰岩と砂岩が多く、玄武岩・安山岩・泥質岩があり、花崗岩類（石英閃緑岩）やチャート・ホルンフェルスが少量含まれていた。土器試料では砂岩や泥質岩が多いのに対し、砂礫試料では緑色凝灰岩と砂岩が多いのである。含まれる岩片の種類にはあまり差がないことから、土器試料11を上依知上谷戸遺跡周辺で製作したと言えなくもないが、土器試料11は緑色凝灰岩の量が少なく、砂岩・泥質岩が多いことから、相模川上流域や境川上流域の小仏層群・瀬戸川層群などを基盤にもつ地域周辺で製作された可能性がある。今回の分析では分析対象土器が少なく、相模川中流域の土器の胎土の特徴を抽出することはできなかった。

また鉱物組成では上依知上谷戸遺跡の土器試料11は黒雲母・普通輝石・不透明鉱物を多く含む、砂礫試料Fでは黒雲母は少なく、普通輝石とかんらん石が多かった。ここでは鉱物組成は土器試料と砂礫試料では異なり、鉱物組成では土器の製作地は推定できなかった。

## 6. 結論

今回は相模川・境川上流域の縄文土器の分析を行った。ここで得られた結論を箇条書きにしておきたい。

1、境川上流域の相模原市城山町風間遺跡出土の縄文前期土器10点の分析の結果、9点は遺跡周辺で製作した在地土器、1点(土器試料3)は搬入土器と考えられた。

2、境川上流域に位置する風間遺跡出土在地土器の胎土の特徴をあげる。砂礫粒子は約12～25%、基質は約75～88%存在していた。石英・長石・岩片の三角ダイヤグラムでは石英は約11～38%、長石は約13～45%、岩片は約38～74%の存在範囲に存在し、岩片が多い特徴がある。岩片組成では砂岩が最も多く、泥質岩が大抵含まれ、他に玄武岩・安山岩・石英閃緑岩・緑色凝灰岩・ホルンフェルス・チャートなどが含まれる傾向がある。以上のことは周辺の地質学的特徴と合致しているため、境川上流域の小仏層群を基盤にもつ地域の、縄文前期土器の胎土の特徴として普遍化することができると思われる。また他時期の縄文土器・弥生土器・土師器などの在地土器の製作地推定にも応用できる。

3、風間遺跡出土土器のうち搬入土器と考えられた土器の製作地は距離的に20～30kmほど離れた場所およびその周辺が想定された。本分析は型式学的に同一型式と判断される土器に製作地の違いがあることを示すことができた。

4、相模川中流域に位置する上依知上谷戸遺跡出土土器1点は相模川上流域や境川上流域の小仏層群・瀬戸川層群などを基盤にもつ地域周辺で製作された可能性があり、今回の分析では相模川中流域の在地土器の胎土の特徴を抽出することはできなかった。

5、今回分析対象地域の砂礫試料の特徴は次のとおり。

境川上流域の小仏層群を基盤にもつ地域の砂礫の岩片組成は砂岩・泥質岩が多く、玄武石・安山岩・緑色凝灰岩・ホルンフェルス・チャートが含まれ、ドレライトや石英閃緑岩が少量含まれる。

境川上流域の上総層群（大矢部層）を基盤にもつ地域の砂礫の岩片組成は砂岩・泥質岩が多く、玄武石・安山岩・緑色凝灰岩・ホルンフェルス・チャートが含まれる。

相模川上流域の津久井湖北岸付近の砂礫の岩片組成は砂岩・泥質岩が多く、玄武岩・安山岩・緑色凝灰岩は僅少である。

多摩川水系大栗川流域の御殿砂礫層を基盤にもつ地域の砂礫の岩片組成は緑色凝灰岩と砂岩が多く、泥質岩・玄武岩・石英閃緑岩があり、安山岩やチャート・ホルンフェルスが少量含まれる。

相模川中流域の砂礫の岩片組成は緑色凝灰岩と砂岩が多く、玄武岩・安山岩・泥質岩があり、石英閃緑岩やチャート・ホルンフェルスが少量含まれる。

これらは当該地域の在土器の胎土の参考になるとと思われる。

6、境川最上流域の現在の河川砂礫の岩片組成は、段丘礫層の砂礫の岩片組成とほぼ同じ傾向を示している。本地域では、現在の河川砂礫も土器の製作地推定の比較試料に使用できると考えられた(註4)。

7、遠隔地からの搬入土器などを対象とする場合やある特徴的な鉱物に着目できる場合でなければ、鉱物組成のみから製作地推定することは難しい。

本研究は(財)かながわ考古学財団の平成18年度研究助成を受けて実施した。本研究を行うに際し、神奈川県教育委員会より許可を得て、相模原市城山町風間遺跡・厚木市上依加上谷戸遺跡の報告書非掲載土器を試料として使用させていただいた。また帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏にはカリ長石の染色および鉱物・岩石の同定においてご指導をいただき、同研究所には便宜をはかっていただいた。また平塚市博物館の森積一氏にも鉱物・岩石の同定においてご教示いただいた。お礼を申し上げたい。

#### 註

註1：なお石英については鉱物の中でも風化に強い鉱物であり、風化にはにくいと思われる。

註2：今回の分析対象地域では、砂礫層上のローム層が粘土化した層がしばしば見られ、砂礫の採取地点には良好な粘土層が存在した。また縄文時代の粘土採掘坑が発見された東京都町田市多摩ニュータウン№248遺跡でも御殿砂礫層上の多摩ロームの粘土を採掘している。

註3：岩片は今回前述のような留意点に基づき同定したが、玄武岩と安山岩・凝灰岩は境界が明瞭でない。また砂岩と泥質岩の間も主体となる粒子の大きさで区切っており、連続的である。またホルンフェルスも泥質岩などを母岩とし変質してできるので砂岩や泥質岩との区別が難しい岩片がある。したがってカウントに際しては同定者による多少の個人差が出る可能性がある。

註4：神奈川県茅ヶ崎市の小出川流域の砂礫を分析した際は、現在の河川砂礫と丘陵斜面の砂礫層の砂礫では岩片組成に大きな差があった(松田1999)。現在の河川砂礫は後世の混入物が入る可能性があり、現在の河川の砂礫が比較試料として使えるかどうかは水系毎に慎重に調べていきたい。

#### 引用・参考文献

- 井上 敏 2002「縄文土器の分析」【南原遺跡】かながわ考古学財団調査報告129
- 上木道二他 1996「遺跡出土土器の採取地推定—神奈川県及び周辺地域の河床礫・海浜礫と遺跡出土土器の分析」【神奈川県考古学】32 神奈川県考古学同人会
- 奥田 尚 1997「矢頭(No.35)遺跡出土の縄文土器の砂礫層」【宮畑遺跡(No.34)・矢頭遺跡(No.35)・大久保遺跡(No.36)】かながわ考古学財団調査報告25

- 大森昌衛他 1989『東京の自然をたずねて』日曜の地学4 築地書館
- 及川良彦他 2000『多摩ニュータウン№247・248遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告80
- 及川良彦・山本孝司 2001『土器作りのムラと粘土採掘場』『日本考古学』11 日本考古学協会
- 河西 学 1995『市兵衛谷遺跡第Ⅱ群土器の胎土分析』『市兵衛谷遺跡・新道遺跡』綾瀬市埋蔵文化財調査報告4  
1999『綾瀬市土土棚南遺跡出土縄文後期土器の胎土分析』『綾瀬市史研究』6
- 河西 学・阿部芳郎 1994『綾瀬市土土棚遺跡出土の縄文後期土器の胎土分析』『綾瀬市史研究』創刊号
- 神奈川の自然をたずねて編集委員会 2003『神奈川の自然をたずねて』日曜の地学20 築地書館
- 上條朝宏 1979『上浜田遺跡出土縄文土器の胎土分析結果について』『上浜田遺跡』神奈川県教育委員会  
1983『縄文土器の製作 胎土分析Ⅰ』『縄文文化の研究 5 縄文土器Ⅲ』雄山閣  
1986『一次館物からみた土器の胎土分析』『橋本遺跡 縄文編 本文』相模原市橋本遺跡調査会
- 関東地方土木地質図編纂委員会 1996『関東地方土木地質図』
- 菊地隆男・酒井彰他 1986『日本の地質3 関東地方』共立出版株式会社
- 公文富士夫・立石雅昭 1998『新版 厨砂物の研究法』地学双書29 地学団体研究会
- 栗原伸好・松田光太郎他 2007『上伏知上谷戸遺跡』かながわ考古学財団調査報告214
- 古城 泰 1981『縄文中期土器の岩石学的分析』『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書1980年度(№6遺跡-1)』
- 陸羽性堆積物研究会 1993『堆積物の研究法—礫岩・砂岩・泥岩』地学双書24 地学団体研究会
- 藤根 久他 2007『縄文早期の土器胎土の材料分析』『多古上山神遺跡第Ⅱ地点』かながわ考古学財団調査報告216
- 藤本治義 1931『小仏層に就いて』『地質学雑誌』38-453
- 牧野泰彦 1973『小仏層群の層序学的ならびに堆積学的研究』『地質学雑誌』79-4 日本地質学会
- 松田光太郎 1999『臼久保遺跡出土縄文土器の偏光顕微鏡観察による産地推定』『臼久保遺跡』かながわ考古学財団調査報告60  
2000『坪ノ内・宮ノ前遺跡(№17)出土縄文土器の胎土分析』『坪ノ内・宮ノ前遺跡(№16・17)』かながわ考古学財団調査報告77  
2004『山ノ神遺跡の縄文土器の胎土分析』『山ノ神遺跡・廣見塚遺跡』かながわ考古学財団調査報告171
- 松田光太郎・建石徹 1999『関連科学研究 胎土分析』『縄文時代』10 縄文時代文化研究会
- 松田光太郎他 2005『風間北遺跡・風間遺跡』かながわ考古学財団調査報告178 (財)かながわ考古学財団
- 三辻利一 1999『臼久保遺跡出土縄文土器の蛍光X線分析による産地推定』『臼久保遺跡』かながわ考古学財団調査報告60
- 水谷伸治郎他 1987『日本の堆積岩』岩波書店

研究紀要13

かながわの考古学

発行日 2008 (平成20)年3月25日

発行 財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 横浜市内南区中村町3-191-1

tel (045)-252-8689 fax (045)-262-8162

<http://www.planet.pref.kanagawa.jp/city/koukogaku/zaidan.htm>

印刷 野崎印刷紙器株式会社

# KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol. 13

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

## CONTENTS

Project Team for Palaeolithic Studies: Palaeolithic Artifacts in Kanagawa Prefecture Distribution (I) Layer LIS ~ LIH (I).....	1
Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (VII): An Example in the earliest Late Period. An Aspect of the Shomyoji-Type Pottery Period, Part 3: Cultural Aspect (I) .....	21
Project Team for Yayoi Period Studies: A Study of the Miyanodai - Type Pottery (6) .....	31
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (5): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note" .....	43
Project Team for Nara-Heian Period Studies: Aspect of Tile of Village Ruins excavated in Kanagawa Prefecture .....	57
Project Team for Medieval Age Studies: The Corpus of "Yagura" (horizontal loam-cut cave burial chamber of the Kamakura period) in Kanagawa Prefecture (6): Analysis of relics unearthed from "Yagura" .....	77
Project Team for Early Modern Age Studies: The Corpus of Common Houses in the Early Modern Age (5) .....	93
Matsuda Kotaro: Basic Studies on the Material Analysis for Estimation of Production Area in Kanagawa Prefecture : On the Jōmon Pottery at Upper Basin of Sagami River and Sakai River .....	109

---

March, 2008

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan